



プレスト・チャンゴ

Presto Chango

ブライアン 作

前橋梨乃 訳

Contents

(タップすると、章頭に移動します。)

第 1 章	第11章
第 2 章	第12章
第 3 章	第13章
第 4 章	第14章
第 5 章	第15章
第 6 章	第16章
第 7 章	第17章
第 8 章	第18章
第 9 章	第19章
第10章	

第1章

観客たちはひとことも発せず、ステージ上に目を凝らしていた。

彼らが座っているのは、カジノのホール。ネバダ州デッドスプリングスにある、さほどグレードが高いとは言いがたいカジノホテルである。

デッドスプリングスは、ここ数年、第二のラスベガスとして売り出そうとしていたが、あまり成功しているとは言えない。不幸なことに、地名(“Dead Springs”)は不吉だし、かつて使われたいくつかの核実験場が近いのも余計に恐怖心を煽る。その上、周辺にたいしたスポットもないとあっては、観光客をだます要素さえほとんどないのだ。

「ネロズ・パレス」という名のこのホテルは、そんな町でいちばん大きなホ

テルではあった。

今、観客の視線を集めているのは、ステージの二人の人物。

一人は、23歳くらいのタキシード姿の男。目を見張るほどかっこいいというわけではないが、ルックスは悪くない。平均的な身長で黒髪、体格だけは同年配の男にくらべがちりしている。今まさに、彼は、巨大なドリルマシンにくくりつけられようとしていた。

彼は、「ブライアン・ザ・グレート」という名で知られるイリュージョニストで、エスケープ・アーティスト。ちなみに、彼の運転免許証には「ブライアン・ハワード」という名が書かれている。彼はマジックを愛していたが、仕事はきらいだ。

もう一人、その「偉大なるブライアン」をドリルマシンに手枷足枷しよう

としている人物は、よく「モデルとしても食べていけそうだ」と言われる。もっとも、そんなことを言うのは、たいてい彼女をベッドに誘いたがっている酔っぱらいの出張ビジネスマンだったから、彼女自身は真に受けてはいない。

とはいえ、実際、彼女がかなりの美人であることは確かだ。漆黒の長い髪にすらりとした脚、形よく突き出た胸を持っている。顔もとてもかわいく、化粧をとってもじゅうぶんにいけそう。20歳くらいに見えるが、実際には、ブライアンより少しだけ上である。

彼女はビキニトップにレザーのミニスカート、そして網タイツをはいている（ホテルのマネージャーが、客引きのため、強く主張したからだ）。

名前は、トレーシー。ブライアンがマジジャンになって間もない頃から、

ずっとアシスタントを務め、また友人でもある。彼女はブライアン自身よりもこの仕事を愛していたが、人生をこれだけで終えるつもりはなかった。

「さて、レディス・ン・ジェントルメン——」

マジシャンが、客席に向けて語りかけた。

「今、この美しいトレーシーが私を拘束し、私は、今夜のショーで最も危険なトリックをはじめることとなります。私が合図するとともに、トレーシーがこの死の粉碎マシンをスタートさせます」

彼はうなずくようにしてドリルを動かす合図を送り、つづけた。

「もし、私が30秒以内に、この手首足首の枷から逃れられないのなら、その悪魔のドリルによって串刺しされることになるでしょう。私の凄惨な死の目

撃者になりたくないという方は、どうぞ、今のうちに、ご退席ください。…
…いや、ご心配なく。私には、かつて、チベットとインドで、魔術の導師に教えを請うた経験があります……」（じつのところ、彼は、メキシコのティファナに小旅行した以外、国外に出たことなどないのだが）「……そして、物質的な拘束から免れる術を学んだのです」

その言葉の途中、トレーシーはレバーを引き、マシンをスタートさせていた。

ブライアンは、枷から抜けようともがいた。

ドリルは刻一刻と彼の体に近づいき……

……25秒後、ブライアンは、そのドリルマシンの横で、観客に向かってお辞儀していた。本当のことを言えば、

十秒ほどあれば、そのマシンを抜け出すことはできたのだが、サスペンスをぎりぎりまで長引かせたのだ。

そこで彼は、このカジノについての見え透いた宣伝文句を二言三言並べ、さらに観客への感謝の意をつけ加えた。

トレーシーと手をつないで頭を下げたところで、幕が下りた。

トレーシーとブライアンは、むっつりとしたまま歩き、散らかりっぱなしのブライアンの楽屋に入った。

二人きりになると、ブライアンは、氷のように冷たい眼差しをトレーシーに向けた。

「君は、僕にどうしろって言うんだ」

彼はそう切り出した。

「ブレイクのチャンスを、僕はずっと待ってたんだ。こんな幸運は、二度と

来ないかもしれないんだぞ」

二日前、客席にいたひとりの男が、終演後にブライアンとトレーシーのところにやってきた。

その男は、ラスベガスのメジャーなカジノホテルのタレントスカウトだと名のった。そして、ブライアンたちの舞台に感銘を受け、そのカジノで一年間上演するという長期契約を申し出たのだのだ。

それはまさに、ブライアンの夢だった。彼はずっと、より高級な場所で、多くの観衆を前にパフォーマンスすることを望んできた。「ネオズ」がベストだったのは、これまでそれが無理だったからにすぎない。

男の示した契約は、一年間で、今二人が三年かかって稼いでいるギャラをもらえることになっていた。それは、ブライアンが思い描いていた最終的な

ゴールと言ってもさしつかえないものだった。

しかし、そこには、大きな問題が横たわっていた。トレーシーが、ラスベガスへ行くのを望んでいないことだった。

トレーシーは、ブライアンの目を見返すと言った。

「ごめんなさい。私もあなたの言うとおりにしたいわ。これがあなたにとってどんな意味を持つのか、私にはよくわかってるから。でも、知っているとおり、私は今、恋愛中よ。二ヶ月うちには結婚することになる。だから、ラスベガス行きという手は、私のカードにはないの」

二・三ヶ月前だった。ブライアンは、自分が鎖でしっかり縛られていることを確認させるために、観客をひとり舞台上に上げた。協力してくれたのは、デ

ービッド・ステップストーンという男だった。彼はオーストラリアから来たビジネスマンで、不運なことに、彼の会社の旅行代理店がデッドスプリングス観光協会の主張を信じたせいで、出張旅行の宿泊先として、ここに泊まっていたのだ。

舞台の上でデービッドとトレーシーの目が合った瞬間、なにかのスイッチが入る音がした。そしてその夜、デービッドはトレーシーをディナーに誘った。それから毎週、週末になると、彼はトレーシーに会うために、わざわざ自国から飛行機でやって来るようになった（彼は裕福なのだ）。

最近では、トレーシーは彼のことばかり話し、ブライアンをあきれさせていた。

そして一週間ほど前、デービッドはある質問を口走り、トレーシーはそれ

にイエスと答えた。その結果、近々二人は結婚し、オーストラリアに住むことになったというわけだ。

ブライアンにとって、これは、もちろん悪いニュースだった。

「ちょっとの間でも、結婚式を伸ばすことはできないのか？」

ブライアンは、答えを知っていたながら聞いた。

「ノー、もちろんだめよ。それにね、あなたは、私のことを買いかぶり過ぎよ。私はマジシャンじゃない。単なるアシスタントなのよ。ラスベガスなら、もっときれいな顔の子をいくらでも見つけられるはずよ」

トレーシーの言葉に、ブライアンは腹立たしげに言った。

「きれいな顔？　きれいな顔だって？　君は、君自身が、僕にとってそれだけの存在だとでも思ってるのか？　ト

レーシー、君がいなかったら、僕は、自分の舞台の半分も進行できないんだぜ」

たいていのマジシャンの美人アシスタントは、ただそこに立っているだけの仕事をしている。でも、トレーシーの場合は、けっしてそうではなかった。トレーシーは、ブライアンがトリックを進めるのに欠かせない存在なのだ。

彼女は、ブライアンが「消えろ」とおまじないをかけた物を、即座に手の中に隠すことができた。エスケープトリックに必要な鍵穴用のピックや透明キーを、そっと手渡すこともできた。観客の注意がどこかよそに向いてほしいと思う時は、彼女がうまくそれを誘導してくれた。彼女には、すべてのきっかけがわかっていた——いつ立てばいいか、なんと云えばいいか、いつ笑い、いつ怖がって見せればいいのか、

何をすればいいのか……。

彼らのショーは、ここまで二人でつくってきたものなのだ。

「いいかい、トレーシー」

ブライアンは、口調を穏やかにしてつづけた。

「もし他のアシスタントをさがして訓練するとしたら、少なく見積もっても三か月はかかる。で、その間、僕は、いちばんベーシックなネタしかできないってわけだ。ちょっと複雑なことさえ君なしには無理なんだからな。その無理をおして『デンジャラス・エスケープ』のどれかをやろうという気には、とてなれないよ」

「デンジャラス・エスケープ」こそが、彼のパフォーマンスのウリだった。

と、トレーシーは、ため息をつきながら言った。

「もし、デービッドに出会っていなか

ったら、私もあなたと同じように、ベガス行きに興奮してたでしょうね。でも、偶然の結果、こうなってしまった。私は、前みたいに若くはないのよ。子供だって産みたい。裸同然の服を着て、町の酔っぱらいたちの気をひくのに、もう疲れちゃったしね。この世界を引退して、ふつうの生活をしたいの。私はデービッドを愛してるし、決めたことを変える気はないわ。ごめんなさい、ブライアン。あなたは最高の友達よ。でも、これは、あなた自身で乗り切るしかないことだと思うの」

「……わかったよ」

「きっと、うまくいくわよ」

トレーシーは、自分自身納得していないような口調でなぐさめた。

「ああ、かならずうまくいくさ。まあ、いつかはまた、別のオファーだってあるだろうし。なるようになるってこと

さ」

ブライアンは、さらに納得していない様子で繰り返した。

トレーシーは、ブライアンの手を軽く叩いたあと、立ち上がり、自分の楽屋へと向かった。

トレーシーが出ていくと、ブライアンは机の上からスコッチの瓶をとり、グラスに注いだ。彼は、自分自身をごまかしきれなかった。このベガスの仕事は、絶好の機会（訳注 “one time shot” : 「ウイスキーを割らずに飲む」意もあり）だ。

そして、トレーシー抜きでは、つかみ得なかった機会でもあるのだ。

グラスを手にし、ブライアンは、トレーシーと出会った時のことを思い出していた。

あれは、何年も前のことだ。彼はまだ、デッドスプリングスの町のストリートマジシャンだった。トレーシーの

方はウエイトレスをしていた。彼がパフォーマンスしているところに通りかかった彼女が、立ち止り見てくれた。そして、終わったあともその場に残って話しかけ、ちょっとしたアドバイスをしてくれたのだ。二人はすぐに友だちになった。

そして、「ネロズ」の仕事をもたらした時、ブライアンはトレーシーに、アシスタントになってくれと頼んだのだった。

トレーシーとブライアンは、それ以来、ずっといっしょに過ごしてきた。一時期、二人は恋人同士だったことすらある。二日と離れていない同じ時期に、ブライアンがガールフレンドにふられ、トレーシーがボーイフレンドにふられたことが原因だった。すっかり落ち込んでいた二人は、お互いの腕の中にやすらぎを見出したというわけ

だ。

そのロマンスは満ち足りたもので、二人の精神的立ち直りを助けた。でも、長くはつづかなかつた。二人とも、それまで持ちつづけた平等な友人関係がなくなっていくのを感じていた。二人でいる時間の多くをセックスに費やしてしまい、そのことで、以前のようにいっしょになにかに取り組んでいるという感じがしなくなってしまったのだ。

ほぼ一ヶ月後、二人はもとの友人関係に戻ろうと決めた。そして実際に——多くの別れたカップルにはむずかしい——そんな関係を、二人は築いてきたのだ。

ブライアンは、口の中でぶつぶつ言いながら、もう一杯注いだ。

トレーシーの言ったことは正しい。彼女は、自分自身の人生を歩むべき

だ。ブライアンには、デービッドなら彼女を幸せにできることがわかっていたし、彼自身も、彼女の幸せを望んでいた。

ブライアンは振り向き、この部屋のもうひとりの住人に目をやった。彼がマジックに使う、うさぎのハービーだ。「また二人だけになっちゃったな、ハーブ」

ハービーは、それにはノーコメントだった。

「ベガスの仕事がなんとかうまくいけばいいけど……。とても、そうなるとは思えない。残念だけど、いいアシスタントが、そんな簡単に見つかるわけがないしな」

ブライアンは、椅子の背もたれに体をあずけてストレッチを始めた。

もう少ししたら、トレーシーのところに謝りに行こう。そして、彼女にお

祝いを言おう。

でも、今しばらくは、何かもつといい手がないか考えてみよう。

しかし、ブライアンの頭には、ひとつたりともいい考えは浮かばなかった。

トレーシーはまだ、彼女の楽屋の鏡の前にいた。そして、30分前のブライアンとの会話を悔やんでいた。自分はひどい言い方をしすぎたかもしれない。結婚が迫っていることに有頂天になり、ブライアンがどれほどがっかりしてているか、考えていなかった気がする。

ブライアンの言ったことは正しい。

ラスベガスへ行っても、能力のあるアシスタントがいなければ、成功はおぼつかないだろう。不幸なことに、そんな人間は自分しかいない。

なんと言っても、ブライアンの芸の中身を理解している唯一の存在は自分なのだ。

そこで、トレーシーは、ちょっと考え込んだ。

そして、トレーシーの頭には、ひとつだけいい考えが浮かんだ。

私が唯一の存在じゃない。……レイがいる！

レイは、マジックの舞台の裏方を主な仕事としているホテルの従業員だった。ブライアンやトレーシーとも仲がいい。ちょっと訓練すれば、完璧なアシスタントになるだろう。彼なら……。

いや、やはり、だめた。男のアシスタントを使っているようなマジシャンはいない。たいていは美人の女性を使っているものだ。レイでは無理だ。でも、たとえば……。

たとえばレイなら、うまくやれば、

美人の女性になれるのではないか！

そのアイデアは、思うほどむずかしくないような気がした。

トレーシーは、頭をめぐるせた。

レイは体が大きくはない。身長は彼女より小さい。毛深くないし、胸毛もない。細身で筋肉質でもない。多少そばかすが目立つが、それは、肌が抜けるように白くてきれいだからだ。さらにいちばんいいことは、赤毛の長髪だということだ。ちょっとメイクをすれば、女らしく見えるはずだ。

トレーシーは、頭の中で、レイの像を思い描いてみた。それに、似合いそうなドレスを着せてみる。メイクとマニキュアを施してみる。ハイヒールを履かせ、髪はフェミニンなカットにする。イヤリングをつけ、胸とヒップには詰めものをする。すね毛を剃って眉毛を抜く。

そこに、女として大事なことをちょっと教え込めば、レイは、立派に若い女性として通るだろう。少なくとも、舞台の上なら。

レイは、ブライアンのアシスタントになれるにちがいない。しかも、かなり美人の！

しかし、そこには二つの大きな問題があった。ひとつはブライアンがこのアイデアに賛成しないだろうということ。ふたつ目は、さらに大きな問題、レイにどうやって納得させるかということだ。まるまる一年もの間、「レア」として働くことを。

まあ、ブライアンには、納得させることが——少なくとも考えてみさせるくらいは——できる気がする。

でも、レイは？

彼はなんと思うだろう？

それでもやはり、トレーシーには、

それこそが唯一の解決策だと思えた。

第2章

トレーシーが戻ってきた時、ブライアンはまだ、椅子に座ってストレッチをつづけていた。先刻、彼女に大声を出したことを詫びようとする前に、彼女は、今のジレンマに対するすてきな解決策を思いついたと言った。

「……ほんとに？」

ブライアンは、その解決策とやらが有効なものであることを祈りながら聞き返した。

「レイに、アシスタントになってもらうのよ」

トレーシーが、顔をにこにこさせながら言った。

「彼なら、私たちのショーをよくわかってるし、ちょっとした訓練さえすれば、すぐに私と同じように……」

「冗談だろ！」

ブライアンは彼女の言葉をさえぎった。

「それはナンセンスだ。提案してくれたのはありがたいよ。でも、意味がない。僕がほしいのは、女性アシスタントだ。レイは、それに当たらない。僕がこれまでに見たマジシャンのうちで、男のアシスタントを使っていたのは、女のマジシャンだけだ」

「もう少し、聞いてよ。私だって、男としてのレイじゃだめなことくらいわかってるわ。でも、もし、レイが男じゃないとしたら？ 彼が、女だとしたら？」

「だから、それこそ、僕の問題に対する正解ということだろ。残念ながら、レイは女じゃない」

「私は、それを換えられると思うの」
その言葉に、ブライアンはぽかんとした。

「何が言いたい？」

「いい？ 新しい衣裳、ヘアカット、本格的なメイク、あと、いくつかの『改良』をすれば、レイをそこそこの女性に見せることはできると思うの」

ブライアンは、その言葉に頭をめぐらせた。

トレーシーのメイクの腕は確かだ。カジノの仕事がオフシーズンに入った時など、他の女性パフォーマーのメイクを受け持って稼いでいたりもする。

レイは、確かにマッチョな男ではない。ちょっと、いや、かなり繊細な感じがする。ベガスの仕事が始まる前までに、アシスタントとしての役割を身につけることも可能だろう。観客席との距離はそれなりにあるから、観客たちは誰も、彼がじつは男であることを見破れないかもしれない。

しかも、手近な解決策だ。かなり魅

力的であると思えてきた。

「それで、レイは、ほんとにそれを承知したのか？ どう考えても、彼がそんなことに同意するとは思えないんだけど」

「そうね……」

トレーシーは、ちょっと言い淀んだ。「正確に言えば、彼は同意してないわね。実際の話……、私、まだ彼に話してないから。まず、あなたのオーケーをもらわなきゃいけないと思って」

ブライアンは、いきなり現実に戻されていた。

「えっ、まだ、話してない？　じゃあ、なぜそんなに自信ありげなことを言えたんだ？　もし、話したとしたら、彼は、君のことを笑うだろうよ。どこの世界に、一年間も、女の子になることを納得する男がいるって言うんだ」

「落ち着いて、ブライアン。それは、

ひと晩二回のショーのためだけでしょ。それ以外の時は、彼自身でいればいいんだし」

「いや、そうはいかない！ いいか、もし、カジノが彼を女性として雇ったとする。当然、彼らに男の姿は見せられない。ショーの時だけにかぎらず、リハーサルでもスタッフ・ミーティングでも、その他でも、仕事場で誰かといえるような時はすべて、彼は女の服を着てなきゃいけないってことだ。その上、仕事場にいつも女装して現れなきゃいけないわけだから、けっきょく彼は、家でもそれを着てなきゃいけないことになる。隣近所の人が女物の服を着て出勤する彼を見たら、彼らは、彼のことを男だとは思わないわけだからな。ギャラにしたってそうだ。女性名で振り出された支払い小切手を換金しようと思ったらどうなる？ 銀行は、

女装した彼にしか払わないだろうよ」
トレーシーの顔から笑いが消えていた。

「……私、そこまで考えなかった」

「でも、それはまだ、主要な問題じゃない。もし、レイが本物の女の子でないことが世の中にバレたら、カジノの評判を落として損失を与えることになる。僕らは首になり、訴えられる。そして、エンターテインメント業界に二度と復帰できなくなるのは保証つきだ。僕のキャリアはそこで終わり、レイは残りの人生を屈辱の中で暮らすはめになるってわけさ」

「……う、うん。やっぱり、つまらないアイデアだったみたい」

トレーシーの言葉に、ブライアンはそこでいったん、話をとめた。

またトレーシーに対して怒鳴っていたことに気づいたからだ。

「いや、まあ、つまらないことはないさ。実際それは、かなり賢い解決方法だと思うよ。でも、とてもうまくいくとは思えない。もし、成功する唯一の道があるとすれば、それは、僕らがレイに、女として生活することを納得させた時だけだ。24時間、12カ月間ね」

「彼にそれを納得させるのは、無理でしょうね。たとえ、どんな説得の手段をとったとしても」

ブライアンはそれを肯定しようとして、そこでまた言葉をとめた。レイが魅力を感じるような、なんらかの説得手手段はないだろうか？

そう。手っ取り早い方法としては「金」がある。

ブライアンのアシスタントの仕事は、かなりの金になる。そして、トレーシーはよく知らないだろうが、レイは金に困っている。それも、かなり困

っているようなのだ。

彼の両親がどうなったのかは知らないが、すでに彼は親と同居していない。まだ17歳でしかないのに、自活のために、二年前に高校を退学したと言っていた。勉強をあきらめていないにもかかわらずだ。

ブライアンは、レイがさらに深刻な経済的問題を抱えているらしいことも知っている。カジノの仕事だけでなく、他に二つの仕事を掛け持ちしているようだ。

昼飯の金さえじゅうぶんには持っていないらしく、ブライアンがおごってやったことも何度となくある。

一度、仕事のあと、彼を家まで車で送ったことがあるのだが、そのアパートが、デッドスプリングスの標準よりかなり下だったのを見て、ブライアンはショックを受けた。

今度の仕事は、ブライアンにとって、人生の喜びと、そしてたぶん、新車をもたらすチャンスだと思っている。そして、もしかするとレイにとっても、それは、これまで送ってきた痛ましいほどの貧しさから脱出するチャンスになるかもしれないのだ。

他にもまだある。レイは一度、自分の夢について語ったことがある。彼は、俳優になりたいと言っていた。ただ、レイは、現実が見えている子だった。そんな幸運は、まずやってこないだろうということもよくわかっていた。ことに、なんの訓練も受けたことのないやせこけた少年には。しかしそれでも、レイは、いつもそんな夢を頭に描き、ある日やって来るかもしれない幸運に希望を抱いているのだ。

もしかしたら、レイに、女になることはひとつの役を演じることだとし

て、納得させることはできるかもしれない。けっしてオーソドックスな役ではないとしても、役にはちがいない。

ブライアンは、トレーシーを見て言った。

「僕らは、レイを納得させられるかもしれない。あくまで可能性としてだけどね。ちょっと、聞いてくれ」

ブライアンは立ち上がっていた。

「とりあえず、彼に君のアイデアを聞かせて、彼がどう思うか見てみよう。おそらく最初は『ノー』と言うだろう。それは、まちがいないと思う。でも、その後、彼はよく考えて、それが、自分にとってのチャンスだと思うようになる。僕らが、膝をまじえて、説得することでね。まあ、彼は反発するだろうけど、でも、僕は賭けてみたいんだ」

トレーシーの顔に笑顔が戻った。

「私、さっそく彼に話してくるわ。あ

「あなたのために、うまくいってほしいと
思ってる」

彼女は、ブライアンを軽く抱きしめると、出て行こうとした。

「ねえ、トレーシー」

ブライアンはそれを呼び止めた。

「なに？」

「僕はまだ、君の婚約におめでとうを
言ってなかったよね。グッド・ラック。
君には幸せになってほしいと思っ
てる」

トレーシーは、もう一度彼に笑いかけ、部屋を出た。

ブライアンは、その後ろ姿を見つめたあと、これ以上スコッチを飲むのはよくないと考え、ビールを取り出した。

今度の仕事がうまくいくように、彼は神に祈った。親友がオーストラリアに行ってしまうということ以上に、あれやこれやの問題があったとしても。

なんせ、もう一人の親友であるハービーは、頼りにならないのだ。

20分後。

レイが、ドアを蹴破るようにして、ブライアンの楽屋に飛び込んできた。彼は怒りに満ちていた。

「あ、あなたは、僕のことを、ホモだとでも思ってるんですか！」

ブライアンに対して、ほとんど怒鳴るように言った。

ブライアンは、何も返事ができなかった。口の中がいっぱいだったからだ。

彼の口の中には——そしてじつは、食道の大部分にも——長さ2フィート半の日本刀のレプリカが入っていたのだ。それは、去年の夏、レノで開かれたマジシャンズ・コンベンションで、仲間とポーカーをやった時の戦利品だった。

ブライアンには、おかしな趣味がある。リラックスしたい時、剣やナイフを呑み込むのだ。トレーシーやレイも含め、多くの方は、それを見て気味悪がるが、ストレスから解放されるために、これ以上いい方法は考えられない。剣を呑み込むには、100パーセントのコンセントレーションが要求される。そのことが、他のさまざまな煩いを、この小さな部屋から追い出してくれるのだ。

「ホヘハ……ハイホウ……ヒハイフフ……」

ブライアンは、もぐもぐ言いながら、その武器を引き抜き始めた。

その間、彼は、危険を承知でレイの方を見た。レイは、まちがいなく頭に来ていた。どうやら彼は、女装者になってくれという要請を快く思っていないらしい。

さらにブライアンは、二秒ほど彼を観察した。確かにレイは、もともと、女らしい要素を備えているように見える。それが外見に顕著に現れているわけではないし、けっして全体の印象がオカマっぽいわけでもない。

しかし、「レア」を重ね合わせて見るのに、さほどの想像力は必要なかった。ふっくらした唇、高い頬骨、ほとんど目立たない喉仏……それらは、うまく機能するにちがいない。

ブライアンは、剣を抜き終わり、サヤにおさめながら言った。

「今の君の言葉は、僕の採用通知に対する答えだのとればいいのか？」

「……採用通知っ!? やっぱりあなたは、僕のことをホモかなにかと勘違いしてるんだ。女の服を着るなんて、僕がそんな、変態に見えますか？」

レイはまた、叫びながら繰り返した。

「落ち着け、レイ。いや、もちろん僕は、君のことを倒錯者だなんて思ってやしないさ。頼むから、一分間だけ、僕の話聞いてくれ」

ブライアンは、レイのためにもうひとつ椅子を出しながら言った。

「ビールでも飲まないか？」

「いえ、けっこうです」

ブライアンは、自分のためにもう一本、栓を抜いた。

彼がこれだけ飲むのは、珍しいことだ。でも、話を彼のピッチにするためには、自信を引き出すためのものが何か必要だった。

「さて、よく聞いてくれよ、レイ。もし僕が、君に対しておかしい印象を抱いているのだとしたら、逆に、こんなことは頼めはしないさ。君のことを、女装趣味だなんて思ってないし、ゲイだなどとも思っていない。僕が君に頼

んでいるのは、君が、僕とトレーシーを除いて、誰よりも僕らのショーについてわかっているからだ。それ以外の理由なんてないさ。アシスタントがいなきゃあ、今度の仕事が受けられないのはわかるだろ」

この言葉は、レイの気持ちを落ち着かせたように見えた。

「まあ、それはわかります。でも、12か月も性を変えろなんて、むちゃくちゃな話ですよ。僕はあなたの手助けができたらいいとは思ってます。でも、それは非常識すぎます」

「うむ、しかし、本当に非常識だろうか？ 君は、この話が、どのくらいお金になることなのか、わかってのか？」

レイは、それに首を振った。

そこで、ブライアンは、その数字を告げた。

レイは驚きを隠そうとしたが、隠し

きれなかった。

「……そんなに？」

信じられないという感じで口走っていた。

「それプラス必要経費。もし一年間ずっとこの仕事をしたとすれば、君はそうとう蓄えができるはずだ」

レイは、考えこんだ。

たしかに彼には金が必要だった。三つも仕事をしているということは、生活のすべてが仕事だということだ。彼には、腹いっぱい食べた経験さえない。

きのうも、大家に「もしこれ以上滞納がつづけば、ここを出て行ってもらうことになる」と言われた。

しかしまだ、その仕事を受けることが、こんな生活から逃れられる道だなんて確信は持てない。

「でも、毎日ずっと女装なんかしてたら、まわりの人になんと思われるか…」

「ラスベガスに、知り合いでもいるのかい？」

「……え？ いえ」

「だとしたら、僕とトレーシー以外には、誰に知られることもないだろ。もちろん、僕たちは、君のことをおかしなやつだなんて思わない。なにしろ、これは僕たちのアイデアなんだからね」

「だけど、一日中女になってるなんて……、そんな生活、想像さえできません」

「君は、俳優になりたいって言うだけだろ。これは、役だと思えばいい。シリアスな芝居がしたいと思うなら、これこそ、まさにそうなんじゃないか？」

「僕は男優になりたいんで、女優にな

りたいわけじゃないです」

「でもさ、有名な俳優で、映画の中で女装する役をやった人は多い。たとえば、『ロッキー・ホラー・ショー』のティム・キャリーとか、『サイコ』のアンソニー・ホプキンスとか。彼らは女装したけれど、誰も、彼らのことをおかしいとは言わなかった。それが映画のためで、他の理由じゃないからだ」

「でも、この話は映画の中で役を演るのとはちがうでしょう。僕は、24時間、そのキャラクターになってなきゃいけないんだから。俳優の役は、カメラをはずれた毎日の生活までつづくわけじゃない」

「うむ。でも、それはどうかな。トム・ハンクスは『プリティ・リーグ』を撮ってる時、役のために30ポンドも太った。シガニー・ウィーバーは『エイリアン3』のために髪の毛を剃ってし

まった。有名な格闘技スターのジャッキー・チェンは、三回以上は集中治療室に運び込まれてるはずだ」(ブライアンは、有名人のゴシップ雑誌の熱心な読者なのだ。)「……君の不安に答えて言うなら、しばらくの間、女物の服を着てハイヒールを履いて生活することは、それらとちがうわけじゃないと思うんだ。一年後には、またレイに戻れて、しかも、リッチになっているわけだからね。賢い選択だと思うけどな」

レイは、かなり納得したように見えた。でも、まだ決心をつけかねているようだ。

「ところで……」

ブライアンはつぶけた。

「ここでの、僕の次のショーの予定は？」

「えっ？ ……ああ、一週間後です」

「ん？　なんでそんなに間が開いてる

んだ？」

「ホテルを消毒することになったんです。お客さんがサソリを見たとかで、クレームが出て」

……サソリだって？

ブライアンは考えた。

神よ、感謝します。僕に新しい仕事を、ありがとう！

「……じゃあ、こういうのはどうだろう？ 僕は、ラスベガス行きを最終的に決めるまでに、ここであと三ステージやらなきやいけないことになってる。何が言いたいかと言えば……、来週、トレーシーに、基礎トライアルとして、君を女性に変身させてもらおうと思うんだ。メイクだとか、服だとか、髪の毛だとか、その他もろもろをね。君は、彼女にコーチを受ける。もちろん、誰にも知られずに。で、僕の次のステージの時、君とトレーシーの二人

で、僕のアシスタントを務めてみる。それがすべてうまくいったら、僕といっしょにベガスに行くことを考えてくれないか？ もし、君が気に入らなかったら、あるいは、うまくいきそうもないと感じたら、僕らは、今回のことすべてを忘れよう。どうかな？ それなら、君が失うものは何もないだろ」

レイはその申し出に考え込んでいた。

そんなことは、とてもまともだとは思えない。それに、なんだか最初からうまく誘導されてしまったような気がする。

でも、これは、自分がまともな人生を送るための、唯一のチャンスなのかもしれない。

「……わかりました。もし、あなたがこれ以上、見えすいた悪あがきの言葉

を積み重ねないと約束してくれるなら、それに、このことを誰にも言わないと誓うなら、僕は来週、あなたのアシスタントをやってみます」

二人の男は、そこで立ち上がり、握手を交わした。

第3章

レイは、深呼吸をひとつして、そのアパートのドアをノックした。これほどナーバスになったことは、これまでなかった気がする。

「レア」になることを承諾した翌日だった。

トレーシーは、昨夜の言葉どおり、「彼を素材に女を作る」作業を始めるため、自分のところに来るように言ってきた。

「いらっしやい」

ドアが開き、トレーシーが出てきた。「入って。ごめんね、ごちゃごちゃで。オーストラリアに送るものを荷造りしてたから」

部屋に入ったレイは、まわりを見渡した。あちこちに段ボール箱が置いてある。本、写真、服、そして20冊くら

いの結婚専門雑誌が散らばっていた。

レイが空いている椅子に腰掛けると、トレーシーは、それに向き合い、コーヒーテーブルの端に腰を乗せた。

「レイ、来てくれてありがとう。あなたにとって気の進まないことだってことは、私にもよくわかるわ。えらいと思う。でも、私、これが、あなたにとってもブライアンにとっても、いい結果をもたらすような気がしてるの。まだ、なんとも言えないけど、あなたが思ってるほど、たいへんなことじゃないわよ、きっと」

「そうならいいけど。僕がこんなこと引き受けたのは、なにより、お金のためなんです。それに、ブライアンの手助けができればと思って。それだけのことです」

「ええ、ともかく、私に任せて。ブライアンも、あなたに感謝してたわ」

トレーシーは、ゆうべ、レイが帰ったあと、ブライアンと話したようだ。

「今日、私がしようとしてるのは、あなたの外見を変えること。メイクをして、洋服を替えてもらって、それからヘアスタイルに手を入れるのね。それがぜんぶ終わったところで、鏡を見たら、あなたは自分の顔だと思えないくらいになってるはずよ。若い女の顔と若い女の体を手に入れて、若い女として振る舞うことがなんの不思議もないような気持ちになるんじゃないかしら。他の人がそれを見たとしても、あなたのことを女性以外の何者でもないと感じるでしょうね。でも、心配いらないわ。それは現実の姿じゃない。衣裳に過ぎないんだからね。あなたは芝居をするだけ。メイクを落として、服を替えれば、また男に戻れる。だから、そんなにナーバスにならないで。一年

たてば、すべては元通りなんだし」

「ちょっと待ってください。僕が承諾したのは、一週間後の三ステージのことだけです！ ベガスに行くと言ったわけじゃない！」

「わかった。わかったから、そんなむきにならないで、レイ。……で、私のマジックにつき合う気はあるの？」

「……え、ええ、いいですけど」

「よかった。じゃあ、まず、サイズを調べるわね」

トレーシーはそう言って、レイの体のいろいろな場所を測りはじめた。身長、体重、靴のサイズ、ウエスト、ヒップ、股ぐり、バスト（？）などなど……。

その作業を終えると、彼女は笑顔で言った。

「完璧ね。私のサイズとほとんどいっしょ。ちょっと手を加えるだけで、あなたは私の手持ちの服が着られるわ。

ずいぶん前に買って着られなくなっちゃったのもあるから、あなたにあげてもいいわね」

「あ、あなたの服を？」

「決まってるでしょ。Tシャツとジーンズしか持ってなくて、どうやって女の子のように暮らそうと思ったわけ？ まだ、女物の服を買いに行く気にはならないでしょうし」

「いや、それはそうですけど……。でも、僕があなたの服なんか着たら、気味が悪いと思いませんか？」

「ううん、ぜんぜん。さっき言ったように、私はあなたを、親友が見てもわからないくらいにメイクしちゃうつもりよ。私の持ってるワンピースだって、ブラウスだって、セーターやスカートだって、それに、このワンピースの水着だって似合うと思うわ。ビキニはまだちょっと無理かもしれないけど。靴

は、私のじゃあ合わなそうだから、あなた用のを買ってくるわね。それに、あなたが直接身につけるものも買った方がいいわね。パンティとか、スリッパとか、パンストとか、ブラとか……」

「ちょっと待ってくださいよ。そんなもの、見えないわけでしょ。女物を着るたって、下着までしなくてもいいんじゃないですか？」

「あのねえ、私は中途半端なことはやりたくないの。私はあなたをレディにしてみせる。レディは、男物のブリーフなんてはかないものよ」

「まあ、たしかに、女物を着て動き回って、そんな下着が見えちゃったら、まずいことになりそうな気もするけど……」

「いい意見ね。じゃ、始めようか？」

レイは、しかたなくうなずいた。

「よろしい。まず最初に、シャワーを浴びてきて。そこで、シェービングしてきてほしいのよ」

「ヒゲだったら、ここに来る前に剃りましたけど……」

レイは、つるつるのあごを撫でながら聞き返した。たしかに彼はシェービングしてきたのだ。といっても、そのヒゲはもともと、目立つほど濃くはないのだが。

「ちがうわよ。私が言ったのは、脚と胸と、それに腕の毛のこと」

トレーシーは、タオルと女性用らしいカミソリを手渡ししながら言った。

「……もしかしたら、そうなんじゃないかと思って、びくびくしてました」

「ふふ、時間がかかってもいいから、徹底的にやってきてね。私の石けんとシャンプーを使っていいわ。私は、あなたの『変身』のために、次の用意を

しとくから」

レイは、身震いしながらバスルームに入った。

服を脱ぎ、シャワーを浴びると、熱いお湯が体を撫でた。

ゆうべ一晩、レイは秘かに願っていた。自分を女にするなんて無理だとトレーシーがあきらめてくれることを。でも、どうやらそうはならないようだ。

次の数回のステージで、自分は「レア」を演じるのだらう。

レイは、そんな自分の変身を、親が見たらどう思うだろうと考えてみた。もっとも、じつのところ、そんな心配はいらないのだが。

母親は、彼がまだ二つの時に死んでいる。

そして、父親とは、ふつうの親子のような関係を持てずに来た。

父は、いわゆるマッちょな体育会系タイプの男だった。だから、スポーツが苦手で、長髪で、弱々しい感じの息子への失望を隠そうとしなかった。

レイが15歳だったある朝、目覚めると、その父がいなくなっていた。父を失った悲しさは少しも感じなかったが、自分のためにあてられていた父の収入を失ったのはまちがいなかった。彼は、その時からフルタイムで働くようになった。学校を退学し、部屋代と食費のために、二つの仕事を始めたのだ。

レイは、視線を落とし、やせて、青白くてそばかすだらけの体を見た。

体を鍛えるはずのいくつかの試みをしたにもかかわらず、彼の体に筋肉はつかなかった。胸毛はなく、顔には、かろうじて「ヒゲ」と認められるものがちよろちよろ生えているだけだ。髪

を長く伸ばしていたが、それは、ファッションの好みなどではなく、単に、床屋に行く金がなかったからだった。むしろ、長髪にしていることで、おかしな趣味に見られるのではないかと、いつもびくびくしていた。

レイは、女の子とつき合ったこともない。ガールフレンドを持ちたいという願いにもかかわらず、彼には、女の子をどこかすてきなところに連れて行くような金の余裕はなかった。それに、ほとんどの時間を仕事に費やしているわけだから、珍しく誰かに気のあるそぶりをされても、つき合える時間がなかったのだ。

そんなことは大した問題じゃないと、自分に言い聞かせながらも、レイはいつも、どうしようもないほどのやるせなさの中にいた。

トレーシーの石けんで体を泡立てて

いると、香水の香りがした。シャワーで流したあとも、はっきりと女性的だと思える匂いが体に残り、気になった。シャンプーも、そうだった。

髪を洗い終わり、レイは、その必然性には目をつむることにして、体を剃った。それは、思ったほどたいへんな作業でもなく、二か所ほど小さな傷をつくっただけで終わった。

そんな自分の姿を認めたくはなかったけれど、毛のなくなった腋の下はけっして悪いものではない。ただ、すね毛のことだけは気がかりだった。ネバダはいつも暑いので、彼は半ズボンで過ごすことが多いのだ。

誰かに気づかれるんじゃないか？
そしたら、どう思われるだろう？

シャワーを出て、体を拭いている時、シンクの上にデオドラントがあるのを見つけ、レイはそれをつけてみた。ビ

ンに「男性には強すぎますが、女性には最適です」と書かれているのに気づき、思わず笑ってしまった。

「終わった？」

ドアの向こうから、トレーシーの声が聞こえた。

「ええ、ぜんぶ」

次にはどんな腹立たしいことが待っているんだろうと気をもみながら、レイは返事した。

それは、すぐにやってきた。

「よろしい。じゃ、これを履いて」

トレーシーは、ドアを薄めに開け、そこからゴム製らしいなにかを差し出した。受け取って見ると、形としてはビキニのボトムのようなものだが、極度に伸縮の強そうな、ゴムの「装置」とさえ言っているものだった。

これでは自分にはきつすぎる。前の部分も、まったく余裕のないつくりだ。

「なんで、こんなものを？ 僕には無理ですよ。小さすぎる。僕には……その……あなたにはないものだってあるんだし……」

「だから、履くんじゃない。お馬鹿さんね」

また、バスルームの外から声がした。「わからないとしたら、想像力がなさ過ぎよ。私がステージで着てる衣裳を思いだしてみて。あなたの体に、なにかがぶら下がってるのを観客に気づかれるわけにはいかないでしょ。それって、そもそも、そのためにつくられたものなの。『コンシール（隠す）』とでも呼べばいいかしら。お客さんの目からあれを隠すものだからね。それが、私が探した中でいちばん大きいサイズだったのよ。あなたがベガスに行くことを決めたら、それより小さいのを調達しなきゃいけないわね。最初は着け

心地が悪いと思うけど、じきに慣れるわよ」

レイは何か反論しようとしたが、けっきょく、その口を閉じた。

いったい何を議論すればいいというんだ。

何を言っても、トレーシーは、自分の主張を変えないだろう。だいいち彼女は、こっちの状況までちゃんとわかった上で、これを履くことを要求してきているのだ。

でも、自分の性器を直接見られるより、こんな「装置」をつけているところを見られる方がずっと恥ずかしい気がした。

僕はこれまで、「あれ」を下向きにして生活したことなんてないんだから！

レイは、口の中で何度もぶつぶつ言いながら、それでも、その呪いを抑え

込み、なんとか履いてみた。

トレーシーは正しかった。

ほんとにつけ心地が、悪い！

ひどく冷たい水に入った時、そうなるように、睾丸は奥に押し込まれていた。ペニスは脚の間で、ぴしゃりと押しつぶされていた。鏡に映ったその新しい輪郭を見ると、男の証拠のあった場所には、かすかなこぶのようなものがあるだけだった。

この上、さらに心地悪いものなんて、想像するのもむずかしい。

ただ、彼はまだ、長期の契約に同意したわけじゃない。「ネロズ」でのステージが終われば、これまでと同じ生活に戻れるのだ。

……そして、これからの人生を、けっして望んでいるわけではない三つの仕事の中で過ごす……。

それにくらべたら、マジシャンのア

シスタント——たどえそれが、女のアシスタントだとしても——の方が、ずっと楽な気もした。

レイは、この危機的状況の中で、よりシンプルな答えがほしいと思った。

「できました。次はなにを？」

びくびくしながらきいた。

「出てきて、どんなふうか見せて」

「見せてって、言われても……。僕はこれしか着けてないわけだし……」

「わかってるわ。でも、私は、最初から……。あなたが裸のところからドレスアップしていかなきゃいけないのよ。気にしなくていいわよ。今日、あなたは女の子なんだから。恥ずかしがることなんてなにもないでしょ」

その言葉にぶつぶつ言いながらも、レイは、リビングルームへと出た。

トレーシーは、批評でもする目でレイを見た。後ろにもまわり、まるで中

古車でも査定するように視線を走らせている。

「あなたなら、まちがいなく、女にできるわ」

狼狽するレイをよそに、トレーシーはそう断言した。

彼女が次にしたのは、レイにガードルを着けさせることだった。

「こんなの、ほんとに要るんですか？」

それがきつく張りつめるところまで引っ張り上げているトレーシーに、レイは、何度目かの質問をした。

「そうよ。魅力的にくびれた体型にならなきゃいけないでしょ。もちろん、あなたが体重を減らせば、これも要らなくなるでしょうけどね。何週間かダイエットしてもらうことになるかもしれないわね。真面目な話、食事は、ジャンクフードや牛肉はやめて、野菜を増やしましょう」

レイは、そこでまた憂鬱になった。

なにより、ブライアンといっしょに食べる毎日のランチで、好きなチーズバーガーが食べられなくなりそうなのがつらかった。

トレーシーは、ひとつの袋から、何かを取り出していた。

「これも、ゆうべ探して買ってきたの」

彼女が持ち上げて見せたのは、パッドの入ったブラのようだった。

「乳ガン切除手術をした女性用につくられたものなのね。ブラの中にシリコンが入れ込んであるの。リアルでしょ。服の上からじゃあ、ぜったい見破れないと思うわ。これを着ければ、あなたも女らしい胸になれるはずよ」

その言葉に、レイは、大きくうつむいて顔を赤らめた。

レイは、それを、トレーシーの助けを少しだけ借りて身につけた。

その次に、レースのパンティを履いた。

レイはそこで、鏡をちらっと見た。その姿はなんだかみっともないもののように感じた。

「これで、下着は終わりね。ほら、ぼーっとして、震えてないで」

トレーシーは、そう言いながら、バスローブを手渡した。もちろん、ピンクの女物だった。レイは、それに袖を通した。

「さて、今度は、髪とメイクね。たぶん、けっきょくはあなた自身がこれを覚えなきゃいけないと思うけど、今は、私がやってあげるわね。ここに腰掛けて、リラックスしてて」

彼女は、リクライニングになった椅子を示しながら言った。

レイが座ると、トレーシーは、たくさんのアイテムが入ったメーキャップ

用品入れを取り出し、明るいデスクランプをレイの顔に向けて灯して、作業に入った。

トレーシーは手慣れた様子で、レイの顔に次々といろいろなものを施していった。乳液、クリーム、口紅、グロウ、アイシャドー、マスカラ……。

「トリックは……」

その途中、トレーシーは独り言のように言った。

「……多けりやいいってもんじゃないのよ。たいていの若い子たちって、メイクを始めた頃、あれこれいっぱい使いすぎて、最後はあばずれみたいにしちゃうの。いい女は、ちょっとの細工だけで、長持ちさせるのよ」

レイは、そこに何時間も座っていたような気がした。

次第にリラックスし、体を背もたれにあずけて、他人の手で自分の顔がつ

くられていくことに、なんだか「かしづかれています」とでもいうような、いい気持ちさえしてきたきた。ことに、そのかしづいているのが、トレーシーのような美人なら、なおさらだろう。もちろん誰にも言ったことはないが、レイはずっと、トレーシーにかすかなあこがれを抱いていた。優しく顔を撫でる彼女の手に、レイは、自分がゆっくりと興奮していくのに気づいた。

ところがそこで、おでこの下の部分に、鋭い痛みがつづげざまに起こった。

「……えっ、眉を抜いてるんですか？」

「そうよ、女性にしては濃すぎるからね」

「やめてください。そんなことまでするって、言ってなかったじゃないですか」

「もう遅いわ。片一方は、ほぼ終わっちゃったもん。ここでやめたら、かえ

ってアンバランスでおかしいわよ」

けっきょく、彼女はそれを最後までやり通した。

そこで彼女は、反り返るようにして、レイの顔を見ると、満足げな笑いを浮かべた。

それでレイも、鏡を見ようと体をそちらに向けようとした。ところがトレーシーにとめられた。

「まだだめよ。終わってからね」

トレーシーは、今度は髪に取りかかった。彼女はレイを見て、非難するように言った。

「髪の手入れ、なにもしてないでしょ。たいていの女がうらやましがらるほどの長い赤毛なのに、かなり傷んでるわ。ほったらかしだからね。シャンプーとコンディショナーは、なにを使ってるの？」

「えっ……その……、スーパーマーケ

ット・ブランド。コンディショナーは使ったことがないです」

「そういうことね。私のをあげるわ。それから、来週のステージまでに、あなたを美容院に連れてくわ。文句は言わないで。このまま放っておくなんて耐えられないし、このすてきな髪を、あなたの破壊に任せておくなんて許せない。とりあえず今は、できることだけやっておくわね」

レイは、すでに反論に疲れ、黙っていたが、美容院の椅子で死んだふりをしている自分を、誰かに見られるのはいやだと思った。

「さあ、次に進みましょう。爪を見せて」
そう言われ、レイは、彼女の目の前に手を差し出した。

「思った通りね。あなた、よく爪を噛むでしょ」

レイは、いたずらを見とがめられた

ように、恥ずかし気にうなずいた。

「もっと伸びるまで、つけ爪を使うしかなさそうね。ということは、もう噛んじゃだめってことだからね！ それから、重いものを持つような仕事もしちゃだめ。あなたの手はいつも、すべすべで女らしくしておくこと。思い箱を持ち上げるのを手伝うのもだめよ」

トレーシーは、笑いながらつぶけた。

「間違った場所に筋肉をつけたあなたなんて、見たくないから」

レイもそれに、かすかに笑い返していた。

本当のところ、肉体労働は好きじゃない。今、そこから逃げる言い訳ができたわけだ。

トレーシーは、それから、プラスチックの爪を着けていった。その爪は、ずいぶん赤く、しかも長かった。こんな爪の着いた手で、なにかを扱うには

どうしたらいいのかと、レイは心配になった。自分の爪が伸びたら、こんなものはすぐにはがしてしまおうと思った。

トレーシーは、レイから視線をはずし、部屋の中に山のように積まれた衣服の方を見た。

「あんまりけばけばしくないものの方がいいと思うのね。きちっとした服を探してみるわ」

トレーシーは、そう言いながら、明るいピンクのコットンセーターをとりあげ、それを着てみるように示した。

その服は驚くほどぴったりで、レイは、これならいいかなという気もした。

次に彼は、トレーシーが渡してくれたぴっちりしたデニムのショートパンツをはいた。それにデニムのブレザーで、服は終わりのようだった。

でも、鏡を見ることは、まだ許して

もらえなかった。それでレイは、とりあえず見ることのできる自分の体を見下ろしてみた。

すべてが、なんだか「まちがって」いるように感じた。

そのセーターは、あまりに女っぽすぎた。男が着ているのを一度も見たことのないような色だったし、ネックラインは——これが「きちっとした」というのだろうか——大きく開いていた。男のセーターとは大違いだ。それをさらに悪くしているのは、シリコンによる馬鹿馬鹿しいふくらみが、前を大きく持ち上げていることだった。

ショートパンツは、座ったりすれば、裾が太腿のかなり上までずり上がり、彼の女っぽい脚を目立たせてしまう。

ブレザーもまた、明確に、はっきりと、女物だ。ボタンが「まちがって」いるのだ。トレーシーは、ボタンはし

なくていいと言ったが、左襟についてのボタンを使わなければならなくなるのは、時間の問題だろう。

トレーシーは、ちょっと後ずさって立ち、その創造物の全身を眺めた。彼女の顔に浮かんだ微笑みは、レイの外見を、レイ自身が抱いた印象よりずっとよいものとして受け取っているようだ。

長くつづいた試練も、トレーシーがレイの耳たぶにイヤリングをとめ、手首にブレスレットを通したところで、やっと終わった。トレーシーは最後に、もう一度、レイの全身に目を走らせた。「今のところ、まだ完璧とは言えないわね。あなたに合う靴を買ってないものね。それに、その服は、あなたの肌や髪の色と完璧にマッチしているとは言えない。でも、初めてにしてはかなりの出来だと思うわよ。明日、あなた

用の買い物をして、美容院で整えてもらったら、ずっと女として生きてきたみたいに見えると思うわ」

さらに、レイのルックスについて、トレーシーは注釈を加えた。

「忘れないでね。これは、本来のあなたじゃないってこと。それは衣裳に過ぎないし、あなたを男以外のものに変えるわけじゃないのよ。……まあ、とにかく一度、見て見る？ ……レア」

レイは向きを変え、鏡の中の自分の姿に目をやった。

そのイメージは瞬間的に目に飛び込んできたのに、それをはっきりととらえるのに一秒はかかった。そこにいるのは女装されておどおどする若い男だと確信してただけに、その姿のすべてに、レイはショックを受けた。

その服、メイク、宝石……さらに、すべすべの脚、ヘアスタイル。

そこにいたのは、若い女だった。おどおどとナーバスになった若い女、でも、若い女以外の何者でもないのだ。

すらりと伸びた脚。大きくはないけれど、はっきりとわかる胸のふくらみ。口紅の塗られた真紅の唇。細い眉と長い赤毛。恥ずかしげに赤く染まる頬。女らしい服。

それは、人から「かわいい」と言われても不思議でない姿だった。

レイは、トレーシーを振り返り、言った。

「……驚いた。この町には、ブライアン以外にもマジシャンがいたんですね」

トレーシーは、どこか誇らしげに笑っていた。

レイはしばらく言葉を失っていたが、トレーシーの反応に不安を抱きながら、きいてみた。

「それで、僕は、ちゃんとした (pretty) アシスタントになれると思いますか？」

間髪入れずにトレーシーの答えが返ってきた。

「そうね、かわいくなるためには、新しい服がたくさんいるってこと以外にも、女らしさのコツについて、学ばなきゃいけないことはたくさんあるわね。でも、私は、あなたの演技力の可能性に確信を持ってるわ。もし、あなたが本気でそれに取り組むつもりなら、確実に進歩すると思う。あなたは、それをうまくやれるって保証するわ。やる気はある？」

レイは、もう一度鏡の中の自分自身に見つめた。

まあ、少なくとも、女に見えるかどうかという点については心配することはないようだ。メイクのしかたや、か

わいらしく見せる方法について、トレーシーが教えてくれるなら、正体がバレる理由は、どこにもなさそうだ。

でもまだ、レイは、多くの不安を抱えていた。

「ええ、次の三ステージには出るつもりですけど……、でも、それ以上のことは約束できません。もし、なにかよくないことが起きたら、たとえば、正体がバレるとか、僕自身うまく女がやれないと思うとか……、そしたら、契約はおしまいです。いいですね？」

トレーシーは、ウインクして見せた。「それでいいわ。じゃあ、今からブライアンのところに、そのグッド・ニュースを知らせに行かない？」

「ええ。じゃあ、着替えなきゃあ……」

「そのままでいいわよ、レイ。ブライアンは、最終的なオーケーを出す前に、女装したあなたを見たいって言ってた

わ。そのまま行っちゃった方が簡単でしょ。私の車でね。それなら、他の誰にも会わないですむし」

レイは、議論することのすべてが徒労になることを悟り始めていた。

「そう……ですね。でも、財布くらいは持ってってもいいでしょ」

「女は、財布をじかに持ち運んだりはしないものよ。だけど、たしかに財布はいるでしょうね。じゃあ、これに入れて」

トレーシーは、彼女といっしょに青春時代を送ったという感じのハンドバッグを渡してくれた。

「ちょっと合わないかもしれないけど、しばらくは、それでじゅうぶんよね」

レイは、財布をそのハンドバッグに入れ、トレーシーについて部屋を出た。

自分がこんなに敏感で、傷つきやすい存在だと感じたことは、これまでに

なかった。

レイは、そのうち、自分自身を見失うのではないかと心配になった。

第4章

トレーシーは、ブライアンの家の庭に乗り入れて車を停めた。

ブライアンは、デッドスプリングス郊外のさほどグレードの高くない住宅地に住んでいる。トレーシーは、この家を、時の流れから取り残された家だと感じていた……はげたペンキ、1ヤードを超えるような雑草の群、故障しブロックの上に停めたままのフォード・ピント、少女趣味のプラスチックフラミンゴ……。彼女は、それらすべてにため息をついた。

トレーシーは、ブライアンが早く結婚した方がいいと思っている。彼はまちがいなく、緊急に女性のケアを要する独身男の一人だろう。

レイは、刑の執行を待つ死刑囚のよ

うな気がしていた。

車に乗ってからずっと、身を隠すようにシートに深く座り、他の車が近づくたびに、首をすくめていた。トレーシーの「他の誰にも会わないですむ」という保証にもかかわらず、彼は、まるでネバダ州のすべての人から見られ、笑われているように感じていたのだ。

早くブライアンとの会見を終え、帰って、もとの服に着替えたいと思っていた。

車を降りたレイとトレーシーは、会話も交わさず玄関ドアに近づき、ノックした。

ブライアンは、「ペン・アンド・テラー」のビデオを見ながら、電子レンジで調理したブリートを食べてい

た。べつに客が来る予定はなかったから、その音を、隣人のハーブが、なにか借りに来たのだと思った。そして大声で言った。

「どうぞ、入って！」

トレーシーが入ってきたのを見て、ブライアンは、うれしい驚きを感じた。「……やあ、今夜、君が来るなんて思ってたよ」

彼は笑顔で言った。

「誰？ 友だち……？」

トレーシーが若い女性を連れているのに気づき、彼は、驚いたようにそちらに顔を向けた。

そこで、なんだか、ぎこちない感じの沈黙がつづいた。

その沈黙を破ったのは、ずっと黙っていた若い女性だった。

「で……、どう思います？」

その女性……レイは、じっとブライ

アンの方を見つめていた。

そこで、ブライアンは、言葉につまった。

もし彼が、レイに、女の子のように見えると言ったら、それは彼を狼狽させ、男らしくないと馬鹿にされたように感じさせるかもしれない。でも、もし彼が、その服は似合わないとでも言ったら、レイはおそらくこの取引から下りるだろう。

あれこれ考えた末、ブライアンはけっきょく、思ったままを言うことにした。

「トレーシーは、すごいことをやったと思うよ、レイ。僕は今度のことを知ってるから、君をレイだと思えるが、ふつうの感覚を持った人なら、僕のように感じないだろう。そのメイクとその服で、君は女性のように見える」

このコメントが、レイを安心させた

ようだ。

「それならいいけど……。誰かが、女の子じゃないと気づくんじゃないかって、さっきからずっとびくびくしてたんです」

「うむ、君ならまちがいなく、次の数ステージで、アシスタントがつとまるよ」

「ほんとに僕は、誰にもバレないと思いますか？ あっ、僕のことを知っている『誰にも』って意味ですけど」

その会話にトランシーが割って入った。

「レイ……それとも、こう呼んだ方がいいかしら……レア、誰も見破るチャンスなんてないのよ。あなたは、私の楽屋に入って、そこで衣裳に着替える。そして、他の人がいるところには出て行かない。カジノの従業員は、あなたと近くで顔を合わせる機会はないわ。

そして、観客も、たとえあなたをレイとして見たことがあっても、見破れないと思うわ。もし、あなたの正体がバレると思ったら、私は、こんな提案なんかしなかったもの」

レイは、ため息をついた。

黙って、ぼんやりとそれを見ていたブライアンは、レイ＝レアの存在が、彼の胸のつかえを取ってくれるものであることは、おそらくまちがいだろうと思った。

「うん、今の方向で僕が同意すれば、どうやら世界は破滅することはなさそうだ。オーケー。次の三ステージ、君は新しいアシスタントとして働いてくれ」

トレーシーとブライアンは、顔を見合わせ、微笑み合った。

第5章

レイがトレーシーによって初めて女装された夜から、事態はめまぐるしく進展した。

トレーシーは、レイの17年間の男性プログラムを削除し、そこに「女らしさ」を再インストールしようとしたようだ……一週間で！

毎日、午前八時ちょうどの、訓練のために自分のところに来るようにと、トレーシーは言った。

そして、レイが基礎トライアルとしてアシスタントになることを受け入れた翌日にはもう、着古しのスカートとブラウスを着せ、抵抗するレイをよそに、近くのモールへと連れ出したのだ。

レイにとって、その日最初の恥ずかしい経験は、トレーシーのなじみのビ

ユーティ・サロンに連れ込まれたことだった。

待合室の椅子に掛けたところで、レイは、びくびくとまわりを気にしながら疑問を口にした。

「こんなところに来て、どうするつもりなんですか？ 僕は、あなたがメイクしてくれるとばかり思ってたのに」

「私、ずっと考えてたのね」

トレーシーが答えた。

「あなたが初めて女として人前に出る経験は、ここにしようって。私、あなたに、本気でこの役になりきってほしいの。この店で『総合コース』って呼ばれてる最高級のメニューを予約できたわ。そのメニューが終わった時には、あなたは、自分自身だと思えないくらい変わってるでしょうね」

「もう、とっくに自分だと思えなくなってますよ。これ以上する必要はある

んですか？　きのう、あなた自身が言ったじゃないですか。誰も疑わないだろうって。僕らに、他の人の助けがいるなんて思えないです」

「いい？　わかってる？　女の子はみんな、この店のアポイントがとりたくて必死になるのよ」

「だから、そこがポイントです！」

レイは声を殺しながらも、ほとんど叫ぶように言った。

「僕は女の子じゃない！　僕が、それを喜ぶとでも思ってるんですか？」

「聞いて」

トレーシーはそう言って、レイの目を見つめた。

「どのみち一週間は、あなたはレアにならなきゃいけないわけでしょ。もしかしたら、もっと長くね。もちろん、あなたは、女の子であることに抵抗して男のようにふるまうことだってでき

るわ。でも、そうしたら、あなたにとってこの一週間は、地獄のような毎日になるでしょうね。一方で、あなたは、若いレディのようにふるまうことだってできる。その方が、あなたにとってラクなんじゃない？ もっとリラックスしてみて。一度女の子をやるしてみるのも、まんざら悪くないと思うわよ」

不承不承ではあったが、レイは、筋が通っ話だと認めざるを得なかった。

「わかりましたよ。だけど、僕にとって、それはそんなにかんたんなことじゃないんですから」

「それは、わかってるつもりよ。よく聞いてね。この一週間、レイを表に出さないで。あなたは、レアよ。レアが女物の服を着たり、女らしいことをあれこれしても、人から白い目で見られることはないわ。ちがう？」

「そうは、思えないんだけど……」

「だからね……。もっとリラックスして。女の目で、ものを見ようとしてみて。そしたら、悪いことはなにも起こらないって約束するわ。起こってることを、女として、素直に受け入れてみる。できそう？」

「……な、なんとか」

「いいわ。もしかしたら、今度のことがすべて終わった後、あなたは、女のことの方がもう少しよく理解できるようになってるかもしれないわよ。そしたら、ブライアンにそれを教えてあげられるかもね」

トレーシーと「レア」は、目を見合わせ、女の子どうしのようにくすくす笑いをした。

「トレーシー！」

誰かが呼んだ。

「まるで、何年かぶりみたいな気がするわ！」

レイとトレーシーが見上げると、すぐ前に、ブルネットの魅力的な女性が立っていた。歳は三十代半ばくらいだろうか。シャツに着いた名札から、彼女の名が「モリー」であることがわかった。

「モリー！」

トレーシーが叫ぶように言い、二人はお互い軽く抱き合うようにした。

「おひさしぶり」

「この頃、お見かけしないのはなぜかしら？ みんな、さみしい思いをしたのよ」

トレーシーはくすっと笑いながら答えた。

「結婚準備があったから」

その言葉に、サロンの従業員の半分くらいが出てきて、トレーシーを囲んだ。

みんなが相手の男のことを知りたが

り、指輪を見たがり、次から次に質問をぶつけた。

レイは、椅子に座ったまま、いよいよナーバスになり、ちょっと取り残されたような気分になっていた。

やがて、一時の興奮が収まったところで、モリーがきいた。

「それで、今日は、どんなメニューをお望みなのかしら？」

「ううん、私じゃないの」

トレーシーは、そう答えた。

「私は結婚式までこっちにいるんだから、また来るわ」

それにモリーが笑い返した。

「今日は、私の友だちのレアのことをお願いしたいの」

トレーシーは、そう言ってレイを指し示した。

彼女はそこで、クレジットカードを取り出し、モリーに渡した。

「彼女に『総合コース』をやっけてあげて」

そこで、レイは、なにかがわかった気がした。

このビューティサロンには、安っぽさのかけらもない。

そして、ここでトレーシーは、そのすべてにお金を払うのだろう。高級な雰囲気そのもののために。

レイは、自分もそれを楽しむように心がける方がいいと感じた。

そして、にっこりと微笑んでみた。

するとモリーは、待合室から、このサロンのメインの部屋へと彼を導いた。

かつて、まだヘアカットのためのお金を調達できていたわずかな時期、レイはいつも、場末のチープな床屋に行っていた。そこではただ「洗顔、シャンプー、カット、支払い」という流れ

作業が繰り返されていただけだった。

だからレイは、心の中で、このサロンも、けっきょくは同じようなものだろうと想像していた。しかし、中に入ったとたん、彼はショックを受けることになった。

サロンは、まるでバスターミナルほどの大きさに見えた。室内はスタイリッシュに飾られ——フラシ天のカーペット、高価な壁紙、繊細な服飾品……——、「ネロズ・パレス」の毛羽立ったカーペットやシミのついた壁紙とは、すべてが段違いだった。バックグラウンドにはソフトな音楽が流れ、何人かいる客——すべて女性だ——が、ゆったりとくつろいでいる間に、肌の手入れをされ、メイクされ、マニキュアされている。

レイは、こんな場所があることすら、想像したことはなかった。

モリーは、レイを鏡の前の椅子にエスコートした。

数人の美容師がそこに集まってきて、レイのあちこちに目を走らせた。その後、彼の髪やメイクや爪について、どんなことができるのか、どうすればいいのかを決めていった。

レイは、なんだか罓にかけられたような気がして、ちょっと叫びだしたような気分になった。

トレーシーのメイクの腕もすごいと思ったけれど、彼女は専門家ではない。この美容師たちは、正体を隠している彼に、どんな「正体」を見せようとしているのか？

レイは、すがるような思いで、トレーシーの方を振り返った。ところが、恐ろしいことに、彼女はドアを開け、モールに出ていこうとしていた。

「ど……どこへ行くの？」

レイは、その声にソフトで女らしい響きを保つことに気を配りながらも、呼びかけた。

「ちょっとあれこれ、買い物してくるわ。後で迎えに来るから」

トレーシーは、心細げなレイの表情に気づいているらしいのに、こうつぶけた。

「だいじょうぶ。きつとうまくいくわ」

そして、出て行ってしまったのだ。

モリーが、ピンクのバスローブを手渡しながら、背後の着替え室に行くように指し示した。そこで、これに着替えて来いということだろう。

レイは、モリーの指示に従って、その大きな着替え室に入った。

そこは、いわばロッカールームのような造りだった。壁際には——メイクの前に体を洗いたい人のためだろう——いくつかのシャワー室もついてい

た。

レイは、そこで、鏡に映った自分自身を見た。

そして、言われたとおりのバスローブに着替えたのだが、そんな姿で、しかもちょっとしたメイクしかしていないにも関わらず、彼はまだ、じゅうぶんに女の子っぽく見えた。

たぶんそれは、肩のあたりにルーズにかかった長くて赤い髪の色だろう。

たぶんそれは、スリムな骨格を包むローブのひもが、几帳面に結ばれているからだろう。

たぶんそれは、その視線が心細げで、ふてぶてしさのないものだからにちがいない。

なんにせよ、レイの姿は、男らしさとはかけ離れたものだった。

そんなふうに、真剣に自分自身を見

つめていたせいで、レイは、シャワー室から誰かが出てきたのに気がつかなかった。後ろから声をかけられてはじめて、自分以外にも人がいたことに気づいたのだ。

「そこのタオルを、とってくれる？」

女性の声が、そう呼びかけた。

レイは振り向き、そして、うろたえた。

4フィート(1m20cm)も離れていない目の前に、すごく美人の女の子が立っていたのだ。

彼女は、おそらく17歳か18歳くらい、レイと同年配に見えた。黒いストレートヘア、長い脚、そして、ずいぶん陽に焼けていた。シャワーを浴びただけで、体中が濡れている。そして当然、その体にはなにも着けていなかった。

レイは、ほとんどパニックに陥っていた。何秒間かはなにもできず、しか

し、目だけは彼女に釘付けになっていた。

……僕は、女子用シャワールームにいるんだ！ 早く……逃げなきゃ！

でも、その女の子は、まるで怒っている様子もなく、もう一度繰り返した。

「そこのタオルを、とってくれる？」

そこでレイは、やっと、そのおびえた状態から醒めた。

(あっ……！)

あわててタオルを渡しながら、考えた。

(この子は、なにも疑ってない！
僕のことを、自分と同じ女の子だと思ってるんだ！)

「私、ケイラ」

彼女は、タオルで体を拭きながら言った。

「……あっ、ぼ……、あたしは、レア……よ」

「知り合えて、うれしいわ。なんだか、ちょっとナーバスになってない？ なにかよくないことでもあったの？」

レイは、意志の力をフル動員し、視線をケイラの顔に固定して他のところに向かないようにした。

「あ……、う、うん……、い、いえ、その……、つまり……あたし……、ここに来たの、初めてだから、ちょっと、緊張しちゃって」

レイは、その言葉が、おかしく聞こえないことを祈った。

ケイラは笑い返ししながら、タオルを頭のまわりに巻いた。

彼女の頭は、今、隠された。でも、残りの部分は、なににも被われず、解放されてしまった。

「そんなに心配しなくてだいじょうぶよ。ここの人たちは、やさしいし、あなたをすごくきれいにしてくれる

わ。終わって出て行く時には、キラキラになってるはずよ。ねえ、あなたの赤い髪は、地毛なの？」

「……え、ええ、そう……よ」

「いいわね。赤毛の人って、どういうわけか、男の子に人気があるのよね。……あっ、私の予約時間に他の人を入れられる前に、戻らなきゃ。……それから、ほんとに心配しなくてもだいじょぶよ。あなたは、座って、好きなことを考えてれば、あとはみんなやってもらえるんだから」

ケイラはそこで、フレンドリーに、片手でレイを抱きしめた。そして、レイと同じようにバスローブを身につけると、サロンへと戻って行った。

裸の女性をこんな間近で見たのは、レイにとってはじめてのことだった。ましてや、ケイラのようなゴージャスな女の子はなおさらだ。

レイは、なんだか気を失いそうな気分だった。それでも、必死に気持ちを落ち着かせ——のぼせて倒れることもなく——、モリーの待っている方向に向かった。

(……逃げるのは、よそう。)

レイは、そう思った。

(僕がこれまで経験しなかったようなことが、ここにはある。その中には、あきらかにプラスの側面だってあるんだ。)

モリーは、着替え室のドアのところで待っていてくれた。そして、レイを、さっきとはべつの椅子に座らせた。彼女は、ちょっとの間、彼の全身に目を走らせてから、微笑んだ。

「レア、初めての方でも、若くて魅力的な女性っていうのは、うちにとってはすてきなお客様なのよ。ここだけの話だけど、私のお客さんなんて、ほと

んどが、しわくちゃのおばあちゃんばかりでしょ。この一週間で、ほんとにかわいい女の子って言えるお客様は、あなたとケイラだけだわ」

レイは、顔を赤らめ、口の中で「ありがとう」と言った。

レイは、単に女の子として通るというだけでなく、「かわいい女の子」として受け入れられているようだ。

「あなたなら、完璧なルックスに仕上げられると思うわ。できあがった時には、あなたは、『ヴォーグ』の表紙から抜け出たみたいになってるはずよ。それにね、ハニー……」

モリーは、身を屈め、顔を近づけてささやいた。

「あなたの部屋のドアの前には、男たちが列をつくるの。あなたは、一週間、毎晩、ちがう男にエスコートされる……ってわけね」

レイは、正式な演技トレーニングなど受けたことはなかったが、じつはいつも、一人秘かに、芝居の練習をしていた。パニックで胃のあたりが縛りつけられるような感じになりながらも、かわいらしく微笑んでみせることができたのは、たぶん、そのおかげだろう。

「そろそろ、はじめましょうか」

モリーの言葉に、レイは、また今とはちがう甘い微笑みを浮かべてみせた。

「オーケー。……あっ、そうだ。ひとつ大事なことを忘れてたわ。仕上げるまで、のぞき見しないでね」

モリーは、そう言うと、近くにひとつだけあった鏡の向きを変え、レイが自分の姿が見えないようにした。

胃のあたりを縛りつけていたものが、そのまま、蝶々結びされてしまったような感じだった。

トレーシーも、前に同じようにしたことがある。あの時、トレーシーが仕上げたあと、僕は、若い女性のように変わっていた。モリーが作業を終えたあとには、どんなふうになるのだろう。

サロンで過ごす時間は、あっという間に過ぎていった。

数ヶ月前に一度、レイは、この地方のレーシング場に、自動車レースを見に行ったことがある。その時、際立って印象に残ったのは、ピットクルーたちが働く姿だった。ピットインした車が完全に停まる前から、多くのメカニックたちが近寄っていく。それぞれがいっせいに襲いかかり、何か所かのリペアをし、ふたたびいっせいに散る。30秒ほどの間に、車は補修され、発進して、レースに戻る。

レイは、なんだか、自分があの車になったような感じがしていた。美容師の大軍が、彼のまわりから襲いかかり、それぞれが、手早く、なんらかの美容プロセスを施した。ちょうど、あのエンジンのように、自分はオーバーホールされていた。これが終わると、まるで新しい人格にリペアされ、この店を出て行くのだろうか。

まあ、今できることは、ただシートに深く座って、ベストを祈るのみだ。

レイの髪は、シャンプーされローラーが巻かれた。肌は、さまざまなパックやクリームで入念に手入れされた。少なくとも三人以上のマニキュリストが、手（と足！）の爪にヤスリをかけ、ペイントした。顔になにかが塗られ、洗われ、ふたたび塗られる間、動かないように表情を固めていなければならなかった。何度かこっそり鏡を見よう

としたのだが、うまく見ることはできなかった。

レイは、叫び、走り、真実をぶちまけてしまいたいという衝動に駆られていた。彼のこれまでの人生のすべては、「女々しい男」というイメージとの戦いだったのだ。でも今、彼は、降伏を宣言せざるを得ない。言うまでもなく、ここにいる全員に、自分は男だと訴えてみたところで、より恥ずかしい思いをするだけなのだ。

ついに、すべてが完了する時が来た。何人かのサロンの従業員が椅子のまわりに立って、自分たちの仕事の最終点検をした。

そしてレイは、やっと姿見の前へと案内された。

整形外科とかが出てくる話には、昔からこんなシーンがよくある。

医者が包帯を解いていくと、あら不

思議！　これまでとまったくちがった人物が……。そこには、姿形を見分けるための痕跡さえない……。というやつだ。

レイは、この手の話は、すべてゴミのようなものだと思ってきた。いくら「変身」したところで、その人は、その人でしかあり得ないだろう。

ところが、その鏡を一瞥したとたん、レイのそんな見解はどこかに吹っ飛んでいた。

鏡の向こうで、知らない誰かが、レイのことをじっと見つめていた。

長くカールした赤毛が、肩の上にシルキーにかかる誰か……。

長い赤い爪と、繊細な手をした誰か……。

白いすべすべの肌の誰か……。

エキゾチックな赤い唇と、デリケートなピンクの頬を持つ誰か……。

かわいい、誰か……。フェミニンな、誰か……。ひとりの、女。

レイは、その誰かが自分であることを——頭の中ではそんな思考プロセスを拒みながらも——知った。

それは、ブライアンさえ越えるほどの変身マジックだった。

レイは、今や自分であることがわかっていながら、鏡の中の女性に苦笑してみせた。

女装に同意した日から彼の中でちろちろと燃えていたかすかな「のぞみ」——自分が女として通用するわけなどないという「のぞみ」——は、もはやついでた。

レイは、店のスタッフの方を振り向いた。

「みなさんのお仕事は、本当に信じられません。これまで生きてきて、こんなにすごい(pretty)自分を見たのは初

めてだって、正直、思います」

最高の笑顔をつくり、気取った歩き方で更衣室に向かったレイは、そこで着てきた服に着替えた。

出てくると、美容師たちが、シャンプーやコンディショナーやジェルやメイク用品をプレゼントしてくれた。それらは、彼が、一か月以上、この美しさを保っていられるだけのものだった。

待合室までやって来ると、そこにトレーシーが待っていた。

「レア！」

トレーシーが叫んだ。

「あなた、文句なくかわいいわ！ たけど、これじゃあ、すべての女の子の妬みの的になりそうね」

と、そこへモリーもやってた。

「訂正。すべての男の欲望の的、よ」

トレーシーとモリーは声をあげて笑

い、レイは、赤くなってうなだれた。

第6章

レイは、トレーシーにつづいて、ショッピングモールに出た。

「ちょっと待ってね」

トレーシーがそう言って立ち止まった。

「私、あなたがサロンでメイクしてる間に、いくつかのものを買ったのね。その荷物をお店の人が誰かに運ばせるって言ってたんだけど……あっ、あそこにいる彼ね」

ちよっとかっこいいティーンエイジャーの少年が近づいてきていた。このモールにあるトレンドイなショップのロゴ入りショッピングバッグを、いくつも両手にぶら下げ、その重さによるろめきながら。

袋を運ぶその少年を見て、レイは恐れおののいていた。高校を中退する前、

いくつかの授業でいっしょだった人物だったのだ。名前はジョージ。

レイは、あわてて向きを変え、彼に見破られないことを願った。しかし、三人とも、向かっている先は駐車場だった。

レイは、ジョージが自分のことを見破っているかどうか確かめるために、ちらりとそちらを見た。

と、恐ろしいことに、ジョージは笑いかけ、ウインクしてきた。

(ああ、なんてことだ。)

レイは、ぎくりとしながら考えた。

(彼は知ってる。僕だとわかってるんだ。明日までには、きっと、町中に知れ渡る……。)

レイは、このまま姿を消してしまえばいいと思った。このまま、別の町に行けたらいいのにと。そこで、もう一度男になるのだ。

お前の正体を知っているとジョージに言われる瞬間を待ちながら歩くその道のりは、まるで50マイルもあるように思われた。

彼らが車のところまで行きついた時、ジョージは、袋を車のトランクに入れながら、また笑いかけウインクしてきた。トレーシーからチップを受け取り、店に戻る途中でも、もう一度振り返ってレイに笑顔を向けてきた。

レイは死にたかった。あわてて身を隠すように、車に乗り込んだ。

たぶん、自分はラッキーだったにちがいない。ジョージはその秘密をないしょにしておいてくれるつもりらしい。たぶん……。

「レア、メイクもぜんぶ終わったことだし、帰るわよ。帰ったら…… ん？

どうかした、ハニー？ 幽霊でも見たような顔して」

レイは、なかなか言葉が出てこなかった。

「……あ、あいつ……、荷物を運んできた……し、知り合いなんだ。学校に行ってた頃の。……や、やつは……僕が、男だって……知ってる。……もう、破滅だ。僕の……人生は……」

レイはすすり泣きを抑え、声をつまらせた。

「なに言ってるの。そんなことないわよ。泣いたりしたら、あなたのメイクが破滅するわよ」

トレーシーは、断言するように言った。

「どうして、彼にバレたなんて思うわけ？」

「見たでしょ！ やつは、僕の顔を見て笑ったんだ。その上、ウインクまで！

僕だってことが、わかったんだ！
やつは、誰かに話すかな……？」

トレーシーは、笑いながら答えた。
「レア、あなたにとって、悪いことなんてなにも起こらなかつたんだと、私は思うけど。もし誰かが彼に、あなたが男だなんて言ったら、彼はきっと、大爆笑するわね」

「でも、さっき、やつが笑ってたのは見たでしょ。それが証拠だよ」

「いい？ よく考えてみてよ。彼は、微笑みかけたのよ。げらげら笑ったわけじゃなくてね。男を微笑ますものって、なに？」

「えっ？ つま……り……」

レイは驚いたようにつぶやいた。

「その……、あなたは……、やつが……、僕を……え？」

トレーシーは、まだ笑っていた。

「女の先輩として言わせてもらえば、あれはナンパにしか見えなかつたけど。あなたが怖がってみせたのは正解

よ。もし笑い返してたら、たぶん彼は、どこかへ行こうと誘ったでしょうね」

レイは茫然として、返す言葉がなかった。

しかし、レイの言葉を待たずに、トレーシーは、駐車場から車を出しながら言った。

「ねえ、レア。あなたのためのものを少しだけ買ってきたの。これから私の部屋に帰って試してみましょ」

トレーシーが、レイのために買ってきたという服の袋を開け始めた時、それがけっして「少しだけ」でないことがわかった。トレーシーは、ほとんどすべてのアイテムを揃えていたのだ。今や、レイは、無限に着られるほどの女性用衣料を持っていた。

レイは、それに少し腹を立てていた。彼が受け入れたことは、せいぜい来週

いっばいまで女性ファッションを身につけるということだ。それなのに、トレーシーがこんなに多くの金を使ったのが気に入らなかった。ベガスの公演の一年どころか、レイが一生女装しているとしても、彼女は思っているのだろうか。

「これはないんじゃないですか、トレーシー？ あなたが着られなくなったものを着るって決めたと思うんだけど。あなたが、僕のこと、お金を浪費するのは、うれしくないです」

「そうね。最初は私、私のお古で間に合わせるつもりだったのね。でも、もしあなたが一年間、レアとして暮らさなければいけないとしたら……って、考えることにしたの。だとしたら、あなたなりのスタイルが必要になるでしょ。女として生きるなら、できるかぎりあなたらしい服を揃えるべきだと思

ったのよ。私のことは気にしないで。これは、いわば、あなたが同意してくれたことへの感謝の印なんだから」

トレーシーはそこで、レイのために買ってきたものを見せ始めた。

レイは、トレーシーが、男でも着られるユニセックスな服を選んでくれていればいいと思ったのだが、そういうものはないようだった。すべてのものが、はっきりとした女物だったのだ。

最初に取り出されたのは、下着だった。

しばらくの間、レイは、シャワーの時以外、あの「性器隠し装置」をはずすことを許されないだろう。そして、その間、トレーシーは、その上に「すてきな」パンティを履くことも要求するはずだ。レアは、それらがコットン製のものであればいいのにと考えた。しかし、そんな彼の願いは叶えられな

かった。トレーシーが取り出したのはすべて、シルクか黒いレースのどちらかできていたのだ。

レイは、初めて、例の「装置」に感謝していた。それらの下着がつくり出す「イマジネーション」を、あの「装置」で、なんとか押さえ込むことができたからだ。

そのパンティのショックから立ち直ったところで、次に見せられた買い物は、ストッキングだった。服に合わせて色はさまざまにせよ、ほとんどのものは、ふつうのナイロン製だ。ただし、三足か四足、黒の網タイツが含まれていた。まちがいなくエロチックで、女性の脚を強調してしまうものだ。

「ねえ、こんなの、どうしようっていうの？」

レイがきくと、トレーシーは、いかにも無邪気という感じの顔をつくって

言った。

「あら、なにかいけないことでもあって？」

「こういうのって、ボーイフレンドの気をひくためとか、ガソリンスタンドに貼ってあるカレンダーのモデルとかをべつにすれば、ふつう、履かないものなんじゃないの」

「そうね。あなたは、そういう意味でこれを履くのよ。ステージでね。私もいつもそうしてたでしょ」

「……よく似合ってたけど。でも、衣裳を決めて用意するのってホテルの責任なんですよ。僕がこんなの履くことを要求されるって、マジで思うわけ？」

「そうよ」

トレーシーは、含み笑いでうなずいた。

「あなたはきっと、それで、いろんなことがわかると思うわ」

そこで、トレーシーのリクエストにしたがい、買ってきた服を次々に着てみることになった。

トレーシーは、まちがいなく大金を使ったようだ。ブラウス、キャミソール、スカート、ワンピース、セーター……レイは、ずっと着るものに困らないですむだろう。

でも、それらは、けっして、レイが気に入るようなものではなかった。ユニセックスなものがないというばかりでなく、地味でおとなしめなものさえないのだ。

すべてのスカートが短かったし、シャツの類はぜんぶノースリーブだ。ワンピースのすべてが、背中か肩を出すものだった。そして、そのほとんどが、彼が本当は胸がないのだということをさらしてしまいうぎりぎりのところまで、ネックラインが切れ込んでいた。

たいていのTシャツは丈が短く、レイのお腹のあたりが見えてしまいそうだ。そして、ほとんどすべてのもののふちがレースやフリルでかがられているようだった。

トレーシーの買い物の中には、ストラップレスのパッド入りブラもあったから、肩を見せる服もだいじょうぶということだろう。

女性用スニーカー一足を除き、靴にはすべて高いヒールがついていた。

その服の山の中には、ジーンズのようなものはひとつもなかった。レイは完全に、すべての時間をスカートで過ごさなければならぬわけだ。また、女物のカーデガン一着と（スカートとそろいになった）ジャケット以外、目立たないデザインのものはない。

レイは、単に女物を着るというだけでなく、セクシーな女物を着なければ

ならないのだ。

トレーシーは、レイのために、水着さえ買ってきていた！

ワンピースで、もちろん赤、でも、カットはいくぶん控えめだ。背中は露出するが、前側はおおよそ隠れるようになっていた。レイは、自分の肌が、そばかすのできやすい体質であることをうれしく思った。それを理由にすれば、陽に焼けて、こんな水着のあとを残すことだけは避けられるだろう。しかし、これを着ておかしなところに注目を集めないためには、やはり、「装置」のきつさをがまんせざるを得ないことを、レイは悟った。

レイは、その衣服の中に、エロティックな黒いレースのテディ（訳注 肩を出したベビードール）があるのに気づいていた。トレーシーは、寝る時のためにピンクのパジャマも買ってきている

のに、どうしてテディまでいるのだろう。それは、体をほとんど隠さないようなデザインだ。レイは、トレーシーが、暑い夜に着るようにと、それを買ったのだと思うことにした。他の理由があるなどとは考えたくなかったからだ。

服の他に、レイが女の子としてやっていくために必要なアクセサリーなども購入したようだ。メイク用品とかを入れるためのハンドバッグが二つ。髪の毛のセットのためのヘアドライヤーとヘアアイロン。メーキャップミラー、毛抜き、メイク用のコットンボール。さらに、数個のジュエリーもある——ゴールドのネックレス、ブレスレット類。そして、ダイヤモンドのイヤリング…
…レイは、それがピアスであることに気づき驚いた。

「どうして、こんなのを買ったの？」

レイはきいていた。

「僕がピアスを開けてないのは知ってるでしょ」

「ええ、ちょっと早まったかなとは思ってるんだけどね」

トレーシーは、ちょっとぼつが悪そうに答えた。

「できたら、開けてほしいと思ってるの。ほんとに簡単なんだから。それに、あなたが男に戻った時は、ほかっておけばふさがるしね。まあ、あなた次第なんだけど」

「考えてみるよ」

レイは、口ごもりながら言った。もし、トレーシーが本気でピアスを開けさせる気になれば、自分に発言権などないことは、もう今ではわかっていた。

トレーシーは、その服の山から、まだなにかを探していた。

「……あ、あったわ。これを見つけた

時、私、ぜったいに、あなたのために
買おうと思ったのよ。着てみて、レア。
どんな感じになるか、見たくてしかた
がないの」

それは、黒のパーティドレスだった。

トレーシーは、レイがそれを着るの
を手伝い、後ろのジッパーを上げてく
れた。さらに、ダイヤモンドのネック
レスを着け、それに合うイヤリングを
耳にとめた。

レイは、鏡に近づいて行った。その
途中、床近くのエアコンの吹き出し口
から冷たい風が流れ、レイのスカート
を持ち上げた。レイの肌に、さっと鳥
肌が立った。

彼は、鏡に映った姿に見入っていた。
ドレープの入ったネックラインが肩か
ら垂れ下がり、前でゆったりしたV字
を形づくり、ちょうどそれが、まるで
「谷間」があるかのように見せていた。

スカートは膝小僧がのぞくくらいの長さで、ベルトの着いたウエストは、下に着たガードルのせいもあり、はっきりしたくびれを形づくっていた。

その姿は、ダンスパーティにデビューする若い娘のようだった。

レイは、自分の顔が思わず微笑むのをとめることができなかった。それほど、その姿はキュートだったのだ。そしてレイは、そんな姿には、いつもの神経質なしかめ面より、微笑みの方がずっと似合うことを気づかざるを得なかった。

トレーシーもまた、それを微笑んで見ていた。

「あなたったら、ほんとにかわいいんだもん、レア。知ってる？ 私は五人の男兄弟の中で育って、姉も妹もいないのね。若い女の子が、きれいに成長していくのを手助けできることが、こ

んなに楽しいなんて、思ってもみななかったわ」

「ちょっと待って、トレーシー」

レイは、言った。

「すこしの間、レアになることを納得したのはたしかだけど、僕は『成長』するつもりなんてないですよ。どんな事情でこんなことをやってるかは、わかってるでしょ」

「でも、あなた自身だって、楽しんでるんじゃない？」

「そんなこと、ないです！」

「ほんの少しも？」

レイは、トレーシーを見つめた。

トレーシーに対しては、もっと正直になる方がいいのかもしれないという気がしてきた。

「ええ、女装が好きだなんてことは絶対ないです。……でも……、その……うまく言えないないけど……、つまり

……これまで僕は、新しい服を上から下まで揃えたなんて経験は一度もなかったわけで、それが今、一度にこんなにたくさん持つことになったんです。あなたとブライアンをのぞけば、これまで誰も、僕のためになにかしてくれる人なんていなかったのに、今日僕は、ただ寝たままでみんなにかしずかれるような一日を過ごしたんです。自分のルックスがいいなんて思ったことは一度もなかったのに、今は、みんなにそう言われるし。……勘違いさせないでほしいです。僕は、女の子でいるより、男でいる方が千倍も好きなんで……ただ、もっといい暮らしをするためのチャンスをつかみたいだけで……、言ってみれば……つまり……『格安衣料マート』で思いっきり買い物してみたいとか、そんなことを思ってるだけなんです」

トレーシーは、レイの今のコメントの間違いを指摘しかかった自分を抑えた。「格安衣料マート」は、この地方の中古衣料ストアだったが、経営者が市の死体安置所から衣料品を横領したとかで逮捕され、最近倒産しているのだ。

と、トレーシーはそこで、こちらを真剣に見つめてくるレイの視線に気がついた。

「それが、楽しんでいることになるのかな？」

レイは、不安そうにきいてきた。

「僕は、女の子になって、みんなからちやほやされることを、喜んでるのかな？ 僕のこと、気味が悪いと思いますか？」

トレーシーは、その手を取って言った。

「レア、あなたは、幸運を前にして、それを自分のものにしようとしている賢い人以外には見えないわ。あなたがどう思おうと、今、あなたは、人生を決められる権利を握ってるのよ。もし、結婚が決まってなかったとしたら、私、あなたに嫉妬したかもね」

トレーシーが笑いかけると、レイも笑い返してきた。

「わかりました。もし、僕を女の子にしたいって言うなら、僕がどうしたらいいのか、もっと教えてください。たとえば、女の方は、なんのために、一日六時間も化粧室に入ってるか……とか」

第7章

一週間後、ブライアンは、デッドスプリングスでの最後の公演となる舞台に立っていた。彼のその夜のパフォーマンスは、彼自身をも越えてしまうほど最高のものだった——すべてのトリックは非の打ち所がなく、すべてのイリュージョンは観客を驚きの中に置き去りにし、すべてのエスケープはその息を吞ませることとなった。

このショーが、間もなく、ラスベガスでおおよそ四倍の数の観客を前にして演じられると思うと、彼は、その喜びを隠しきれなかった。

ブライアンから少し離れて、トレーシーは立っていた。彼女にとっても、これがデッドスプリングス最後のパフォーマンスだった。彼女の出来もまた、今夜は素晴らしいものだったが、ブラ

イアンの最後のトリックのアシスタントをつとめるのは、彼女ではない人物だった。

「さあ、レディス・ン・ジェントルメン、いよいよグランドフィナーレの時間です。これからお見せするのは、くらべるものもないほど危険なマジックです。まず、みなさんに警告しておかなければなりません。私は、これまで、一度もこれを試みたことがありません。失敗の可能性があまりに大きいからです。今夜、私は、美しいアシスタントをのこぎりで二つに切り裂いてご覧に入れます」

これは、ステージマジックの歴史の中では、最も古いトリックだと言ってよかった。ただ、ブライアンはそこに、観客が新しくて大胆なものを見たと感じられる修正を加えていた。

「さて……」

ブライアンはつづけた。

「私がトレーシーにこのマジックについて話すと、彼女は、これに関係することを、きっぱりと拒否したのです」

観客から小さな笑いが起こった。

「それで私は今夜、もう一人の美しいアシスタントをみなさんにご紹介することにします。……レア！」

ブライアンは、「R」を巻き舌にして、その名にエキゾチックな響きを加えていた。

レイ——別名レアはステージへと踏み出した。もうこれをやるのは三回目だが、まだどうしてもアガってしまう。

レイは、とがったハイヒール、黒の網タイツ、そして、太腿のまんなかくらいまでしかない黒いレザーのミニスカートを履いている。ダイヤモンドの

イヤリングの上には、ブライアンがかぶっているマジシャンズ・ハットを小型にしたような、飾りのついた黒の帽子をかぶっている。ナイロンのタンクトップもまた黒だったが、小さくて、おへそがのぞき、背中と肩も大きく開いていた。しかし、前の部分は、女性の乳房とかわりなく見えるブレストフォームをじゅうぶんに被っていた。

そんな黒の衣裳は、レイの白い肌を強調し、彼をエキゾチックで魅惑的に見せていた。ツヤのある赤い髪は、アップに結われ、このマジックの間ずっと、人々の目を引きつけていた。目にも鮮やかな唇の赤と、瞳をとりまく黒が、そんなレイのイメージを完全なものにしていた。このメイクを、今日初めて、レイは自分自身でしたのだ。

観客の中の何人かの男たちが、口笛と、下卑た言葉を投げかけてきた。誰

ひとりとして、レイの体のある一部について、疑いを抱いている人間はいないようだ。と、トレーシーが、ステージの反対側から、レイにウインクしてきた。ここ何年も、彼女は、そんな男たちの反応をがまんしてきたのである。

トレーシーが車輪のついた台を舞台中央へと引き出すと、ブライアンはレイの手を取り、そのテーブルのそばまで導いた。

レイが、その上に身を横たえる。

ブライアンは、レイの頭の上の位置まで両手を伸ばさせ、そこに鎖をかける。トレーシーは、レイの足を鎖でくくった。

ブライアンは、今度は、1フィートほどの箱型のおおいを取り出した。そしてそれをレイの体の中央部にかぶせ、テーブルに固定した。

トレーシーは袖に引っ込み、照明が落とされた。ステージを照らすただひとつの照明は、横たわるレイの体に当たるスポットライトだけとなった。

不吉な音楽が流れ始めていた。

ブライアンは、死刑執行人のマスクをつけた。

希薄な空気しか存在しないと思われた空間から、彼は、観客のほとんどが見たこともないほど巨大なチェーンソーを取り出した。

その回転を上げ、若干の狂乱の笑いとともに、ブライアンは、箱の中へ、そしておそらくは、レイの腹へと、そのチェーンソーを押し込んでいった。

レイは、目を閉じ、体の力を抜いた。

このマジックを演じる時、ブライアンはいつも、その価値を最大限に引き出すため、じっくりと取り組む。だから、二・三分の間、レイにはしなけれ

ばならないことはなにもなかった。

その渦中にいながら、レイにはまだ、自分のまわりで起こっていることが信じられなかった。今も彼は、馬鹿みたいに小さすぎる衣裳を着せられ、女のふりをしている。

最も悪いのは、正体を疑う人間が誰もいないということだった。それは、今回のことにレイが同意をしてから一週間、ずっとそうなのだ。そして彼は今、ほとんどフルタイムを女として暮らしている。

まだ、ブライアンとともにラスベガスに行くことにうなずいたわけではないのに。

この間、トレーシーは、レイに過密なスケジュールを課した。レイは一年間、女として過ごすことになるのかもしれないのだから、その役を演じるた

めにより多くを学んだ方がいいというのが、彼女の言い分だった。

レイのすべてのジェスチュア、すべての言葉、すべての振る舞いは、女の子らしくなくてはいけない。女の役を演じるのではなく、女になりきれと、トレーシーは要求した。ベガスの仕事が始まるまでに、もし、女であることが彼の第二の人間性になりきらないなら、すべてが台無しになるとても言わんばかりに。

レイは、大胆な行動を禁じられた。たとえばトレーシー自身がそのような、確信に満ちた女としての行動さえ。そんなことをすれば、人目を引きすぎるというのだ。

いや、トレーシーが頭に描いているレア像が、シャイで、従順で、おとなしい女の子ということなのかもしれない。

トレーシーは、自分の結婚式のプランを練りながら、レイに、女としてのあり方を、さまざまにコーチした。

「誰にも、こうすべきだとか、ああすべきだと言わず、けっして強要しない。たとえ、あなたの方が正しいと思える時でも、人になにかをしてほしい時は、『プリーズ』から話し始めること」

「歩く時は、背筋を伸ばすこと。男はだいたい、前のめりに歩きがちだからね。レディは、ヒップを前に進めるように歩くの。目は前に向けて、でも、歩く時は、少しだけ視線を揺らすようにするのね」

レイは、それを、何度となく練習させられた。

「重いものを持ったり、力仕事はしちやだめ。もしハードなことをしなきゃならない時は、男に頼むの」

「たとえば他の女性に対してだって、ドアを開けて持っててあげるなんてことはしちゃだめよ。女友達といっしょの時以外は、勘定書をとったりもしないこと。ときどき洗面所に引っ込んで、化粧直しするのも忘れないようにね。それから、お願いだから、間違えて男子トイレに行くような馬鹿なまねはしないでね」

「女は『氣息音』っていう、あまり音にならない声を多く使うのよ。あなたの声はそんなに低くないけど、この氣息音の練習をしっかりとしましょうね。これから12カ月間は大声で怒鳴ったりしてもだめよ」

「ビールやウイスキーは、もうやめて。もし飲みたくなったら、ワインを飲んでね。太らないようにハンバーガーもだめ。この仕事のためには、あなたは今のままスリムでかわいくいてもらい

たいのね」

「女らしいことがらに興味を持つように心がけて。レディはスポーツを見ないし、ましてや自分でプレイしようなんて思わないものよ。縫い物とかを勉強するといいかもね。女性向けの雑誌を、何冊か定期購読して。あなたの年頃の女の子にとって、それはあたりまえのことよ。ファッションやメイクの方法について、最大の情報源になるからね」

最後にトレーシーは、レイがひどく不安を抱くようなあることをつけ加えた。

「レア、いちばん重要なことを話とかなきゃいけないわね。あなたが、そんなことに関わりたくないと思ってるのはよくわかってるのよ。でも、私を信頼して、よく聞いておいて。あなた

は、関心を持って近づいてる男たちの扱い方を学んでおく必要があると思うの」

それに対して、レイは思わずうなり声を上げていた。もし、その手のことが必要なら、彼自身の欲望の扱い方を学ぶ方がずっといいだろう。

「レア、好むと好まざるとに関わらず、男はすべて、理性より前にひとつのことがらを据えてるものよ。それがなんなのか、あなたにはわかってるわよね。あなたと男が、友だちとしてどれだけうまくいっているように見えても、それに、彼がどれくらい尊敬を抱かせる存在だったとしても、深いところで、もしかしたら無意識のレベルで、彼はあなたとセックスしたいと考えてるわ。あなたの場合、ふつうの二倍も、彼をそんな気にさせると思う。だって、あなたはかわいいから。私、男を非難

しようとしてるんじゃないのよ。ただ、それが男という存在だって言ってるだけ。私は、13の時から、それに気がついてたわ。あなたが自分の身を守るための女としての知恵を、いくつか覚えておいて」

「自覚してるかどうかをべつにして、男は、セックスへの探求心をあからさまに持ってるわ。わいせつなジョークが好きだし、フレンドリーな抱擁だとしてあなたを抱きしめたりする。お尻を軽く叩いてくる男だって少なからずいる。女はみんな、それに耐えてるの。でも、そこから逃げ回ってばかりいるべきじゃないの。もし、男が、ちょっとフレンドリーすぎる時は、彼の目を見つめて、やめてくださいと言えればいい。確信を持って、問題が大きくなる前に手を打つこと」

「もうひとつ、男たちの視線のことも、

あなたはすぐ気づくはずよ。盗み見るように見てくる男もいるし、じっと見つめてくるのもいる。これについては、あなたに出来ることは、あまりないわ。たとえ『やめて』と言ったとしても、彼らはそんなつもりはないと言うでしょうしね。同じように、多くの男たちは、女の胸に向かって話す習慣があるわ。ブライアンもするし、デービッドもする。あなたでさえ、ときどき、そうしてるもの」

レイは当惑で顔を赤くした。そんな自覚はなかったのだ。

「今、男があなたを誘う可能性は、かなり高いと思うわ。そしたらあなたは、たぶん強い口調で『ノー』というでしょうね。それは悪いことでもなんでもない。ただ、それが無礼な言い方にならないようにね。あなたは、哀れな男のエゴを粉々に砕きたいわけじゃない

でしょ」

トレーシーは、そこで言葉をとめた。

「他に、なにか？」

レイがきいた。

「ひとつだけ。もし、あなたが男とデートしようとした場合、どう振る舞ったらいいかを話しておいた方がいいと思うの」

そこでレイが口をはさもうとすると、トレーシーはそれを止め、つぶせた。

「これは単なる知識として聞いて。たぶん、そんなことは起こらないと、私も思ってるわ。でも、万が一って話ね。たとえ男が、友だちとしてどこかへ行こうと誘ったとしても、彼は、あなたのパンティの中に入りたがってるわ。これを心に刻んどいてね。もし、あなたが、その男をあまり知らないなら、車で迎えに来てもらおうんじゃないくて、

どこか外で会うようにして。彼はデートでのお金を払うでしょうけど、それは、まったく気にすることはないわ。あなたは、会話が、彼や彼の興味のあるものに向くように気をつけていればいい。男って、自分自身のことを話すのが好きだからね」

「そう、たいていの男は、最初のデートから、あなたと寝ようとするでしょうね。まず、キスを迫ってくる。それからフレンチキス、次は体中にタッチしてくる。で、気がつくともう彼らは、ボクサーパンツを脱いでるってわけ。忘れちゃいけないことは、男たちは、あなたが許すところまでしかできないってこと。中にはしつこい男もいるわ。でも、あなたがやめてって言ったとたん、ストップするはずよ。上品なレディは、最初のデートでは、カレに唇のキスを許すだけで、それ以上はいかな

いものよ。二度目のデートでどうするかは、まあ、あなた次第ね」

この話の間中、レイは、すごく居心地の悪い思いを味わっていた。自分を女のように着飾らせて、その上トレーシーはなにを期待しているんだろう？

でも、それらすべての知識が、ためになったこともたしかだ。この試練が終わった時、女の子をデートに誘うような場合、彼女たちの気持ちがよくわかるだろう。

台の上に寝かされたままで、レイは、トレーシーの女らしさに関するレッスンを思い出していた。

……で、ブライアンやトレーシーは満足しただろうか？ 僕は、うまくやり終えただろうか？

チェーンソーが金属に切れ込む気味の悪い音にハッと、レイは、そんな

考えから引き戻された。

ブライアンは、レイの胴体を台のところまで切り終えていた。

間もなく、彼は息絶えた。

無言の観客たちが驚いて見守る中、ブライアンは、今、レイの体もろともに切った箱の、チェーンソーの切れ目に、二枚の金属板を差し込んだ。

トレーシーが袖からふたたび登場した。ブライアンは、レイの頭の側に立って台を引っ張り、トレーシーは足側を引いた。台が真ん中からまっぴたつに分かれた。

レイの頭、腕、そして上半身はステージの下手へ、足と下半身は上手へと離された。

観客たちがいっせいに拍手する中、ブライアンとトレーシーは深く頭を下げた。

そしてそのあと、両袖に引っ込んだ。
レイの半分ずつを引っ張りながら。

第8章

レイは——今はひとつになって——
疲れ切った体を椅子にあずけていた。

トレーシーの楽屋の隣の、空室にな
っていた部屋だ。

すでに、あの馬鹿馬鹿しいステージ
衣装から、新しいバスローブに着替え
ていた。

ネロでのショーはすべて終わった。
レイが合意したパフォーマンスは、す
べて演じ終えたわけだ。ブライアンも
トレーシーも、そしてレイも、これで
支障なく次へ行ける。

それは、いいことだったが、同時に
よくないことでもあった。

一週間、誰にも正体がばれなかった
ことはうれしかったが、同時にこれで、
ブライアンとのベガス行きをことわる
理由がなくなってしまったのだ。

奇妙なことに、レイは、その計画について、最初にブライアンが提案した時ほど無茶な話だとは思っていなかった。女として振る舞うことが、とんでもなく不便でかつ気味の悪いことだとは思えなくなっているのだ。

ブライアンはまちがっていなかった。これを演技の仕事だと見るなら、さほど悪いものではない。

そして一方で、レイから、その選択の余地を奪う事態も起こっていた。

昨夜、大家から、これ以上部屋代を払わないなら、30日以内に立ち退けと通告されたのである。

デッドスプリングスにいる理由は、もうなにもなかった。

ベガス公演は、レイにとって、これまでのことすべてを打開する数少ないチャンスなのかもしれない。

一年後には、どこか別の町にいられ

るのだ。ちょっとした現金を持って。

と、そこへ、ブライアンが飛び込んできた。

葉巻を手にし、ひどく上機嫌そうだ。

「レイ」

彼はほとんど叫ぶように言った。

「君はたいしたもんだ！ 誰にも疑わせずに女の役をこなしたってことだけじゃない。トリックでの役割も完璧だった。のこぎりで半分に切られる技を身につけるのに、トレーシーは三ヶ月かかったんだからな」

レイは、喜びが顔に出そうになるのを抑えた。ステージでなにかを演じるのは、たしかにすてきなことだった。

「そこでだ……」

ブライアンはそう言い、つづけた。

「君は約束したすべてのことをやり終えた。で、君はどう言うのかな？ 僕といっしょにラスベガスへ行く気にな

ったかな？」

レイは、目を閉じ、言った。

「オーケー、あなたはアシスタントを一人手に入れました。僕はたぶん、後で後悔するんだと思います。でも、大事なのお金ですからね」

ブライアンは、安心したように笑いかけた。

「約束するよ。君に後悔はさせないって。君にはまちがいなくこの前言った額の給料が支払われる。僕はそれに、なんらかの上乗せをするつもりだ」

レイは、そんな心配はいらないとブライアンに言おうとしたのだが、その時、ドアがノックされた。

ブライアンがなにも考えずに「どうぞ」と言ったので、レイは、それをにらみつけていた。

入ってきたのは、背の高い、口ひげのよく似合う男だった。花束を抱えて

いる。

「……あっ、失礼しました」

その男が、かなりのオーストラリアなまりで言った。

「トレーシーの楽屋だと思ったもんですから。……おや？ ブライアン！」

「よお、盗賊の子孫！」

ブライアンは笑いながら言い、「デーブ、こっちへ来てるなんて、トレーシーは言ってなかったぞ」とつぶけた。

「ああ、彼女は知らないんだ。ちょっとびっくりさせてやろうと思ってね。で、こちらは？」

デービッドは、そう言いながら、レイに目を向けた。

「うん、レイ……」

レイはあせり、ブライアンに警告の視線を送った。

「……あ、……その、レアだ。彼……いやその、彼女は……僕の、新しいア

シスタントなんだ。トレーシーの仕事を引き継ぐ、ね」

「知り合えてうれしいです、レア」

デービッドは何ら疑ってない様子でそう言うと、レイの手を取り、キスした。

これは、レイとブライアンにとって、あっけにとられるような出来事だった。

デービッドは、前にレイに会っている。なのに、まったく見破れないのだ。

運よく、そこにトレーシーが現れた。

彼女はデービッドを見るなり、喜びの声をあげた。

デービッドとトレーシーは長〜いキスをし、その間、ブライアンとレイは、床に興味を持っているふりをしなければならなかった。

その体と心のいちゃつき合いが終わったところで、デービッドが言い出し

た。

「ねえ、みんなでディナーに行くって
いうのはどうかな？ 僕がおごるよ」

「すてき！」

トレーシーが言った。

「レアと私が着替える間、ちょっと待
っててね」

レイが反論する前に、彼女はデービ
ッドとブライアンを部屋から追い出し
ていた。

45分後、四人は、デッドスプリング
スで最も有名なナイトクラブのテーブ
ルに着いていた。

レイは、トレーシーからむりやり着
せられた短いカクテルドレス姿だっ
たが、なんとか目立たないように、この
夜をやり過ごそうとしていた。何度も
時計に目をやり、誰かがもう帰る時間
だと言い出すことを願った。しかし、

不幸なことに、みんな、この楽しい時間を終える気はないようだった。

ブライアンは、数年前の水中エスケープの失敗談を話し終えようとしていた。

「……とにかく、ホテルの人間が僕を釣り上げるまで、僕は、水中で約七分間、無酸素状態だったわけだ。そのあと、ほぼ一週間、意識が戻らなかった。医者は、脳障害が起こったのかもしれないと言ったそうさ。なあ、トレーシー、おぼえてるだろ？」

トレーシーは、むっつりした顔でうなずいた。

ブライアンは、この話を、楽しい笑い話だとでも思っているようだが、トレーシーの方は、彼が溺死寸前のところまで行ったその出来事を考えただけで、身のすくむ思いがするのにながさない。

「まあ、今、考えてみれば、その失敗した出し物は、それまで何年間かのホテルのショーでいちばん客を呼んだものだった（……ん？）。僕がおぼれ死にしかけたことが（……ん？）なにがしかの金をもたらしたってことさ。…ん？ どうした？」

ブライアンは、やっと気まずい雰囲気気に気づいたようだ。

「……で、デービッド」

そんな雰囲気を取り繕わなければいけない気がして、レイは思い切って口を開いた。

「トレーシーに会う以外にも、この町に用があるって言わなかった？」

「ああ、ちょっとね」

デービッドはうなずいた。

「うちの会社が、ここの衣料品店の買収を検討してるんだ。そこは社長が逮捕されたらしくて、それで……」

ちょうどその時、店内にDJの声がとどろいた。

「ヘイ！ すてき夜を過ごしてるみんな！ さーあ、そろそろ、パーティを先に進めようぜい！ ダンスフロアに出てきて、みんな、どれくらいゴキゲンなのか見せてくれい！」

その声に、何組ものカップルが席を離れた。デービッドとトレーシーも立ち上がった。

「さあ、ふたりもいっしょに踊ろうよ」

デービッドが言った。

「じゃないと、僕とトレーシーも、思いきり楽しめないじゃないか」

「ノー！」

ブライアンとレイが同時に、大きめの声をあげた。

デービッドは肩をすくめたが、すぐに、トレーシーとともにフロアに出て、ロックンロールのビートに身を揺らし

た。

ブライアンとレイは、黙ったまま、ちびちび酒を飲んでいてた。

ブライアンは、二つ向こうのテーブルのかわいいブルネットをダンスに誘いたいそうだったが、レイを一人残すのはよくないとでも感じているのだろう。

レイの方は、帰りたかったのだが、それでは、トレーシーとデービッドの再会をぶちこわしてしまうような気がした。

そうこうするうち、ブライアンがトイレに行くところわって席を立った。

一人になって、レイは考えていた。

これからも、僕はこんな夜を過ごすんだらうか？「普通の女性」が楽しんでいる時、ただじっと座って……。

それは、けっして幸せとは言えない

光景に思えた。

それでも、レイはフロアに出ることも、帰ることもできないまま、そこにいた。

不明瞭で大きな声が、そんなレイの思いを断ち切った。

「へい、シュガー、踊らない？」

見上げると、あきらかにそうとう酔っているらしい男が立っていた。充血した目が、レイの胸に向けられていた。シャツのボタンが半分ほどはずれ、そこから胸毛がのぞいている。いやなオヤジの典型のような男だ。

「いえ、けっこうです」

レイは、素っ気なく言った。

「おいでよ。一曲でいいからさ」

男は、そう言ってレイの腕を握ってきた。

「いやだって言ってるでしょ」

レイは、助けを求めてまわりを見渡

した。ブライアンは、まだ戻ってきていない。フロアの反対側に、デービッドとトレーシーの姿がちらっと見えたが、ふたりはお互いに夢中でレイに気づいてくれるようすはない。

酔っぱらいは、レイの腕を乱暴に引っ張り、ダンスフロアに連れ出した。

あまりに大きくてビートの強い音の中、男はレイを、強いライトが当たる場所まで引っ張っていった。

男の息からウイスキーの匂いがした。

「な、悪かないだろ、ベイビー」

「離してください！」

レイはどうしたらいいかわからなかった。

男はその願いに伝えてくれそうもなく、レイは、あきらめるか、叫ぶかしかない。

と――

「代わってくれないか？」

その声に、レイと酔っぱらいが振り返ると、ブライアンが立っていた。

酔っぱらいは一瞬抵抗しようとしたが、その背の高さと、筋肉質な体格と、狂気をはらんだ表情を目にし、考えを変えたようだ。

「……も、もちろんだとも。彼女は君のものだ」

2フィートの距離をとり、レイとブライアンは踊り始めた。

レイは、ビートにのせて体を動かし、ブライアンは、ちょっと奇妙なテクノダンスふうの動きをした。

レイは、その顔に笑いかけていた。

ありがとう、ブライアン！

彼らは、そのまま二曲ほど踊り、そこで切り上げて、席に戻ろうとした。

レイは、もしブライアンがいてくれなかったら、どうなっていたらと

思い、ちょっと身震いした。

その時だった。DJが客たちに呼びかけた。

「オーケー、男ども、聞ってるかい！
みんな、かわいいレディに腕をまわしてくれ。でもって、力を込めて抱きしめるんだ。用意ははいいかい？ 彼女に、どれだけ君が愛してるか、見せてやるんだ！」

照明が落とされ、音楽も、ソフトでスローなダンスナンバーに変わった。

カップルたちは抱き合って踊り始めた。何人かの男たちは、素早く、相手の唇を奪った。

ロマンチックタイムだ。

ブライアンは、ほとんどパニックに陥っていた。

もしこのまま「スロー・ダンス」をせずに席に戻ったら、まわりからは、

きっと馬鹿なやつらだと思われるだろう。

ブライアンが肩越しにちらりと見ると、さっきの酔っぱらいが、まるで獲物をねらうタカのようにこちらを見ていた。代わるチャンスを待っているにちがいない。

ブライアンは歯を噛みしめるようにしながら、自分の腕をレイのウエストにまわした。

数秒後、レイはその腕をブライアンの首にかけてきた。レイは、ブライアンよりかなり背が低い。その結果、彼らは体をぴったりとくっつけ合うことになってしまった。

ゆっくりと、彼らはダンスを始めた。

その夜、運命は、共謀して、レイとブライアンにダンスをつづけさせた。

DJは、そのあとずっとスローでロ

マンチックな曲を流しつつ、例の酔っぱらいは、獲物をねらいつづけていた。ダンスフロアでレイの体に触れたいというわずかなのぞみを抱きつつ、でも、ブライアンとはもめたくないと思っているのだろう。

おおよそ45分たったところで、ブライアンは席に戻ろうと提案した。

誰かとダンスするということと言えば、これは、中学時代以来の気まずさだった。もし、あの酔っぱらいがからんできたら、殴ればいいことだ。

けっきょくは誰にも邪魔されることなく、レイとブライアンはテーブルに着けた。

と、そこに、トレーシーからのメモが載っていた。

「親愛なるブライアンとレイ

デーブと私は、タクシーでデーブのホテルに戻ります。探さなくていいわ

よ！

こんなふうにあたりと別れるのは心苦しいんだけど、あなたたちがあんまり楽しそうに踊ってるように見えたから、じゃましちゃ悪いかと思って！

楽しんでね、おふたりさん！

トレーシー」

ブライアンとレイは、思わずうなり声を上げていた。

二人とも、トレーシーのジョークを面白がれなかったし、ダンスを楽しんでなんかいなかった（少なくとも、彼らは、それが、彼女のジョークであることを願った）。

二人は、あわてて、クラブを出た。

ブライアンはレイを、最近また走れるようにしたらしいぼろぼろのピントで送ってくれた。車中ではずっと、不器用な沈黙がつづいた。

レイのアパートの前まで来て、ピントはガタガタいいながら停車した。

そのまま、また長い沈黙の時間が過ぎた。

「その……聞いてくれ、レイ……」

ばつが悪そうに、ブライアンが切り出した。

「つまり……、その……」

レイもまた、なんだか照れくさかったが、口を開いた。

「気にしないで、ブライアン。あの男から助けてくれたこと、感謝してます。ひとつ、借りをつくっちゃいましたね」

レイは、気恥ずかしい笑顔とともに車を降り、ブライアンは車を出した。

部屋に戻るとすぐ、レイはネグリジェに着替え、ベッドに腰掛けた。

すでにレイは、女装姿を隣人たちの目から隠そうとするのをやめていた。

このアパートの住人たちは、そんな

ことを気にもしないか、あるいは、気がつかない。彼らのほとんどが、浮浪者かドラッグの売人なのだ。どう思われたってかまわない。どのみち、すぐに引っ越すのだし。

そこでレイは、長い時間、座ったままで考えていた。

僕は正しい決断をしたんだろうか？
ベガスで、悪いことが待っているのではないだろうか？

女装での暮らしで、今夜のようなみじめな夜がつづくんだろうか？

女の生活を楽しむことなんて、できるんだろうか？

町のべつの場所で、ブライアンもまた、座ったままで考えていた。

ひとつの思いが、頭の中で、何度もフラッシュバックした。

それは、あの酔っぱらいのことでも、

新しい仕事のことでも、あるいは、女の子のように着飾った友人についての馬鹿馬鹿しさでもなかった。

あのダンスフロアでの、ほんの短い一瞬のことだ。その瞬間、彼は、腕の中に抱かれたきれいな女の子が、じつは外見とはちがうのだということを、完全に忘れていた。そして、自分自身認めたくないことだったが、その時、彼は、レイとのダンスを楽しんでいたのだ。

第9章

二週間後、トレーシーは、ミスター・デービッド・ステップストーンの正式な妻になった。結婚式は、当初彼らが意図していたのより小さいものになった。はじめは大きな式を計画していたらしいが、二人とも、その価値より、そこで抱える面倒の方が大きいだろうと判断したのだ。

彼らは小さな教会で式を挙げ、そのあと、レンタルホールで、両家の身内にブライアンとレイだけを加えたパーティをすることにした。

二人の誓いの言葉を聞き、出席者の誰もが、これ以上幸せなカップルはいないと思った。

パーティで二人の思いを聞き、全員がさらにあてられた。

デービッドは、生涯の伴侶と偶然に

出合えたこと、ましてや数千マイルも離れた場所に住む彼女と出合えたことの幸せを語った。彼はまた、このあとのハネムーンについても興奮して話した。

トレーシーは、とうとう結婚できたことが、まだ信じられないようだった。彼女は、残りの人生を夫とともに暮らすことに、大きな喜びを抱いていた。

トレイシーはまた、ブライアンに、早くいい人を見つけてほしいと言い、彼の快樂主義のライフスタイルを少しは改めた方がいいとも言った。

レイは、デービッドをうらやましそうに見ていた。できたら、彼と同じ側の人間として出席したかったと思ったのだ。こんな黒いフォーマルドレスを着るのではなく、ましてや、トレーシーの兄弟たちから送られる熱い視線をやり過ごす苦勞などなしに。

ブライアンは、昨夜、先頭を切ってデービッドのバachelorパーティを盛り上げたことを後悔していた。最大級の二日酔いに襲われていたのだ。彼もまた、トレーシーとデービッドを見て、うらやましさを感じていた。

たぶん、彼も、身を固めることを考えた方がいいにちがいない。

パーティで、デービッドが両親と話し、ブライアンがズキズキする頭を冷やす氷を取りに行った間に、トレーシーがレイのそばに来てそでを引っ張った。

「そういえば、レア。明日でしょ。あなたとブライアンが、冒険の旅に発つのは」

「ええ、こんなに緊張してることってない。これまで生きてきて」

「だいじょぶよ、レア。あなたなら立

派にやれるわ」

「いつもそう言うよね。僕は、そうは思えない」

「あなた、神経質すぎるのよ。きっとうまくいくって」

そんな言葉に、レイは、真剣な表情になった。

「でも、もう、楽観主義だけじゃどうにもならないところに来てる気がするから。僕がここまでオーケーだったのは、あなたの助けがあてにできたからだと思うんです。明日、あなたは地球の反対側に行ってしまう！ 問題が起きた時すぐに、オーストラリアまで電話するってわけにはいかないでしょ。女性のライフスタイルについて相談できる人なしで、どうやって乗り切れればいいかって考えると……」

トレーシーは、しばらく動きを止めていた。なにか思い当たることがある

ように見えた。

「レア、ちょっと考えてみたんだけど、私は、この話題を切り出す(※)方法を思いつかないわ。でも、ちょっときかせて。私たちの秘密を、誰か他の人に話しても平気？」

(※訳注 原文は ‘broach this subject’ 「地球に穴を開ける」意も込めている)

即座に、レイの警戒心が強まった。

「誰に？ デービッドにも言っていないでしょ？」

「落ち着いて、ハニー。誰にも話していないわよ。まあ、デービッドは、あなたがそれを望むなら、話せばわかってくれると思うけどね。……ちょっと待って、ちがうの。私が考えてるのは、ベガスにいる私の友だちのこと。彼女は男が女になるのを助ける専門家なの。あなたのプライバシーを守ることは保証するわ。彼女はあなたの理解者

になれるし、あなたも、何でも率直に相談できるはずよ」

レイは、他の誰かに、今していることを知られるのを恐れていた。でもこれまで、トレーシーの言ったことに間違いはなかった。彼女が、友だちのことを信用のおける理解者だと言うなら、その人はそうにちがいない。プロフェッショナルのアドバイスをあてにできるとすれば、ベガス行きは、より安全なものになる気もする。

「オーケー、わかりました。その人と会ってみます」

「それは正しい決断だと思うわ。彼女の電話番号を教えるから、向こうで落ち着いたたら、一度会ってみて。私の方も、彼女に電話して、だいたいのことを話しとくから」

トレーシーが立ち上がりデービッドのところに戻ると、ブライアンがふら

ふらした足取りで帰って来て、隣に座った。氷のうを持って、頭に押しつけている。

レイは思わず笑ってしまった。こんなブライアンの姿を、これまでも何度となく見ている。

「とても、かっこいいブライアンには見えないですね」

レイは皮肉っぽく言った。

「気分は最悪。でも、君ははすてきに見えるよ」

「ほんとにそう思ってるんですか？」

レイは、ちょっと疑うようにきいた。

「ああ、君は、まちがいなく女として通用するコツをマスターしたみたいだ。立派なもんだよ。女であろうがなかろうが、君はベガスで、君らしく暮らせるんじゃないかな」

「……で、明日、僕たちは何時の便で発つんですか？」

ブライアンは、ベストのポケットから、航空券を出し、レイに渡した。

「朝九時だ。僕は乗らない。君だけだ」

「えっ？」

レイは動揺して聞き返した。

「なんで？」

「僕は、マジックの道具を運ばなきゃいけない。正直言って、空港に持ち込みみたいタイプのものじゃないからね」

レイは考えてみた。

剣、ショットガン、ナイフ類、のこぎり、爆発物……まちがいなく、空港のセキュリティにハネられそうなものばかりだ。

「たしかに、そうですね。でも、貨物として発送することはできるでしょ」

「まあ、ともかく、僕は車で行くよ。後ろにトレーラーをくっつけて、僕自身で引っ張ってね。これから帰ってすぐ発てば、君の便が着く頃には、僕も

ベガスに行けると思う。空港で会おう」
「そんなこと、僕にできると思ってる
んですか？」

レイはささやいた。その口調は、怒
っているようにも怖がっているように
も聞こえる。

「僕に一人だけで飛行機に乗れって？
女として？」

と、ブライアンは、ひどくまじめな
顔で、レイを見返してきた。

「いいかい、レイ。もし君が望むなら、
僕といっしょに、エアコンの効かない
ポンコツで、砂漠を通過してドライブす
ることだってできる。僕の方だって、
飛行機がいいに決まってる。でも、ち
よっと考えてくれ。君は、これから一
年、ずっと僕のそばを離れないつもり
かい？ 僕は、君が必要とするなら、
君のそばにいるつもりさ。でも、僕ら
は、腰で交わることはないわけだから

な。時には、僕も君といっしょにいたくないと思うだろうし、時には、君だって僕といっしょにいたくないと思うはずだ。僕らは自分自身の生活をするべきだ。好むと好まざるとにかかわらず、君は自分自身でいろいろやらなきゃいけないんだ。この飛行機での旅は、ちょっとした練習になるんじゃないのかな」

レイは、ブライアンの言葉に、自分がなぜ反抗したくなるのかに戸惑っていた。どう考えても自分の方がまちがっているのに。

「……オーケー。あなたの言うとおりでと思います。でも、もし身分証明書を求められたら？　これは問題でしょ」

「ああ、すっかり忘れてた」

ブライアンは、そう言うと、ぱちんと指を鳴らした。

すると、彼の指にはさまれて、封筒がひとつ、現れた。

ブライアンからそれを受け取り、開けてみると、中からレア名義の出生証明と運転免許証が出てきた。免許証の写真は、ピントがボケていたが、あきらかにレイではなく、女性の外観をしている。ショーの時、ブライアンが秘かに撮っていたにちがいない。

「こんなの、どうやって手に入れたんですか？」

レイは不思議そうにきいた。

「うむ。過小評価してはいけないな、マジックの力を。または、DMV（[訳注 自動車局](#)）と市役所における50ドルの賄賂の力を」

レイはため息をつくとき、赤い髪を後ろに跳ね上げ、ピアスを開けた耳を見せた。

そう、準備はすべて整ったのだ。

明日になれば、もうここには戻ってこない。

12か月は、レイにとって長すぎるわけではないだろう。

第10章

595便（デッドスプリングス発デンバー行き ラスベガス・ソルトレークシティ経由）が離陸し、レイはやっと呼吸を再開した。

彼は、昨夜一睡もしていない。

ずっと目は閉じていたのだが、そこには、レアとして初めて一人で過ごすことで遭遇する恐ろしい光景が見えていた。たとえば——誰もが彼の女装を見破り、通勤する群衆が笑いながら指さし、飛行機の搭乗をことわられ、他人に擬装した罪で逮捕される……。しかも、空想を繰り返すごとに、前の空想より悪くなっていった。

レイは、すべてをキャンセルしたくなったが、そうなれば、ブライアンは二度とレイのことを信用しないだろう。

レイは、頭の中で、リハーサルを繰り返した。なにを言ったらいいか、どう行動したらいいか、バレた時はどうするか。

しかし、空港に着いたとたん、そんなシミュレーションは、すべて肩すかしに終わった。

女物ばかりがつまったスーツケース類は、何事もなくチェックされ、搭乗係は、なにも言わずに航空券を受け取った。

シートに深く腰掛け、レイはリラックスした。

驚いたことに、ブライアンは、ファーストクラスをとって来てくれた。

美人のスチュワーデスが、なにか飲むかとか、なにか不自由な点はないかとか、何度もききに来た。

彼女の姿を楽しみながら、レイは、

一片のさみしさを感じていた。彼は、この女性を誘ったりはできないのだ。いや、まるまる一年、すべての女の子に（男として）声をかけることはできないのだ。これまで一度もモテたことなどなかったけれど、ベガスにいる間、女性とつき合うことができないということに、彼は傷ついていた。

飛行機はラスベガスに着陸した。

レイは、ハンドバッグと小さなポーチを持ち、スカートの皺を伸ばしてから、飛行機を降りた。

女子トイレにちょっと寄り道し、化粧直ししたあと、受取窓口まで荷物を取りに行った。

応対したのは、無愛想な太った男だった。レイは名前を告げ、受取標を差し出した。

さっと帳簿に目を走らせたあと、男

が言った。

「悪いね。ここにはないよ」

その言葉にレイはおたおたとした。

「でも、いっしょの便で着いたはずですよ。もう一度チェックしてくださいませんか」

「申し訳ないけど、ないもんはないんだよ」

悪夢が現実のものとなっていた。

「あたしの服が、すべて入ってるんですよ……私の持っているものが、ほんとに、全部。お願いします。もし、荷物が受け取れなかったら、あたし、どうしたらいいか……」

そうなったら、レイは、本当にどうしようもなくなる。新しい仕事が始まる日までに新しい衣裳を買いに行く準備さえない。口にはしなかったが、実際、彼はほとんど金を持っていないのだ。

「見てくれよ。それは、ここには届いてない。で、それは、俺のせいじゃない！ はい、次の人！」

涙がこみ上げてきた。

レイは男を殴ってやりたかった。男に向かって怒鳴ってやりたかった。でも、彼にはそんな精神力はない。

どうして自分には、他の男のような度胸がないのか？

あの暴力的な父親なら、この事務員の顔にパンチを入れているだろう（そして、留置場で夜を過ごすはめになるのだろう）。デービッドなら、その場に立ちほだかり、荷物と謝罪を受け取るまでどこでも動かないだろう。ブライアンなら……彼ならたぶん、この場で、それこそ叫び出したくなるような大スペクタクルを演りはじめ、それをやめさせるために、事務員は荷物を探さざるを得なくなるのだろう。

でも、レイには……考えつくかぎりのことは……泣くことくらいだ。それは、男らしいことじゃない。

そこで、レイはハッとした。

くそっ、何で男らしい必要なんてあるんだ。世界は僕を女として見てる。……で、……そう。女は、泣くんだ！

レイの目から、少量の排出物と言っていい涙が流れた。

剣のあった事務員の顔が、いくぶんか和らいだ。

レイはさらに涙を流しつづけた。

「あたしの荷物、あたしのすべての物が入った……」

レイは、すすり上げながら言った。「お願い。助けて。あたしを、助けて……」

もはや、本当に泣き叫んでいた。

「よう、君！」

後ろの男が、レイの肩越しに事務員

を怒鳴った。

「彼女を困らせてるのがわからないのか！」

「オーケー、オーケー。ちょっと待っててくれ」

事務員は、そう言いながら奥の部屋に消えた。

レイは、ベンチに崩れるように座り、泣いていた。

彼の涙は、ずっと本物だったわけではない。でも、それがじゅうぶん本物に見える、いい芝居をしていた。

後ろにいた男が隣に腰掛け、なぐさめるように、その腕をレイの肩にまわしてきた。

レイは、トレイシーが、男はいろいろな言い訳を使い、かわいい女に触りたがるものだと言っていたのを思い出していた。肩をすぼめて、男の腕を振り落としたかったけれど、そのままの状

態を保つことにした（男の態度が、フレンドリー以上のなにかにならないかぎりは）。

すぐに事務員が戻ってきた。

彼は、ミスを詫びた。レアの荷物は、なにかの間違いで、ちがうゲートに配送されていたらしい。

レイは、後ろにいた男に礼を言い、彼の腕からすり抜けた。

失礼な事務員に冷たい一瞥をくれ、荷物があるという窓口に入った。

空港のポーターの手を借り、いくつものスーツケースを空港の玄関まで運ぶと、そこでレイは、ブライアンが現れるのを待った。

ブライアンの到着は遅れ、もちろん、レイはその間、何度も鏡をのぞいた（そして、化粧を直した）。

レイは、マジックの仕事に就き、何度も舞台裏を見てきたから、奇跡とか

神秘的な出来事とか呼ばれることに対し、シニカルな見方をするようになっていた。そんな懐疑論者であるにもかかわらず、レイは、さっきの出来事に対し、不思議な驚きを感じていた。

今日まで、レイには、誰かに立ち向かう勇気がなかった。いつも、いつでも、最後には、他人の主張を何でも受け入れてしまう。

いじめっ子、乱暴な父親、失礼な人々、上司……に、一度も立ち向かうことは出来なかった。トレーシーやブライアンにだって、彼らが女装しろと言ってきた時、立ち向かえなかったのだ。

それなのに、さっきは、容易に、あの失礼な貨物野郎に立ち向かえていた。なぜだろう？

たぶん、立ち向かっている相手にくらべ、自分の方があきらかに弱いということ素直に認め、居直ってしまった

たからだ。

たぶん、人々が、きれいな女性に対しては、自分のことはさておいても助けてくれようとするからだ。

たぶん、さっきのことが新しいアイデンティティを作り出すチャンスとなり、そのアイデンティティを使ったからなのだ。

そんなことを考えていると、やっと、ブライアンの車がやって来て、もうもうたる煙の中で停まった。

「あなた、遅すぎるわ」

レイは、搭乗係の女性の口調を真似て言った。

「ごめんごめん、ラジエターがいかれちまって……」

「そう。じゃ、あたしの荷物を積んでいただける？ 約束の時間に遅れるでしょ」

レイはそう言うと、後部席のドアま

ですまして歩き、その前に立った。

レイが、ドアを開けてくれるのを待っていることに、ブライアンは唐突に気づいたようだ。ちょっと困惑しながらも、それにしたがった。

レイは、体を滑り込ませるように乗り込んだ。

ブライアンが、荷物を積むために立ち働いている時、一度だけ、レイは彼に微笑んでみせた。

もしブライアンが、一年間、僕に…
…あたしに女でいてほしいなら、多少の犠牲を払う心の準備をしてもらった方がいい。

ブライアンは、トレーラーとトランクに、すべての荷物を積み込み終わった。

……いったい、レイは、どうしちゃったっていうんだ？

なんだか、これまでと感じがちがう。
見かけはもちろん、振る舞いも自然だし、それに……そう、自信に満ちてる。

う～む。どうやら、この仕事は、彼に向いているにちがいない。

しかし、そんな考えは、ブライアンを少し神経質にした。レイがしてほしいことを素早く察するために、気を使い始めていたのだ。

彼はふだん、他の男に対して、そんなことを思う人間ではないのに。

二人は、ブライアンを雇ったタレントコーディネーター、ミスター・ペニーとの約束時間ぴったりに、ホテルに到着した。

レイはまだ、この男に会ったことがなかったもので、正体を見破られるのではないかと、ちょっとびくびくしてい

た。

ホテルのクラークは、レイとブライアンに、ミスター・ペニーの部屋まで行く従業員通路を教えてくれた。

ミスター・ペニーは、禿げて、ちょっと粗野な感じのする六十代の男だった。きつい匂いが絶え間なく漂ってくる葉巻を吸っている。

彼とブライアンとは、にこにこことあいさつを交わしながら握手した。そのあと、ブライアンは、新しいアシスタントとして「レア」を紹介した。

「君のようなかわいらしいレディにお目にかかれて、うれしいよ。君は、ブライアンから聞いていた話より、ずっときれいだ」

そう言いながら、ミスター・ペニーは、レイの手をぎゅっと握ってきた。

「ところで、きのうの時点で、君たちの最初のショーのスケジュールを一週

間後に設定しておいた。それなら、ここに落ち着く時間もとれるだろう。君たちには、目を見張らせるようなものを期待してるからね。今後、君たち二人を大いに売り込んでいくつもりだ」

「いいですとも」

ブライアンが答えた。

「実際、僕らは……」

ミスターペニーは、それを無視するように言葉を重ねた。

「そう言えば、君たちはもう、住むところのめどは立ててるのかね？」

「あっ、いえ、じつはまだ。見つけるまでの二日ばかり、ここにチェックインしようと……」

ミスター・ペニーはまた、それをさえぎった。

「それなら、ちょうどいい。今、このホテルは、西館を改装中なんだ。ワンフロアずつ、順に進めている最中なん

だが、建築資材の運搬やガラクタ置き場のために、西館全体を閉鎖してる。つまり、約100室の完璧に整備された部屋が、空室のまま遊んでるってことだ。もしよかったら、大幅に割り引いた部屋代で提供するから、そこに入らないか？ 室内に多少おがくずが残ってるのを気にしないというなら、君たちは非常に快適な環境を手に入れられると思う。それでいいなら、住むところはすぐに見つかる」

ブライアンとレイは、それに同意した。

ブライアンは、高級ホテルのスイートでもバンの後部座席でも寝られて、そのちがいに気づかないような種類の男だ。レイの方は、職場と住居が同じ場所であることを喜んでいて。これで毎日、レアとして街を歩かなければならないという不必要な過程が省かれ

る。

「で……、」

と、ミスター・ペニーは、ちょっと下卑た感じの笑いを浮かべた。

「リクエストは、二部屋か？ それとも一部屋？」

レイとブライアンにロマンチックな関係があるのかどうか探りを入れてきたミスター・ペニーの言葉に、レイは顔を赤らめた。

ブライアンはあわてて二部屋を頼み、荷物を運び込むために、ポーターを手配してもらった。

荷物がすべて部屋に運び込まれたところで、ブライアンはレンタカー会社にトレーラーを返しに出掛けた。

レイはシャワー室に入り、シャワーを浴びた。

部屋はきれいだった。やわらかなク

イーンサイズベッド、カラーテレビ、フル装備のシャワーバス、きれいなタオル……デッドスプリングスの「ノートル・モートル」(訳注 フロントもないモートル)とは大違いだった。

ブライアンの部屋との間をつなぐドアもついていた。内密なやりとりもできるわけだ。

レイは、スリムでそばかすの多い体をきれいに洗い、バスローブを羽織った。

髪をブロー・ドライし、ポニーテールに結う。それから、口紅とアイライナーを軽く入れる。そのあと、例のゴムの「装置」でヘニスを隠し、その上からタイトなジーンズを履く。パッド入りブラを着け、最後に、おへそのあたりが顔を出す短いTシャツを着る。

今では、すべての身繕いを一人でふつうにこなせるようになっていた。そ

して、そんなカジュアルな服を着ても、レイは、美人の女性に見えた。

ブライアンが戻ったところで、ミスター・ペニーは、ホテルスタッフのメンバーに二人を紹介した。

ブライアンは、その場で、リハーサルの手はずを整え、開演時までに調達すべき物を指図した。

二人は、週三日ないし四日、公演することになっていた。ブライアンは、ショーを万全のものとするために、明日を休養日と決め、明後日から仕事を始めることにした。

打合せが終わったあと、ブライアンはレイに、下のカジノに行ってサイコロでも振らないかと誘ってきた。レイは、ちょっと体を休めたいと言ってそれを辞退した。

それで、ブライアンはひとり、手持

ちの金をすべてスルために、カジノに出掛けた。

部屋に戻ったレイは、持ってきた衣類をかたづけた。服をしまっている時、その中から、トレーシーが結婚式の際に渡してくれた電話番号が出てきた。レイの女性としての生活を助けてくれるはずだという、友人の番号だ。

レイは、それを後まわしにしない方がいいと思った。

万が一緊急事態が起きた時、すぐ電話できるように、できるだけ早く会っておいた方がいいだろう。

第11章

翌日早く、レイはシンプルなブラウスとそれにマッチしたスカートを身につけ、ホテルを出て、タクシーを拾った。

レイはすでに、この暮らしの奇妙さと不条理に慣れてしまっていた。

だから、たとえ今日の彼の計画が、一般社会から気味の悪いものと見なされたとしても、それを無視する術を身につけていた。

前夜のうちに、レイは、トレーシーの友人、ドクター・アミー・ハザウェイに電話していた。

レイは、電話で伝えられるだけのことを伝え、そして、ドクター・ハザウェイは、今日の予約を設定してくれたというわけだ。

ドクター・ハザウェイのオフィス

は、ラスベガス郊外の小さなクリニックの中にあると聞かされた。

その建物は、これといった特徴のないもので、タクシーの運転手は、正しい場所を見つけるまでに、そのブロックを二まわりした。

そこでレイは、代金を払い、中へと向かった。

レイは、やはりナーバスになっていた。

トレーシーは、その女医が「男が女になるのを助ける専門家」だと言っていた。それはどんなことを意味しているんだろう？

彼女は、女装者にいかに女らしく見せるかをアドバイスしているのだろうか？

彼女は、より女性的な心を持てるように心理セラピーとかをするのだろうか

か？

それとも彼女は、性転換手術をするのだろうか？

もし、最後のケースだとしたら、レイが彼女に求めるべきものは、なにもない！

ベガスにいる間だけ、そう見えればいいのだ。地球の反対側にいるトレーシーに代わり、自分の「状態」について話ができる代役を求めているだけなのだから。

レイは、待合室に入りながら、そこが、気味の悪い女装者であふれているのだろうとなかば予期していた。とても女に見えないような「変装」をした男たちでいっぱいなのだろうと。

ところが、そこで待っていたのは、レイの心をかき乱すような光景ではなかった。

待合室の中にいる男は、一人だけだ。

普通の格好をしたわりといい男だった。でも、レイには、彼が女として通用するとはとても思えなかった。

待合室内の他の人たちは、すべて女だった。年齢層はさまざまで、レベルとしても「ふつう」から「美人」までいろいろだったが、全員が女性であることはまちがいない。

受付でサインしたあと、レイは古い「タイム」誌を開き、それで顔を隠すようにした。この場をうまくパスし、騒がれることなく出て行きたいと感じたからだ。

その医者もきつと、こんな本物の女性たちの集団の前で女に見せる方法を教えてはくれないだろう。

15分後、レイは呼ばれて、部屋に入った。看護師は、その中の小さな診察室へと彼を導いた。

すぐに、ドクター・ハザウェイが現

れた。

三十代後半に見える、やさしそうで魅力的な女性だった。

彼女は、安心させるようにレイに笑いかけ、まず、健康状態についての一般的な問診をした。そのあと、レイの真正面に座り直し、ここに来た理由を尋ねた。

レイは、ひとつ深呼吸したあと、ここまでのすべてのいきさつを話した…
…どうしてステージで働くようになったのか、どうしてボスにマジックのアシスタントになれと言われたのか、どうして意に反して女装することになったのか、どうして一年間の女装での仕事に合意したのか、どんなふうにトレーシーに訓練されたのか、そして今、そんな自分の状況ををどうとらえたらいいのか、誰かに相談したいのだということ。

途中、話を整理するための簡単な質問を二つほどした以外、ドクター・ハザウェイは、ずっと黙って聞いていた。

レイは、今の「ごまかし」をつづけていくために、彼女からどんな手助けを受けられるのかという質問で、話を終えた。

ドクター・ハザウェイは、少しの間じっと考えたあと、レイの顔を見つめて話し始めた。

「レア、私はあなたに、女性であるためのどんな種類のアドバイスでも、よろこんでするつもりよ。週一回、ここに来てもらおうスケジュールを組んで、あなたのまわりで起こっていることや、そこであなたが持った疑問について話しましょ。もし、週の間になにか起きたら、ポケベルのナンバーを覚えておくから、すぐ私とコンタクトをとれるわ。でもね、レア、ここには、まだ

あなたが見落としてることが、いくつもあると思うわ。まずはじめに、私がここで何をしてるか、あなたは知ってる？」

レイは首を振った。

「レア、私は心理学者で美容整形外科医でもあるのね。私が専門にしているのは、主に、いろいろな理由で女性になりたいと思っている男性への支援ね。私のクライアントのある人たちは、人生を通じて女性でありたいという欲求を持っている。ある人たちは、突然それに目覚めてしまった。外的な要因で私のところに来る人たちもいるわ——仕事、人間関係、他にも重要ななにかね。ある人はちょっとした外見の変化を求め、他の人は、完全な性転換を求める。どんな理由で来たにせよ、私は彼らを助けようとするの」

レイはぼう然と聞いていた。

そんなことを思っている人間が、そんなにたくさんいるのか？

レイは、ドクター・ハザウェイが、レイの気を楽にするために、彼女が扱った男性の数を誇張しているにちがいないと思った。

「だけど、ドクター・ハザウェイ」

レイは言った。

「あなたはオーバーに言ってるんですよ。待合室には、男性はひとりしかいませんでしたよ。彼は、女性らしくは見えなかったし……」

レイはそこで、ドクターが笑っているのに気づいた。

「何がおかしいんですか？」

「ごめんなさいね、レア。あなたが、最大級のほめ言葉を贈ってくれたんで、つい。じつは、待合室にいるすべての女性たちは、男性、または、かつて男性だった人たちなの。あなたが見

た唯一の男性というのは、私の『人工女性』のうち一人のフィアンセなのよ」

「で、でも……、そんな馬鹿な……みんな、すごく女っぽかった……繊細に見えたし、それに……胸もあった！」

「レア、外科医は、とんでもないことができるのよ。そうだ、いいものがあるわ」

ドクター・ハザウェイは、そう言って、一冊のアルバムを取り出し、机の上に置いた。

「私のかつての患者たちの写真よ。だいじょうぶ、許可はもらってるから。見て」

レイは、そこに貼ってある写真を見始めた。

あるページの写真には「術前」というラベルが貼られていた。それはあきらかに、競技大会の時に撮ったらしい高校の水泳選手の写真だった。彼は、

だいたい17歳くらいで、ハンサムで、やせていた。

レイはページを繰り、「術後」とラベルのついた写真を見た。驚いたことに、それは結婚式の写真だった。レイは、花婿の顔をじっくり見てみた。その姿は、前の写真の男とはあきらかにちがっていた。

と、ドクター・ハザウェイが、写真の花嫁の方を、指先でトントンとたたいた。

レイは、まちがった人物の方を見ていたことに気づき、ショックを受けた。

あの高校生の水泳選手は、花婿ではなかったのだ。彼は花嫁！

写真の中で、彼はウエディングドレスを着ていた。彼の鼻は小さくなり、彼の唇は豊かになっていた。そして、ドレスからのぞく彼の胸には、はっきりと「谷間」があった。

彼は、うっとりした表情で、花婿を見つめていた。

「驚いた？ ……ふふ」

ドクター・ハザウェイが言った。

「これはシンディの写真よ。彼女は、20歳になるまで、カールという名で呼ばれてたのね。高校時代のカールは、男っぽい性格だったらしいわ。でも、卒業したあと、毎日の生活に、どこかしっくりしない感じを抱いた。大学生になったある日、彼のルームメイトが部屋に帰ってくると、そこには、ドレスとハイヒールで着飾った彼がいた。そのルームメイトは、彼をとがめたりせずに、心理学者と会うことをすすめた。そして、最終的に彼は、マッチョでタフであることは、自分の望みではないと悟った。彼が本当に欲していたのは、おとなしくて女性的な自分だったのね。彼は、私に連絡を取って……

そして、つまり……あなたが今見ているのが、その結果ってわけね」

レイは、自分が感じている驚きを咀嚼しきれないでいた。

「で、彼は、男と結婚した？」

「彼女は……ね」

「でも……彼女は、自分の過去について、だんなさんにどう話したんですか？」

「彼女には、話す必要がなかったの。だって、彼女の夫は、かつてのルームメイトなんだもの。女性としての体はもちろんだけど、むしろ友人の心に、そのルームメイトは惹かれたみたいね」

レイはアルバムをボタンと閉じた。

「すみません。これは、ちょっと突飛すぎます。男が女になる？　なんだか出来の悪いSF映画を見てるみたいいです。僕の件が、こういうことに含まれ

るんだとは思いたくないです」

ドクター・ハザウェイは、べつに驚いた様子は見せなかった。

「レア、あなたが、これに何の疑いも持たなかったとしたら、その方がおかしいでしょうね。でも、あなたが今毛嫌いしているなにかを、あなたに納得させられないとしたら、私はプロフェッショナルじゃないし無責任だと思うの。私は、あなたに、女であることは、けっしてみじめなことじゃないってわかってもらいたい。今思ってるのは、それだけよ。それは、あなたが考えてるほど遠くにあるわけじゃないって、あなたは気づくかもしれないわよ」

「僕には、カール……いや……シンディのしたようなことは、できないです」

「決めつけない方がいいわ。もし、あなたに街なかで会ったとしたら、私は、きっと、いえ、ぜったい男だとは思わ

ないでしょうね」

レイは不満の声をあげようとした。

「聞いて」

しかし、ドクター・ハザウェイはつづけた。

「なんなら、今、実際に変身の真っ最中の人と会ってみる？ 他の診察室に、あなたのすべての疑問に、実際の体験から答えてくれそうな患者さんがいるから」

「……はい」

レイが言うと、ドクター・ハザウェイは、部屋を出て行った。

レイは、戸惑いの中にいた。

あのウエディングの写真が、頭から離れない。

ひとりの男が女になりたいと決意し、そして実際、完璧と言える女になる。

ほとんど理解できない世界だった。

数分後、ドクター・ハザウェイは、二人の女性を連れて戻ってきた。

一人は、背が高くすらりとした、黒のストレートヘアの女性。もう一人はそれより低い。こちらは、やわらかなブロンドの髪、ふっくらした唇が印象的で、ちょっと神経質そうな感じだった。彼女は、入院患者用のガウンを着ていた。

二人の女性は、ともに、とても美人だった。

ドクター・ハザウェイが、彼女たちを紹介した。

「こちらはメアリー」

ドクターは、ブルネットの方を示した。

「そして、こちらが、彼女のご主人のリー」

レイは、ぼう然としたまま、二人と

握手した。

きれいなマニキュアの爪、女らしい髪、そして金のピアスをのぞけば、リーは女物は何も身につけていなかった。男女兼用の病院のガウンは、彼の体をほぼ被い、性別について何の手がかりも与えていない。それでも彼は、まちがいなく女性に見えた。

いったいなにが起きたのだろう、この……夫に？

リーは、すべて承知しているというように、レイに笑いかけた。

「何がなんだかわからなくなってるみたいね、レア。あたしたちがどうしてこんなふうになったのか、お話しするのは、あなたのためにもなると思うわ」

レイは、うなずいた。

と、メアリーの方が説明をはじめた。「ほんの数年前まで、リーと私はどこにでもいる普通の夫婦だったの。私は

弁護士で、リーは整備士。私は、男としてのリーと完璧に幸せな生活を送っていたし、彼も男であることに何の疑いも持っていなかった。すべてのことがノーマルだった。

そんなある日、私たちは、私の職場で開かれた仮装パーティに招待されたの。リーと私は相談して、彼は女装することになった。私は彼に、昔着ていたダンスパーティ用のドレスを着せて、髪をセットし、メイクもした。彼のサイズのハイヒールも揃えたの。その姿が、あんまり女っぽかったんで、二人とも驚いたわ。

で、私たちはパーティに行った。ところが、驚いたことに、誰も彼の正体を見破れないのね。私たちは、それがショックだったけど、そのままジョークを通そうと決めたの。私は、リーを私の友だちとして紹介した。それはヒ

ットだったわ！ 誰ひとりとして、彼の性別に疑いを持たなかったみたいなの。私、彼を説得して、男のふたり組とダンスしたりしたのよ。

その夜、家に帰ってから、リーに私のネグリジェを着せて、メイクラブした。ふたりともすてきな夜を過ごしたの。でも、ふたりとも、それはそれだけのことだって思ってた。どちらも、それをもう一度したいなんて、思ってたわけじゃないの。

数ヶ月後、同僚が、例のパーティで撮った写真を焼き増ししてくれたの。そのうち二枚は、リーがよく写ってた。私はそれを家に持ち帰って、彼に見せたわ。私が、完璧に女に見えるって言ったら、彼はそれに賛成しなかった。彼は、髪型がまだ男っぽいし、メイクもちゃんと決まってないし、ドレスも似合っていないって言い出した。

私が半分ジョークのつもりで、もう一回ちゃんとドレスアップしてみるかってきいたら、彼は賛成した。念のために言えば、その時点でも、まだそれはジョークの域を出てなかったのよ。

最初に彼に女装させた時、私はかなり適当にやっていたのね。パーティ以外の目的はなかったから。でも、この時は、すべて完璧にやってみた。彼のためにすてきなピンクのブラウスと、それに合ったスカートを買った。他にも、パンティやストッキングや、彼のサイズのヒールを何足か。私は、自分のブラにパッドを入れて、彼に着けた。

その土曜日、彼を女装させて、一日中そのままで過ごしたわ。彼が美人になったことに、私たちは二人とも驚いていた。結婚して何年にもなるのに、私は、その時はじめて、私の目の前にいたのが、こんなセクシーなレディだ

ったんだって気がついたのね。

夜、そのきれいな服を脱ぐ時になると、彼はなんだか悲しそうな顔をするし、私もとても残念なことのよう気がして、それで、私は、隣町の静かなナイトクラブへ行こうって提案した。そして、その店のコーナーのブースに座って、二人で、言い寄る男たちをかわしながら夜を過ごしたの。わくわくするような充実した時間だったわ。

その夜以来、私は、彼に頻繁に女装させるようになった。彼用の服を買って、メイクや髪の設定のしかたも教えた。

なぜそんなことをしているかってことを、二人でまともに議論したことはほとんどないわね。ただ私は、彼にやわらかくてかわいい服を着せるのが好きだったし、彼も、それが好きになっていった。

ちょうどその頃、私は、べつの州に給料のいい働き口が見つかった。それだけ収入があれば、リーは仕事を辞めてもよかったし、それなら、誰も知らない町で、本格的に女として生活できると考えた。

家で二人だけでいる時、私はずっと、彼に女装させていた。そのうち、二人とも、それだけじゃがまんできなくなって、週三回くらいは、彼に女の子の服を着せて、街に連れ出すようになった。

彼の正体を見破るような人は誰もいなかったわ。でも、彼は、誰かがヒゲに気づくんじゃないかって心配しはじめた。それで、私は電気分解をすすめたの。その電気分解をしてくれた女性がすてきな人で、あるドクターの電話番号を教えてくれた。それで、リーは、エストロゲン注射を打ってもらうよう

になったの。

それは、リーが新しいアイデンティティでものごとに対処する助けになったようね。彼は、女以外の何者でもないという仕草をするようになった。私の見るところ、たぶん、男の時にはなかったふたつのふくらみのせいね（メアリーの言葉に、リーは顔を赤らめた）。

ネバダに引っ越してくる時、私は、彼の男物の服をすべて、慈善事業に寄付したの。だから彼は今、フルタイムで女性として暮らしてるわ。

彼はこれまで、鼻や唇の整形と、それにももちろん豊胸手術も受けてきた。今は、性転換手術を受けるべきかどうか、決めようとしているところなの」

メアリーが話している間、リーはずっと黙っていた。ちょっと恥ずかしそうにしていたのだが、レイが見るとこ

ろ、恥ずかしがるのは、メアリーが男時代のことに触れる時だった。リーは、男だったという自分のルーツを忘れたがっているのだろう。

レイは、まだ混乱していた。

「つまり、ここで、今言ったようなことをしたってこと？ よくわかんないんですけど……」

と、それに、ドクター・ハザウェイが答えた。

「ええ。たぶん知ってると思うけど、ヒゲと体毛は電気分解法で永久脱毛できるわ。ヒゲが濃いと時間はかかるけどね」

レイは、知らず知らず、自分のヒゲの悲しい収穫量について考えていた。

ドクター・ハザウェイはつづけた。

「それから、男性へのエストロゲン投与は、さまざまな作用をもたらすわ。ふつうに見られる効果は、皮膚の軟化、

ヒゲと体毛の減少、毛髪の減少の停止、筋肉量の減少、男性性衝動の減退、胸と腰回りへの脂肪の再配分、乳首のサイズと感受性の増加……そんなところね。さらに望めば、他の施術もある。豊胸、美容整形、腹部狭窄、その他、男性の外見をより女性的にすることはなんでも。しばらく女性として暮らしたあと、完全な性転換を望むなら、専門の病院に紹介することもできるわ。それで、男性は、永遠に女性になれる」

レイは首を振っていた。

永遠に女性に……？

僕はただ、どうしたらいいのか、ちょっとしたアドバイスがほしいだけなんだ。

そこで、ドクター・ハザウェイから「で、あなたは何をするの？」ときかれ、レイはショックを受けた。

「い、いえ。もちろん、なにも！ 僕

はちょっとアドバイスが……。それだけです！」

と、リーが話しかけてきた。

「レア、あなたはまだよくわかってないわ。女性として生活するには、行動に気をつけるだけじゃ足りないの。偶然、危機に巻き込まれることはいろいろあるのよ。あなたの秘密が少し漏れれば、すぐにみんなが知ることになる。一度、あたしがどこかの試着室で着替えている時に、男の人がまちがって入ってきたことがあるの。しかも、あたしの知ってる人だった。彼には、あたしが本物の女じゃないってわかったはずよ。あたしは、あたしの仮面が剥がされると思った。まあ、どういうわけか、彼は、人には言わなかったんだけどね。でも、その時よ、あたしが胸をつくろうと思ったのは。レア、今やってることをうまく運ぼうというなら、

ドレスアップ以外にもしなきゃいけないことがあると思うわ」

レイは、恐る恐るきいた。

「あの……、ドクター・ハザウェイ、思ってることを聞かせてください。僕に何が必要なのか。あっ、でも、今の仕事が終わった時、影響の残るようなことをするつもりはないのを忘れないで」

「いいわ。まずしてほしいのは電気分解ね。そうすれば『ファイブ・オクロック・シャドー』なんて心配はなくなるでしょ。あなたは、そんなに心配する必要はないのかもしれないけど」

「ちょっと待ってください。それは永久脱毛ってことですよ！ そんなことしたら、一生ヒゲを生やせない」

ドクター・ハザウェイは、レイを見つめて言った。

「今のままなら、生やせるの？」

「……えっ、……いえ」

「あなたがヒゲを生やす確率はほとんどないでしょ。生えないものを生やすのは無理よね。ごくわずかな体毛を失うだけで、人からどう見られるか心配する必要がなくなるのよ。脱毛する？

それとも、男であることがバレる危険をとる？」

レイは屈服し、悲しげにうなずいた。

ドクター・ハザウェイはつぶけた。

「それから、女性ホルモンもはじめた方がいいと思うわ。繊細で女らしい特徴を持つためには、その方がいい。ショーの仕事の終わりが近づいたら、投与をやめて、もとに戻るために男性ホルモンに切り換えればいい。仕事が終わる頃には女性としての痕跡が消えていき、半年以内に、これまでどおりの男に戻れると思うわ。もし、女としてのなんらかの痕が残ったとしても、手

術で取り除けるし。まあ、あなたが、男に戻りたいと思ったとしたらって話ですけどね」

レイは、ドクターの言葉の含みを無視し、きいた。

「でも、ホルモンって、ほんとに効果が出るんですか？ あっ、いえ。僕が言いたいのは、おっぱいのこととか…それはまずいなって……」

ドクターは、ちょっと考えてから答えた。

「さっき言ったように、ホルモンというのはいろんな働きをするもの(※)よ。女装して女として行動することは、大きく見かけを変えるけど、ホルモンはいろんな意味で微妙よね。ウソはつきたくないからはっきり言うけど、まず、あなたの男としての機能は使えなくなる。やめれば、ちゃんと戻るけどね。乳房については……はっきり言う

のがむずかしいの。大きくなるのはまちがいないけど、もしかすると、ペチャパイの女性くらいにしかならないかもしれない。いちばんいい目安になるのは、あなたの女性親族の平均。だいたい、それよりワンサイズ下のブラってところかしら。もし、もっと大きくしたいって言うなら、すてきなインプラントを入れることもできるわ」

(※訳注 原文は‘tricky things’「慎重を要するもの」の意もあり)

レイに母親の記憶はないが、写真は見たことがある。彼女は、すごく胸が大きかった。もしドクターの言うとおりにしたら、ホルモンは、レイに「ちょうどいいサイズ」の胸をもたらすことになる。

レイは、ちょっとの間考えていた。提案されたすべてのことが、ひどいことに思えた。でも、それを受け入れ

た方がいいと思わせることがひとつだけあった——正体がバレることへの強烈な恐怖。

けっきょくレイは、電気分解とホルモン注射に合意した。

メアリーとリーは、レイに、正しい選択だと思うと言い残し、自らの診察室に戻って行った。

ドクター・ハザウェイは、元気づけるような微笑とともに、レイの腕に一本の注射をした。

レイは週一回の電気分解と月一回の注射の予約を入れ、代金を支払うために、待合室に戻った。

記入するように言われた何枚かの用紙を埋めながら、レイは二度ほど、待合室にいる「女性」たちに神経質な視線を送った。

レイは、彼女たちに男性としての像

を当てはめてみようとした。

彼女たちの多くは、典型的な女性より背が高い。何人かは手が大きい。標準的な女性より、多少えらが張っている気もする。

しかし、もちろん、ふつうに見ただけでは、それらの特徴に誰も気づかないだろう。レイは、その秘密を知っているからわかるに過ぎない。

レイは、「女性らしさ」に深入りしすぎないようにしようと心ひそかに誓った。

クリニックを出たところで、レイは真新しい女性用の腕時計を見た。

まだ、時間は早い。ブライアンは修理に出していた車を取りに行っているはずだから、ホテルに戻ってもやることはないだろう。

それで、レイは軽く食事をしようと

思った。

トレーシーが言った脂肪が多い食べ物は控えろという言葉思い出し、近くのベジタリアン・レストランに入った。

テーブルに着こうとした時、すぐ近くのテーブルに、クリニックにいた男が座っているのに気がついた。ドクター・ハザウェイが、彼女の患者のフィアンセだと言っていた男だ。その男の隣には、小柄で、明るい茶色の肌と黒い巻き毛の女性が寄り添っていた。

レイは、あきれたように首を振った。彼らは、どこにでもいる幸せそうな若いカップルに見えるのだ。

それを恐れていたにもかかわらず、彼らはレイに気づき手招きした。ことわる理由も見つからず、レイは席を替わって、彼らに合流した。

男はダンと名乗り、フィアンセの名

をターニャと紹介した。

レイは、気をつけて「レア」と名をつけた。

ターニャに、女っぽく見えるとほめられ、レイはびくりとしてまわりを見回した。レストランはすいていたので、人に聞かれる心配はないと彼らは思ったようだ。

レイはターニャに笑い返し、「彼女」も本物の女性にしか見えないと言った。

じつは、今のターニャのほめ言葉がうれしかったからだ。ターニャの目から見て女っぽく見えるなら、何も心配いらぬという気がした。

彼らと話している間——驚いたことに——、レイは心地よささえ感じていた。同じボートに乗っている人だと思えたからだろう。気がつくと、レイは、自分がこんなことをしている事情と、

今感じている心配について打ち明けていた。

「あたしも最初はナーバスになってたわ」

ターニャはそう言った。

「世界中から見られている気がして。でも、ある時から、自分はほんとの女の子なんだと思うことにしたのね。そしたら、いろんなことにストレスを感じなくなっていた。あなたもそう思えば、女としての暮らしが、すてきなものになるわ」

レイはちょっと考えてから言った

「あの……もしいやじゃなかったら、聞かせてくれない？ どうしてあなたはターニャになったのか？」

ダンとターニャは、くすくす笑った。

「そうね」

ターニャが話し始めた。

「はじまりは、高校生の頃。その頃、

あたしはトミーと呼ばれてたわ。

こうなったきっかけは、たぶん、あなたが考えてるようなこととは、ちょっとちがうの。

あたしは、あたしが恋しちゃいけない人……ダンに夢中になってしまった。でも、ダンはフットボール部のキャプテンで、背の低いめめしい男の子に関心を持ってくれるとは思えなかった。あたしは、世の中で、ひとりだけ取り残されたように感じてた。

思いつめて、落ち込んで、けっきょくあたしは、思いを姉さんに打ち明けたの。彼女は、すごくよくわかってくれた。そして、彼女が思ってることを、率直に言ってくれた。ダンは、女の子にしか興味がないから、女の子でないかぎり、あたしには魅力を感じないだろうって。

彼女に、いっそのこと女の子になっ

てみないかって言われた時、あたしは死になくなったわ。そんなことは思ったこともなかったから。でも、ダンがあたしのことに気づいてくれて、ダンの気が引けるなら、どんなことでもしたいとも思ったの。

学校のダンスパーティーが一か月後に迫った頃、姉さんは、あたしに、女の子になるための四週間の集中特訓をはじめた。ターニャはそこで生まれたの。ドレスとハイヒールで出掛けた最終学年のダンスパーティーの直前にね」

そこで、ダンが話を継いだ。

「彼女を一目見た時、僕はもうのぼせ上がってた。僕はちょうど、一週間前にガールフレンドにふられたばかりで、パーティーには一人で来てた。ターニャをダンスに誘って、その夜はずっと、彼女を抱いてたんだ。もう、完全に一目惚れだった。彼女にキスした時、

僕は、彼女こそ僕の運命の人だと感じた」

「もちろん」

ターニャがつづけた。

「そこには、彼が知らない小さな秘密があった。それであたしは、その年、二重生活を送らなきゃいけなくなったの。学校のある日はトミーとして、週末はターニャとして。

あたしはその時、けっして、女でいることが好きだったわけじゃないのよ。でも、それで、永遠にダンのそばにいられるんなら、永遠にこのままでもいいかなって思うようになっていった。彼が肉体関係を迫って、それをかわさなきゃいけない時だけは、いつもつらかった。あたしは、ほんとに、あげたかった。でも、彼にバレるリスクはおかせなかったから」

ダンがふたたび語りはじめた。

「僕がプロポーズしたことで、彼女は本当のことを話さなければならなくなかった。それをきいて、僕は、気が狂ったようになって、その場を飛び出していた。で、彼女と二度と会うのはよそうと誓ったんだ。でも、そんな解決は、五日間しかもたなかった。その五日間、僕はみじめだった。彼女を頭の中から追い出すなんて、とてもできなかった。で、けっきょく、朝の五時に、彼女の家まで車を飛ばして、僕はまだ君を愛してるって言ったんだ。

今、彼女は二年間、エストロゲンの投与をつづけてて、一か月後には、完全な性転換をすることになってる」

ふたりに対する畏敬の念すら抱き、レイはレストランを出て、タクシーでホテルへと向かった。

レイにとって、抱えきれないことば

かりだった。すべてが……すべての男から女になった人たちのことが。

最もよくないことは、レイ自身が、事実上、彼らに仲間入りすることを認めてしまったことだ。

女性ホルモン……！

そんなことは、もともとの契約には入ってなかったことだ！

ホテルに戻ると、ブライアンは、すでに数時間前に帰っていた。

彼が気のない感じで「どこに行ってた？」ときき、レイが「外へ」と言い、そのことはそれで終わった。

バーに誘うブライアンに、レイは「早く寝たいから」と言った。

部屋で一人になって、バスルームに入ったレイは、長い間、自分の体を凝視しつづけた。

服を脱いだその姿は、まだ男の体型

だった。

レイは、これが、どのくらいいつづくのだろうと思った。

レイの胸がふくらんできたら、ブライアンはなんと思うだろう？

第12章

ブライアンとレイの暮らしは、典型的なエンターテイナーの生活スタイルの中に落ち着いていった。昼はリハーサルをし、夜、舞台を務めるというパターンだ。

もちろん、レイの生活の中では、誰にも気づかれることなく、いくつかがことが進行していた。

まず、最初にあげなければならないのは、体の変化だろう。

あのクリニックに行った一週間後には、すでに目に見える変化がいくつかが現れた。

わずかにあった筋肉の張りがさらに減っていた。ヒップも多少大きくなった気がする。電気分解とホルモンのコンビネーションのおかげで、ヒゲは消えていた。肌はわずかになめらかにな

った感じだし、髪もちょっとツヤを増したようだ。

少し大きくなった乳首は、色が濃くなり、そして、ちょっと敏感にもなっている。胸にはわずかな脂肪のしこりがあり、それが時とともに大きくなっている感じだった。

ペニスも縮んだように見える。最後に勃起したのがいつだったかも、よく思い出せなかった。

もうひとつ別の奇妙な変化が、気持ちの上で起こっていた。

まだ、自分を女性だと見なすには至っていなかったにしても、女装者だという意識は次第に薄れていった。

まだ性欲は残っているにしても、女性を見て感じることは、少なくなっていた。

女物の服を着ることとメイクすることを、正体を隠すためにとらえるので

はなく、自分をより魅力的に見せるためにとらえるようになっていた。

レイには、それらの変化が、自分でも奇妙に感じられた。

マジシャンのアシスタントとしての暮らしは、考えていたよりハードだった。しかし、それは、女装しているからということではなかった。

ブライアンは、すべてに関して完璧であることを要求した。レイと舞台助手のドンに、何時間にも渡って稽古をつけた。ほんの少しでもよくないことがあれば、稽古を繰り返すのだ。

そのぶん、ショーはセンセーションを巻き起こした。ブライアンのイリュージョンやエスケープやトリックを見るために、全国から人がやってきた。

レイは、観客へのサービスであるかのように見せながら、エロティックな

動きで視線を引きつけ、ブライアンがトリックのタネを取りに動きやすいように誘導した。

レイは、瞬間移動させられ、消滅させられ、半分に（あるいは3分の1や4分の1に）のこぎりで引き裂かれ、さまざまなものに変身させられた。

ブライアンの演出のちょっと奇妙なところは、レイが関わるイリュージョンで、それを元通りにしてみせないことだ。レイを消してみせたら、終幕まで観客の目に触れさせない。レイをメス虎に変身させたら、虎のままにしておく。レイをのこぎり引きした場合、ブライアンは、半分になった体を舞台の両袖に運びこんだまま、もう一度くっつけてみせようとはしなかった。

トレーシーが舞台を務めていた頃、レイはその趣向をけっこう面白がっていたのだが、今はあまり評価する気に

なれなかった。以前は意識していなかったが、ブライアンには微妙に、アシスタントを支配たがる傾向がある気がするのだ。イリュージョンというのは全般的にそういうものだとしても、人を道具として扱うような点が、レイには多少腹立たしかった。

ある時のショーで、ひどくやじって進行を混乱させる男がいた。

すると、ブライアンは、その男をガードマンにつまみ出させるのではなく、手品を手伝ってくれと舞台の上に呼んだ。そして、「魔法の箱」の中に立たせ、おまじないを唱えはじめた。ブライアンが観客の注意を惹いている間に、ドンが、秘密の抜け道を通して、その男を劇場の外に連れ出す算段だ。

ブライアンのもともとのプランは、ただ、その男を消してみせることだったのだろう。でも、その夜、まだ観客

の前に出ていなかったレイは、舞台の進行にも役立つはずのジョークを思いついた。男が去ったあとの箱の中に入り込んだのだ。

カラであること予測しながらブライアンがそこを開けた時、そこにはレイが立っていた（観客の目からは、セクシーな女性が現れたように見えたはずだ）。

それでレイは、さっきのヤジ男を装った芝居をはじめた。ブライアンに「男に戻してくれ」と頼んだのだ。

ブライアンは、すぐさま、その意図を理解したようだ。

観客の笑い声の中、「私には、かわいい女性アシスタントが必要なのだ」と、それを拒否してみせた。

ブライアンとレイだけがそこに隠された本当の意味を知っているこのネタが、その後、ショーの定番となった。

毎日の仕事のコツをつかんでからは、レイはそれに思ったほどのストレスを感じなくなっていた。

ホルモンについても、そのおかげで女性として通用することを思うと、嫌悪感もなくなっていた。

そして、レイは、ラスベガスの街を楽しみはじめた。そこにはいつも何か面白いことが待っていた。

そうなったのには、別の側面もある。レイには珍しく、時間が余っていたことだ。

デッドスプリングスにいた頃、レイは三つの仕事をしていた。ひとつの仕事の勤務時間が終わるとすぐさま、次の仕事へと駆けつけるという毎日だった。睡眠時間も、日に五時間とればいい方だったのだ。

ところが今、準備の時間やリハーサ

ルの時間を除いても、自由になる時間はたくさんある。お金だって、はじめて、好きに使えるだけの額を手にしていった。

最初レイは、そんな自由時間をブライアンにまとわりつくようにして過ごしていた。二人でショー見たり観光したりして楽しんだのだ。

しかし、そのうち、ブライアンがそれに気が向かないそぶりを見せるのに気がついた。

その理由は容易に想像できた。ブライアンのような男にとって、自由な時間を女性とともに過ごしたいと思うのはあたりまえだろう。そんな時、すぐそばにかわいい赤毛の女の子がいたのでは、じゃまにしかないのだ。

それで、レイは、一人で行動するようになった。

一方、レイは、ホテルの女性出演者

たちの多くと友だちになっていた。仕事が終わると、彼女たちといっしょに出かけるようにもなった。友だちと街をぶらつくのは、楽しいものだった。レイは、もはや以前のように孤独感を感じることもなくなった。もちろん、彼女たちに秘密を知られず、女友達でいられるという前提のもとではあったが。

レイはまた、ベガス公演が終わるまでに卒業証書を取得できる夜間高校に編入手続きをとった。もちろん、その証書には「レア」と書かれるのだろうが、その時がくれば、修正させることもできるだろうと思っていた。

しかし、そんなレイの暮らしがおかしなものであることもたしかだろう。ホテルでも、友だちの間でも、運転免許においても、また学校でも、そこに見えているのは「レア」という存在な

のだ。レイ自身の気持ちの中とブライアンとトレーシーの記憶をのぞけば、レイという人間は、もうどこにも存在しなかった。

アイデンティティを変えることって、こんなに簡単なんだろうか？

レイは、もとに戻る時も、これほど簡単ならいいが……と思った。

リハーサルの合間のある昼休み、レイは、裏方のドンといっしょに昼食をとった。ドンは、ハンサムでがっちりした体格の黒人で、デッドスプリングス時代にレイがやっていたのと同じ仕事をしていた。彼は、ユーモアのセンスを持った男で、ブライアンやレイともすぐに親しくなった。

レイは、ドンを、ある種、不思議な存在として眺めていた。

レイ同様、ドンは貧しい生まれだ。

レイ同様、誰からも何も与えられずに育っていた。すべてのことを独力で賄っているのだ。

でも、レイとドンは大きくちがった。ドンは、努力もなしで、女たちにとって魅力的な存在になりえている。それに対して、レイの方は、魅力的な女に見えるわけだ。

ドンは夜間の専門学校に行っていて、あと数ヶ月すると、全日制の法律学校に入学するのだという。レイの方は、貧困から免れるためには、女装せざるを得なかったのだ。

同じような貧しさからスタートして、どうしてドンは男として成功し、レイはそうならなかったのか。

考えるまでもなく、答えは明白だった。

ドンは男らしいのだ。背が高く、体格もよく、濃いヒゲがある。低い声と

男っぽい雰囲気を持っている。

そんなドンを前にして、自分がこんなふうに女装していることは、なんだか、笑い出したくなるような馬鹿馬鹿しさだった。

その夜、メイクを落としたレイは、長い間、姿見の前に立っていた。

もう電気分解は、すべて終わっていた。ホルモンの効果とも相まって、彼の薄い体毛は、全滅していた。

きれいにくびれたその体型に笑いかけてみる。もう、コルセットは必要なかった。

男性の組織は、小さくなっている。彼が望んだとしても、それが勃起することは、もはやなかった。

胸にはふくらみがある。それは、男の胸ではなく、ちょうど、発達しはじめた十二歳の少女の胸だ。これをうま

くおさめるためには、これまでよりパッドの小さなブラを買わなければならないだろう。

レイは、思わずため息をついた。

彼はいつも、女性の乳房を両手に包むことを夢見ていた。ある意味、今、それが実現したのだ。

第13章

それは、ネバダらしいある暑い日だった。

ホテルの客の多くが、この暑さを理由に、プールのまわりに寝そべっていた。

人々は、泳ぎ、食べ、日光浴した。

男たちは、プールサイドのきれいな女たちを見て楽しんでいた。

特にひとりの女が、彼らの注目の的になっていた。若い赤毛の女だった。

彼女は、サングラスをかけ、ごくふつうのワンピースの水着を着ていた。胸と前の部分は被われていたが、そばかすが目立つ背中や、腕と脚は、外にさらしていた。

その視線を捕らえようとする男たちを無視し、デッキチェアに横たわって陽を浴びている。

彼女のまわりには、何か特別な雰囲気
気が漂っていた。ミステリアスで、冷
たそうで、でもどこかエロティックな、
心惹かれるけれど、簡単には手に入り
そうもない雰囲気だった。

しかし、プールサイドの男たちは、
意気消沈することになった。一人のハ
ンサムな男が彼女に近づくと、すぐに
声をかけたのだ。そして二人は、親し
そうに話し始めた。どうやら男は、彼
女の恋人にちがいがなかった。

プールサイドのすべての男たちが嫉
妬に駆られた。少数の男たちは、件の
男が、ホテルのショーのマジシャンで
あることに気がついた。

「くそっ、ラッキーなやつめ」

サラリーマンらしい観光客が、憎々
しげにつぶやいた。

「芸人という連中は、いつだって、立
ち上がったばかりのヒヨコに手をつけ

るもんさ」

レイは、ブライアンのひと言ひと言を、しんぼう強く聞いていた。

そして、ブライアンが話し終えたところで、穏やかに、彼は気が狂っていると指摘した。

「なぜだ」

ブライアンは、言い返してきた。

「拘束服エスケープは何年間もやってるんだぞ。それを水の中でやったって、何が問題だっていうんだ？ ちょうど、このプールだって使えるわけだからな」

レイはため息をつきながら言った。「あなたは、前にそれをやろうとして、溺死しかかったのを忘れたの？」

「それがどのくらい金になったのか、忘れたのか？ これは、今シーズン最大のヒットになるはずだ！」

「だめ、ブライアン、危険すぎる！」

レイは、すぐさまそう言わざるを得なかった。

しかし、ブライアンは、けっして、その危険から逃げようとはしなかった。

レイが止めようとする前に、ミスター・ペニーのオフィスへと向かった。

レイはぶつぶつ言いながら、あわててローブを羽織り、そのあとを追った。

ミスター・ペニーは、ブライアンの口上を興味深そうに聞いていた。そして、にっこりと笑った。

「いいぞ、ブライアン。そのショーで、君は本物のスターになれるはずだ。で、準備にどれくらいかかる？」

ブライアンは頭の中で計算する表情をしたあと答えた。

「うーん、これからずっと稽古したと

して、二ヶ月半後には、準備が完了すると思います」

「素晴らしい」

ミスター・ペニーが言った。

「今すぐ、大々的に宣伝をはじめよう。これは大ヒットするぞ」

そんな言葉を聞きながら、レイは、無力感を抱いていた。

ブライアンは、馬鹿みたいな客寄せスタントに命を賭けようとし、ミスター・ペニーが考えていることは、ただ、その経済効果だけなのだ。

レイは、それに反対したかった。でも、できなかつた。

どう反対しろというのだ？

たとえば、レイでなく、ドンのような人間が反対意見を言えば、ブライアンやミスター・ペニーも耳を傾けるだろう。でも……。

受け入れたくはないけれど、世の中

は性差別で満ちている。こんな場合、女の意見など、真面目に取り上げてはもらえないのだ。

レイは、誰かわかってくれる人に、自分の思いを聞いてもらいたいと感じた。それで、オフィスを出て、最近友だちになったスーザンを捜した。

スーザンは、ホテルのショーで、かなりきわどいダンスを演じている年上のショーガールだった。彼女は、楽屋にいた。

レイは、すぐさま、彼女に、その胸の内をとうとうとしゃべった。

女の言うことは、どうしてこんなに聞いてもらえないのか。女は、どうしてこんなに尊重されないのか。男たちは、どうしていつも、女を二級の市民と見なすのか。

スーザンは、それを微笑みながら聞

いていた。

「レア、今ごろそれに気づくなんて、ちょっと驚きね。政治家が何を言おうが、それが男たちの世界よ。彼らはみんな、あなたに、ベッドの中と、子育てと、料理を作ることで力を発揮してくれれば、それでいいと思ってるの。でもね、私たちに武器がないわけじゃないのよ。あなたがそのスタントのことを心配する気持ちを、もっとブライアンに受け入れさせることはできるはずだわ」

「ちょっと待って」

レイは言った。

「あたしが一生懸命言えば言うほど、ブライアンはどんどん意固地になるわ。まるで、水中エスケープができることを、是が非でも証明しないといけないみたいに」

「そこがポイントよ。あなたが男に、

なにかができないだろうなんて言えば、男は、それができることを証明せざるにいらなくなるの。そこであなたがすべきことはね、たとえば……明日、仕事が終わったあと、いっしょに飲まないかって、彼を部屋に誘ってみるの。静かな音楽をかけて、あなたは話し始める。彼のショーがいかに素晴らしいものだったか、彼がいかに実力を発揮しているかをね。話しながら、肩をもんであげるのもいいわね。それから、胸が大きく開いた服を着て、彼の前にひざまずいてみせるとか。でね、彼が、そんなすてきな夜を楽しみだしたところで、それをぶちこわしてやるの、涙でね。彼が『どうかしたのか』ってきいてきたら、あなたは泣きながらこう言う。『私は、どうしようもなく泣き虫な女だから、もし、あなたになにか起こったら、きっと耐えられな

いわ』って。彼が考え直すまで、あなたはそうやって泣き続けなければいいの。女の涙に勝てる男はいないわ。それで、あなたは、彼を手なずけられるってわけね」

レイは、思わず笑ってしまった。

ブライアンが女性に弱いのはよく知っている。でも、レイの場合は、ちょっと話が別だろう……。

「男って、そんなに簡単に手なずけられるものだって、ほんとに思ってるの？」

「もちろん。たとえばあなたなら、思いきり露出度の高いビキニを着て、プールのところまで行けばいいのよ。それだけで、男たちは、車を洗ったり、家具を動かしたり、何でも言うことをきいてくれるって保証するわ。男って、自分のことをかっこよくてクールだと思ってるけど、ちょっと体を見せてあ

げただけで、いきなり素直な子犬ちゃんになっちゃうのよ」

レイは、笑いをこらえていた。

たぶん、スーザンの言うとおりののだろう。

もちろん、レイの場合、ビキニは、その意図以上のものを見せてしまうことになるだろうが。

「でも、あたし、ビキニなんて着る気にはならないわ」

「……あれ？　もしかして、聞いてないの？」

スーザンは、急に真面目な顔になってそう言い、レイに一枚のチラシを手渡した。

レイはそれを読んで、いきなり恐怖に駆られた。

それは、ホテルの宣伝チラシだった。

そこには、こんな恐ろしい言葉が書かれていたのだ——

『来るべき夏、当ホテルでは、7月いっぱい、美人パフォーマー全員が、ビキニで出演いたします』

レイは、パニックに見舞われていた。「……そ、そうね。あたし……、ミスター・ペニーに、もっと古い女性的魅力が表現できるものを使うべきだって、言ってみようかしら」

「忘れなさい」

スーザンが言った。

「それが契約なんだから、しかたないわよ。気にすることないって。あなた、そんなにスタイルいいんだもん、よく似合うわ。それにさ、このホテルは、出演者に手を触れさせないっていうのがポリシーだから、もしお客の誰かがそんなことしようとしたら、あなたが『セクハラよ！』って言う前に、駐車場までつまみ出されてるはずよ」

スーザンはそう言うと、レイを安心

させるように背中をポンとたたき、行ってしまった。

レイは、まだパニックに陥ったまま、自分の部屋に走って帰った。

服を脱ぎ、姿見の前に立つ。

まちがいなく、体毛はない。まちがいなく、その肌は柔らかくてすべすべになっている。まちがいなく、乳房と乳首は男のものには見えないし、ペニスだってないも同然に小さくなっている。そしてこれなら、まちがいなく、ふつうのワンピース水着を、特別な注目を集めることなく着ることができる（実際には、ずいぶん注目を集めているわけだが、それはまた別の問題だ）。

でも、それは何の解決にもならない。ビキニには、想像力で補う余地はないのだ。

レイは、なんらかの選択を迫られていた。

あのチラシは、ビキニの種類を特定してはいなかった。だから、ボトムについては、ビキニパンツでなく、たとえば海水パンツのようなものをはいていたとしても、怒り出す人はいないと思えた。あの場所については特に問題はない。

しかし、考えなければいけないのは胸だ。その小さな肉のもりあがりでは、ビキニのトップからのぞくのには、けっしてじゅうぶんとは言えない。かといって、その胸は、男のものにも見えないのだ。大きくなった乳首は、とても少女っぽかった（それは奇妙なほど感じやすくなっている。一人でいる時、時折、自分自身でそこを愛撫しているのに気づくのだ）。

専門家のアドバイスが必要なことはまちがいなかった。

レイは、電話のところまで行き、ダ

イヤルした。

「もしもし、ハザウェイ先生ですか？
レアです。今からお会いできないで
しょうか？ ちょっと緊急事態なんで
す」

ドクター・ハザウェイは、レイが、
その不幸な物語を語り終えるまで、黙
って聞いていた。時折、何かメモしたり
、レアのカルテを見たりはしたが。

「だから、ハザウェイ先生、もう少し
ホルモンの量を増やしてもらうことは
できないでしょうか？ 七月までにビ
キニが合うようにならなきゃいけない
んです。あと、たった二ヶ月しかない
んです！」

ドクター・ハザウェイは、微笑んで
それを聞いていた。

レイが、まるで永遠に女性になるの
を望むようなことを言ったのがおかし

かったのだろう。

「レア、残念ながらそれは、そんなに簡単なことじゃないのよ。そのホルモンは、今、あなたの体の中で、男性ホルモンと競い合ってるの。あなたの乳房は順調に成長してるけど、少なくともあと一年は、ビキニはあきらめた方がいいと思うわ」

レイはふたたびパニックに襲われた。

「じゃ、じゃあ、僕の男性ホルモンを止めることはできないんでしょうか？

ビキニが着られないと、僕は仕事を失うんです。そしたら、ブライアンも……」

「ごめんなさい、レア。エストロゲンだけを完全に働かせるには、あなたの睾丸をとってしまおうしか手がないわね」

「それは、ぜったいダメです！」

レイは叫んでいた。

「落ち着いて。たとえ、あなたが頼んだとしても、私はそんなことしないわ。それは、あなたの問題に対する正しい解決じゃないものね」

「正しい解決……が、あるんですか？」

ドクター・ハザウェイの言葉に、レイは聞き返した。

「ええ、胸に、インプラントを入れることはできるわ」

「つまりそれは……豊胸手術ってこと？ でも、それじゃあ、永久にふくらんだままってことになるんじゃないですか？」

「それに対する答えは『イエス』でもあるし『ノー』でもあるわ。あなたがそれをしたとしても、もう一度手術をすれば、男の体に戻ることもできる。それまであなたは、シャツを着なきゃいけないような時には、どうしてもブラ

が必要になるでしょうね。それは女にさらに近づいたことになる。でも、永久にってことじゃないの。インプラントは取り除くこともできるのよ」

「ちょっと考える時間をもらってもいいですか？」

「ええ、もちろん。でも、あんまり長く考えてる暇はないわよ。それなりに大きな手術だから、少なくとも一ヶ月くらいは、傷跡が黒くなったり青くなったりするの。七月にきれいに見えるようにしたいんだったら、できるだけ早く手術した方がいいわ」

またふたたび、運命は、レイを押しやる巡り合わせになったようだ。

「……わかりました。僕の胸を必要だと思う分、大きくしてください。で、僕が求めた時には、また平らな胸に戻すって約束してください」

「オーケー。もし、あなたがそれを望

んだ時にはね。もしかすると、あなたは、胸があることに喜びを感じてしまうかもしれないけれど」

ホテルのスケジュールでは、ある旅公演のミュージカルが一週間、上演されることになっていた。それを挟む何日間か、ブライアンとレイは仕事が休みになっていた。

レイは、その期間を利用し、手術をすることにした。

第14章

およそ一ヶ月半後、ブライアンは、例の水中エスケープの準備をおおかた終えていた。

ちょうど同じ頃、彼のマジックのネタは、次第に常軌を逸したものになって行く傾向にあった。

今この瞬間、ブライアンは、ステージの上に大の字に寝て、手枷足枷されていた。

彼の真上には、ホテルを修復している業者から借りた8000ポンドの冷房ユニットがぶら下がっている。そのユニットは、一本の太いロープで吊されているのだが、そのロープは、ゆっくりと燃えていた。

ブライアンは、そのロープが燃えちぎれる前に、その状態から脱出するため、必死にもがいていた。もしそのエ

アコンが落下すれば、当然、彼を押しつぶすのだ。

レイは、舞台そでに立ってそれを見ていた。

彼は、そのすべてが単なるイリュージョンだと知りながら、このトリックが好きになれなかった。

ブライアンは、観客の緊張が極限に達するまでその状態を引っ張り、そこで、転がって逃げるのだ。それを合図にして、ドンが天井の隠れた位置からロープを切る。それで巨大な岩のようなエアコンが落ち、観客の目からは、ブライアンが死の寸前にかろうじて逃げたように見えるわけだ。

もちろん、そのロープには本当に火がついている。でも、ブライアンはいつでも、現実には危険な状態に陥る前に、拘束から抜け出しているのだ。

レイは、スカートの形を整えたりし

ながら、その瞬間を待っていた。

刻一刻と時が過ぎ、ブライアンは、やっと片方の手首の拘束を解いた。

ブライアンは、このトリックの価値をめいっぱい引き出そうとしているように見えた。

レイは、ブライアンに、そんなリスクを冒さないでほしいと願っていた。

もし、彼が、本当に……。

すべてのことが、突然、しかもスローモーションのように起こった——

——ブライアンの恐怖の叫び

——ブライアンが押しつぶされることを悟ったレイの怯え

——ドンの狂乱

——ロープの火を消そうとかけられる
消化器の薬剤

——そして……ちぎれるロープ

——20フィートの距離を落下する4トンの機械

——立ちのぼるほこりと混乱

——すべての動きを止めたステージの上のガラクタの山

——静まりかえる客席

そこで……

髪を乱し、ケガをしたように見えるブライアンが、ゴミの山の上に這い出してきた。

「ワーオ！」

彼は笑いながら言った。

「このトリック、もっと練習しなきゃ！」

観客が笑いを爆発させた。

そのエアコンは、本物ではなかった。段ボール製の模型だったようだ。

すべては、ジョークだったのだ。

ブライアンが勝利の足取りでステージを下りる時にも、その耳には雷のような拍手喝采が届き、鳴り響いていた。

……どうだ、思い知ったか！

『馬鹿みたいに退屈なマンネリ舞台』
今週初め、地方紙に書かれた彼のショーへの批評の一節を、ブライアンは思い出していた。

……おい、もし前言を訂正しなきゃ、あんたたちに未来はないぜ！

ブライアンは、上機嫌な笑顔で、楽屋のレイに近づいた。

「なあ、レア！ どうだ、みごとに料理してやっただろ、というか……」
——バシッ！

レイの平手打ちを食らい、ブライアンは、思わず後ろによろめいていた。

「……お、おい、何のつもりだ？」

「ふざけないでよ！」

レイは叫んでいた。

「どうして、ないしょで、あんなくだらないことをやるのよ。なんで、あたしにはひと言もないわけ？」

レイは、泣き出さんばかりに言った。
「す……すまない。ぼ……僕は、みんなに怖がってほしかったんだ……だ、だから……」

「冗談じゃないわ！ あたしさえ出し抜こうっていうの？」

「だ、だから、できるだけ、リアルに……見せようと……」

楽屋裏にいる人々全体が、レイとブライアンを見ていた。

レイの瞳に涙が溜まってきていた。
「あなたなんて、大っ嫌い！ もう二度と話したくない！」

レイは、すすり上げながら、自らの楽屋に駆け込んで行った。

ブライアンはまわりを見回した。

すべての裏方の人たちが、彼の視線を避けるようにした……ドンだけをのぞいて。ドンは、笑いを浮かべながら、ブライアンを見ていた。

「ふ……、君はわかってくれるのか？」

ブライアンは言った。

と、ドンは首を振った。

「あんたは否を認めるべきだよ。あんたの方が、まちがってる。……ちっ、あんたのせいで、俺だって心臓が止まりそうだったんだぜ。かわいそうに。レアにどんな思いをさせたのか、よく考えた方がいい」

けっして人生で初めてというわけではないが、ブライアンは、よく考えもせず自分のプランを押し通したことを反省していた。

「どうやら、みんなに謝らなきゃいけないようだな」

「まあ……」

ドンは笑顔で言った。

「俺のことはいいさ。俺は、そんなヤワじゃないからな。でも、レアをそんなに悲しませた以上、あんたは彼女に

詫びるために、カラスを食う練習くらいはした方がいいと思うよ」

「ああ、そうだな……他に、アドバイスは？」

「チャーミングに、礼儀正しく、それから、けっしてえらそうにせずに、許してくれと言うこと。……ああ、そうだ。もうひとつ……」

「何だ……？」

ドンはふたたび、にっこりと笑いながら言った。

「ああ。あんたを見てると、どうやら俺の口からはっきり言った方がいいと思うんだが、今のこととはべつに、ちょっとした情報がある。……レアは、あんたに惚れてるぜ」

ブライアンは、必死で驚きを取り繕おうとした。

「な、なにを馬鹿なことを……」

「いいかい。みんな噂してることなん

だぜ。彼女が誰ともデートしないのを、おかしいと思わないのか？ その上、彼女は、いつもあんたのそばにいます。他にでもある。たとえば、先週、あんたが足の上にチェーンソーを落とした時、彼女はなんであんなに気が狂ったみたいになったんだ？ 救護室に駆け込んだのも彼女なんだぜ。たとえば、なんで彼女は、あんたがガールフレンドをつくると、それをすぐ終わらせてしまうんだ？ 女がそんなふうになる理由はふたつしかない。で、彼女があんたの母親じゃないとすると、考えられる理由はひとつだけだ」

ドンは、今や、顔中に、冷やかすような笑いを浮かべていた。

それを見て、ブライアンは、なんだかひどく恥ずかしくなってきた。

それで、謝りに行くからと、その場を早々に引き上げた。

自分の楽屋に向かいながら、ブライアンは、ドンの言ったことを考えていた。

他のスタッフにないしょであのスタントをやったという判断がいくら正しかったとしても、そんな主張はしばらく心に秘めておく方がいいだろう。それははっきりしていた。

でも、ブライアンを当惑させているのは、ドンがつけ足したことだった。

レイは男だ！ 彼はブライアンのことをそんなふうに見たことなど、ぜったいにはないはずだ。

ドンは100パーセントまちがっている。そうだ。ぜったいにちがう。180パーセントちがう……はずだ。

けっきょく、ブライアンがレイを見つけ出せたのは、ホテルの自室に帰ってからだった。

レイは、すでに、官能的なステージ衣装から、感じのよいサンドレスに着替えていた。

二人の部屋をつなぐドアを開けてから、ブライアンは、そのドアをノックした。

レイは、壁を見つめたまま言った。「出てって！」

「そんなこと言わずに。レア、お願いだから」

ブライアン自身は気づいていなかったが、この頃彼はよく、二人きりの時でも、レイのことを「レア」と呼んでしまう。

レイは、そこで振り向き、冷たい視線を浴びせてきた。

ブライアンは、それにおどおどした目をしたが、指を鳴らすと、何もない空間からバラの花束を出して見せた。

彼はそれを、いかにも謙虚そうにレ

イに手渡した。

レイは、かすかな微笑みを隠すことに、なんとか成功したようだ。

ブライアンは、そこで得たアドバンテージに飛びついた。

「レア、あんな、プロらしくもない馬鹿なことをやって、悪かった。許してほしい。君は僕のアシスタントでかけがえない友人だ。それなのに、今夜僕のやったことは、礼儀をひどく欠いたことだった。僕は愚かにも、自分のことしか考えてなかった。君の心の中に、僕を許そうという気持ちは見つからないだろうか？」

ブライアンは、レアを子犬のような目で見つめた。

レイの顔に笑いが広がった。

「知らないっ。……でも、もう、僕……あたしに話さずに、演目を変えたりしない？」

「ああ、約束するよ」

「あたしに相談なしに、どんな危険なスタントもやらないって約束できる？

あたしは、共演者なんだし、今度の水中スタントのことは、心配でしかたがないのよ」

「わかった。たった今から、僕は、まず最初に君に話すよ」

「それから……今夜、ディナーに連れてってくれる？」

「イエス」

「オーケー。許してあげる。今回にかぎり、ね！」

その言葉で、二人は微笑みをかわした。

さらにレイは、くすっと笑ったみせた。それは、とても女の子っぽい笑い方だった。

ブライアンは、さっきのドンの言葉を思い出し、なんだか落ち着かない気

持ちになった。

ブライアンは、目をそらすために、レイの部屋の中を見まわすようにした。

部屋中のどこもが、レイが女性化していることを表していた。

シャワー室に干したパンスト、女性雑誌のバックナンバー、コーヒーテーブルの上の一对のイヤリング、クローゼットのハイヒール……。

そして……、ひとかたまりに積まれたカセットテープが、ブライアンの目にとまった。

「なに？ ヒット曲でも入ってるの？」

ブライアンはきいた。

レイは、なぜかおたおたしたように見えた。

「え？ ……ううん、なんでもないの」

その声がちょっと裏返った。

当然、それが、ブライアンの関心を

引くこととなった。

そして、そのカセットのタイトルを
読んでみた。

「自己暗示……？ なにこれ？ スペ
イン語の睡眠学習でもやってるわ
け？」

レイは、目に見えて顔を赤くしてい
る。

「そうじゃ……なくて……」

「じゃあ、いったい、なんのために…
…？」

レイは、もじもじと口ごもっていた
が、やがて言った。

「トレーニング……。もっと、女らし
く考えるための……」

ブライアンは信じられない思いで、
もう一度ラベルに目をやった。

そこには、メッセージの中身につい
ては、なんの表示もなかった。ただ、
片面には、「睡眠時の潜在意識向け」

のメッセージであることが書かれ、もう片面には、「覚醒時用」のメッセージであることが記されていた。

ブライアンは、そのテープを、レイのステレオに入れてみた。

官能的な女の声が語りはじめた——
「あなたは、美しい女なのよ。ゴージャスで、もちろんセクシーな。あなたは、男の目を引きつけるの。男たちは、あなたに触りたがり、キスしたがり、セックスしたがるわ。あなたは、そんな視線を、楽しみなさい。男たちの愛欲の対象であることは、うれしいことよ。あなたは、受け身である方が好きでしょ。男にキスさせることは、自然なことなのよ……」

ブライアンは、あわてて、そのテープをつまみ出した。

「レア、君はいったい、なんて……なんでこんな馬鹿なものを聞いているん

だ。こんなものは、君の心を狂わせるだけだろう！」

「それは、あたしを、女の子らしい気分にしてくれるわ。今のは……いちばんよくない部分を聞かれちゃったけど、ほとんどは、料理とか、ファッションのことなのよ」

「こんなものは、捨ててしまった方がいい。君は今でも、うまく、女のふりをしてるじゃないか！　なんでこんなテープまで使って、女のように考える必要なんてあるんだ？」

レイは、しばらくの間黙っていた。そして、ふたたび口を開いた時、まったく関係ない話をはじめたように見えた。

「ブライアン、舞台上でパフォーマンスしてる時のあなたって、いつもとちがってるでしょ？」

その言葉に、ブライアンは、ちよっ

と当惑した。

「なにが……言いたい？」

「舞台の上のあなたは、神秘的で超自然的に振る舞ってる。あたしたちみんなが知ってるような、快樂主義の変人じゃあない」

ブライアンは、最後のふたつの単語を聞かなかったふりをした。

「ああ、たしかにそうかもしれない。僕は、君の言うように、典型的なステージマジシャンを演じてる。でも、これはステージ・ペルソナというもんだ。みんなやってることだ」

「あたしも、それをしてるのよ。あたしが言いたかったのは、そこなの。想像してみて。もしあなたが、そのステージ・ペルソナをはずすことができないとしたら、どうする？ もし、四六時中、神秘的な魔法使いでいなきゃならないとしたら、あなた自身でいられ

る時間はなくなるのよ。一瞬たりともね」

ブライアンは、やっと、話の全体像が見えてきた。

レイはさらにつづけた。

「あたしは、レアであることをやめることはできないのよ。ずっとね。いつも女子用のトイレを使わなきゃいけないつらさが、あなたにわかる？ 楊枝で歯をほじることも、ゲップさえ許されないつらさが。きれいな女の人を見かけても、けっして誘うことができないつらさが。そんなふうに生きていくためには、女の子のように考えるしかないじゃない。あたしたちは、ここまでラッキーだったわ。これを台無しにしないようにしましょ」

ブライアンは、レイの目を見つめて言った。

「僕は、けっして、君に不幸せになっ

てほしいわけじゃない。君が僕のためにこうしてくれてるのはよくわかってる。だから、これが、君の人生を永久に変えてしまうようなことにならないようにしたいと思う」

と、そこで、レイはくすつと笑った。

ブライアンは、なにがおかしいのかという眼差しを向けた。

レイは、それに答えて言った。

「もしかすると、それは、もう遅すぎるかもしれないわ。ホテルの性差別主義的な服装規定のおかげで、あたしは、永久になるはずのあることをしちゃったんだもの」

その言葉は、ブライアンを、ひどく不安にした。

「なに……を？」

言葉をしばり出すようにしてきいた。

「向こうを向いて、目を閉じてくれ

る？」

レイにいわれ、ブライアンは従った。ブライアンの耳に、レイが服を脱ぐ音が届いた。

「いいわよ。見て」

ブライアンは、座っていた椅子から落ちそうになった。

レイは、ビキニを着ていた！ ビキニを！

生地の小さなショーツと、そして、さらに小さなトップ。

ブライアンは（これまでの経験で手が覚えている感覚から）それを「B」カップだと推測した。そこには、最新の外科手術のものらしいかすかな傷が残っていたが、でも、たしかに本物だった。

ブライアンは、支離滅裂なことを口走り、そのあと、今度は、まるまる五分間、それを凝視していた。

レイは、ついにその沈黙に耐えられなくなったらしく、言った。

「そんなにじろじろ見てるなんて、ホテルの客よりひどいわ」

その言葉が、ブライアンに、強烈な衝撃とともに現実感を呼び覚ました。

「し、しかし……、どうやって……？」

彼は口ごもりながら言った。

「インプラント。つい最近ね」

レイは、くすっと笑いながら言った。

「じつは、ずいぶん経費がかかったのよ。あなたのためにやったんだから、きっとあなたは、なにかすてきなことを言ってくれると思うわ」

ブライアンは、レイに、君はとんでもなくイカレていると言いたかった。それはやりすぎだと言いたかった。そして、そんなことはすべきじゃなかったと言いたかった。

でも、今さらそれを言って何になる

のか？　してしまったことはしてしまったことなのだ。

「レア……、その胸、とってもきれいだよ。とても女らしい。君は、とびきりの美人だ」

「ありがとう、ブライアン。馬鹿げたことをしたと、あなたが思ってるのは、よくわかってるわ。でも、これって、このロングランには、好都合でしょ。今あたしは、自分のことを女の子だと思い始めてるんだから、なおさらね。でも、安心して。じつは、公演が終わったあと、これは取り出せるんだって。それより、もしあなたが今夜あたしを連れ出すつもりなら、あたし、用意をした方がいいわね」

レイは、そう言いながら、バスルームに入り、後ろ手にドアを閉めた。

ブライアンは、レイのそばかすがちの背中がドアの向こうに消えるまで見

守っていた。

それから彼は、麻痺したようによろめきながら、自分の部屋へと戻った。

レイは、女性のように見えるだけだ。

ブライアンは必死で、それを、自分自身に納得させようとしていた。でも、レアは、まったくもって魅力的だった。

もしレアの秘密を知らなかったとしたら、「彼女」をディナーに連れ出せそうだという興奮で、きっと自分は、バク転くらいしているだろう。いや、ディナーなんてなくても、自分はとうの昔に、レアをベッドに連れ込もうとしていたにちがいない。

さっき、レアの新しい胸をあんなに長く見つめていたのは、けっして好奇心のせいではないことを、ブライアンは認めざるを得なかった。

ブライアンは、レアを女性と見なそ

うとしているのは、けっしてレイ一人
じゃないだろうと、思い始めていた。

第15章

レイは、15フィートの高さのある飛び込み台の上に立っていた。ホテルのプールの飛び込み台だ。

レイは、ほとんど想像力の余地のないビキニトップが、果たして観客から見えているのかを心配していた。それは、彼の乳首をやっと隠すくらいしかないのだ（しかも、その乳首は、薄い生地を通して、輪郭をはっきりとさらしていた）。

レイの隣にはブライアンが立っている。彼は、拘束服に包まれ、両脚を固定され、体の上から下までチェーンでぐるぐる巻きにされて、その上、拘束服の腕に手錠までされていた。でも、マジシャンズ・ハットだけはかぶっていた。

レイとブライアンの立つ、その下に

は、何百人という観衆がいた。ミスター・ペニーは、このエスケープイベントを月を渡って大々的に宣伝しつづけていた。それはまるで、ラスベガスのすべての人口が集まってきたように見えた。

ホテルが設置したスタンドは、定員いっぱいまで人が埋まっていたし、それよりさらに多くの見物人が、地上から双眼鏡で見ていた。

あるローカルテレビ局もやってきて、この模様を収録していた。

救急車と二人の救急隊員が待機していた。

ドンは、ボルトカッターを手に、プールの浅い方のふちで、緊急時の救出のための準備を完了していた。

ブライアンは、有頂天になっていた。これほどの観衆の前でのパフォーマンスは、初めてだった。これこそ、彼

の夢だったと言っていい。

一方、レイの方は、早くこの落ち着かないビキニとハイヒールを脱ぎ、温かいお風呂に入れたらと思っていた。こんな高い場所の冷気が、彼の乳首を勃起させ、隠しきれなくしているのだ。今、レイのやらなければいけない仕事は、ブライアンのためにマイクを持っていることに過ぎない。それでも、たくさんの観衆とミスター・ペニーは、レアに、セクシーな姿を要求するのだ。

ショーは、プランどおりに進行した。

観衆へのお別れのあいさつとともに、ブライアンの体は、プールに向かってはじけ飛んだ。

ブライアンは、観客を心配させるのにじゅうぶんな時間、水中にとどまり、そして、チェーンから解放された姿で、荒い息づかいとともに水上に顔を出した。

レイは、この時点では、ブライアンが五つの拘束具から抜けられるのをよく知っていたにもかかわらず、大きく安堵して見せた。

レイは、飛び込み台を駆け下り、ブライアンとしっかりと手をつないだ。

二人は観衆にお辞儀し、レイは、とっさの思いつきで、ブライアンのほっぺたにキスしていた。

これが、このショーを通じて、ブライアンがもっとも緊張した瞬間かもしれない。

レイは、押し寄せるカメラマンやサインを求める群衆から、可能な限り早く抜け出し、プールのロッカールームへと急いだ。そこで、蹴飛ばすようにハイヒールを脱ぎ、ローブを羽織って、自分の部屋へと向かった。

ホテルに入るドアに到達する前に、

誰かの震えるような声が、後ろから呼びかけた。

「あの……、すみません」

振り返ると、そこに、二十一・二歳くらいの若い男が立っていた。しゃくれ気味のあごと黒い髪、そして、平均よりは高い身長。どちらかと言えばハンサムな部類だった。

彼はなぜか、ひどく緊張しているように見えた。

「あの……こ、こんにちは」

彼は、噛み気味に言った。

「その……、さっきのショー、すごくすてきでした」

「ありがとう」

レイは、答えた。

「もし、気に入ったもらえたなら、ギフトショップで、収録したビデオを買えますよ」

「……えっ、……ええ。……あの、ち

よっと……もし、よかったら……今夜、僕とディナーに行きませんか？」

彼は唐突に、そう口走った。そして、思い出したように、あわててつけ加えた。

「あっ……僕、ラリーといいます」

レイは、「ノー」と言うつもりでいた。

レアになって以来、多くの男たちに誘われるようになった。そんな時、レイは——男が拒否された時の気持ちもわかるから——、いつも彼らを傷つけないよう気づかって、ことわってきた。

ただ、もちろんそれは、相手が馬鹿な男ではなかった時だ。そんなやつの場合、ぞんざいに「ノー」と言ってやることに、快感すら感じた。

ところが、今日の前にいる男は、それらとはなにかがちがっていた。

彼は、ひどく居心地悪そうに見える。

レアにことわられることがよくわかっていながら、「彼女」を誘い出す唯一のチャンスをあきらめきれなかったという感じだ。

レイは、思わず笑ってしまった。

ラリーは、レアのことを、自分にはけっして誘うチャンスなどない、有名モデルや大スターの部類だと思っているようだ。

……いいわ。なるようにもなれ！

「オーケー」

レイは、そう言っていた。

「8時に、『パンチョス』で会いましょう」

「パンチョス」は、このホテルのバー・レストランだ。すてきな店だが、そんなに高くはない。

「すごい！」

ラリーは、まるで宝くじにでも当たったような顔をした。

「かならず、待ってるから！」

レイは、ホテルの部屋に造りつけられたメーキャップテーブルの前に座っていた。

先刻から、いろいろな色や種類のシャドーを試している。クローゼットの中に吊された新しい服に似合うメイクを研究しているのだ。

その服は、レースでできた黒のミニスカートと、それに合わせた赤のブラウスとパンプスだった。レイはまた、小さな黒いバッグやイヤリング、そして黒のストッキングも、同時に買っていた。

レイは、ラリーとロマンチックな関係を持つつもりはなかったが、最高にかわいい自分を見せたいとは思っていた。

ドンドンとドアをたたく音が聞こ

え、レイが「どうぞ」とつぶやくのと
ほぼ同時に、ブライアンが入ってきた。

ブライアンは、まだ、ショーの時から着ているびっしょり濡れた衣裳を身につけていた。

「レア！」

彼は叫び声を上げた。

「やったぜ！ 僕らの評判は最高だ！」

レイはそれに微笑み返した。

ブライアンはいつも、「僕ら」という言葉を使うのが好きだ。観客の前では、たった一人の絶対者として振る舞うのに。

たぶん、レアのことを、ショーにとって欠かせないな役(※)だと見なしているからにちがいない。

(※訳注 原文は ‘an important part’ 「重要な部品」ともとれる)

「おめでとう」

レイは言った。

「あなたは最高だったわ。で、その服はいつ着替えるの？」

「あん？ ああ、一分のうちには。で、君はどうしてそんなに着飾ってるんだ？ 今夜はデートか？」

ブライアンは笑いながら言った。

レイも笑い返した。

「ええ、その通りよ」

ブライアンは、笑顔を引っ込めた。

「……デート？ 誰と？」

レイは、ブライアンがそのサスペンスを楽しめるように、ゆっくりと口紅を塗った。

そして、その意図が達せられたと思ったところで、やっと口を開いた。

「ラリーと。さっき、ショーのあとで会った、ちょっとかっこいい人よ」

ブライアンは、わけのわからないことを口の中でつぶやいたあと、やっとまともな言葉を発した。

「男と！ 馬鹿じゃないのか？ なぜ？」

「う～ん。あたし、土曜の夜でも、お家でじっとしてなきゃ、だめ？」

レイは、純情ぶって言った。

「そういうことじゃなくて！ 君は…
…君だって、男だろ」

「どうやら、ラリーはそう思っていないみたい。だいじょぶ。きっとバレないわ」

「もし、その男が、手を握ってきたらどうするんだ？」

「べつに、それくらいいいんじゃない？」

「そいつが、キスしてきたら？」

「そうね。ディナーをごちそうになるわけだし、口を閉じたままのキスくらいは許すでしょうね」

「もし、ベッドに誘われたら？」

「きっと、彼はそうしたがるでしょう」

ね。でも、平気。あたしは、そこで身を引くわ。最初のデートで身を任せるなんて、レディらしくないものね。…
…ねえ、このイヤリング、似合うかしら？」

「し、しかし、いったい何のために、君は男となんかデートするんだ？」

ブライアンは、今や大声を上げていた。

「あたし……僕は、女の子とデートするのは無理なわけでしょ。ちがう？
あなたが思っているような意味でなら、僕はラリーに惹かれてるわけじゃない。ただ、誰かとディーナーに行くことのどこか悪いのかって、考えることにした……の。もし彼が本気になったらすぐ、あたしは、こんな遊びをやめるわ」

ブライアンは、まだなにか言いたそうにした。

でも、レイはそれより先に言った。
「出て行ってくれる？ 今夜のために
着替えるから」

そして、微笑みながらつけ加えた。
「起きて待ってたり、しないでね」

第16章

けっきょくレイは、出掛ける支度に、二時間以上を費やした。でも、その結果は、それに見合うだけの価値があるように思えた。

パウダーをはたき、香水をつけ、服を整えて鏡の前に立つと、その姿は、ファッションショーの花道を歩いてもおかしくないように見えた。

短いスカートと胸の開いたブラウスは、肌を大きく露出し、官能的すぎない程度にエロティックだった。

最後にもう一度、メイクをチェックし、レイは「パンチョス」へ向かった。

ラリーは、店の前のロビーで待っていた。

口をぽかんと開けてぼう然と見てくるラリーのリアクションに、レイは、

大きな喜びを感じていた。どうやら、レイの姿は、昼間よりさらに良くなっているにちがいない。

レイは、ラリーが差し出した小さなバラの花束を、喜びの表情を浮かべて受け取った。

そして、ラリーの差し出した腕に自分の手をかけ、店に入った。

ラリーが、レアに気に入られるためならどんなことでもしようと思っているのが、レイには手に取るようにわかった。

レアのために椅子を引き、レアのルックスがどれだけすてきかをくり返し語りかけ、そして、男っぽく振る舞おうと努力しているようだった。

レイは、デートの時どうすればいいかというトレーシーのアドバイスを思い出した。それで、会話の話題を、ラリーの関心事に向けるようにした。

ラリーは、ラスベガス大学の工学部の学生だった。夜は、小さなカジノのバーテンとしてアルバイトしているらしい。アマチュアボクサーでカメラマンだともいう。

レイは、かわいい女の子らしく、それらの話に興味を示してみせた。

実際、レイ自身も、ラリーの語る物語に強い印象を受けた。

どうやらラリーは、素晴らしいアスリートで、一方では、それと同じくらい知性的な男のようだ。そんな才能や知識に恵まれているにもかかわらず、こと、レイに向かう時だけは、ひどく自信なさげな顔をする。レイは、そんなラリーの様子を、かわいいと思っている自分に気がついた。

また、いつの間にか自分が、ラリーの体をチェックしていたのにも驚いた。

そのハンサムな顔をべつにしても、ラリーはアスリートとしての鍛え抜いた体を持っていた。

性欲とはちがうものだという気はしたが、自分が、そんなラリーに対してドキドキするものを感じているのはたしかだった。

レイは、それを、ホルモンと催眠テープせいだと考えることにした。

ラリーは、デザートがやって来るまで、自分自身のことについて話し続けた。

トレーシーの言っていたことはまちがいない。男は、自分のことについて語りたがるものようだ。

そこでラリーはレアに、「彼女自身」のことについて聞きたいと言った。

レイは、大半は、真実を話した——高校を卒業したばかりであること

(実際、レイは、数週間前、郵送で卒業証書を受け取っていた)、一年間の契約でブライアンのアシスタントをとめていること、……。

もちろんレイは、この一年より前の人生については、注意深く話から除外していた。

ラリーはレイのことを、まちがいなく女として見ているのだから、その錯誤を破壊しない方がいい。

好都合なことに、ラリーは、レアがマジシャンのアシスタントとしてどんなことをしているのかに興味を持った。それでレアは、マジックの仕事の中で経験したいくつかのストーリーを話した。

ディナーが終わると、ラリーは、街を歩かないかと言った。

すぐに二人は外に出て、ネオンがき

らめくベガスの通りをぶらぶらした。

隣に並んで歩きながら、レイは、ラリーの手が奇妙な動きをしたのに気がついた。

最初、横に少し伸ばしてそこで止め、すぐにまた引っ込めたのだ。

レイは、ラリーが手を握りたいのに、それを恥ずかしがっているのに気づき、自らもひそかに顔を赤らめた。

レイは、その小振りな手をそっと動かし、ラリーの手に重ねた。

これは、ラリーに自信を与えたようだった。大きな手で、レイの長い爪の指を優しく包んだ。

しばらくそんなふう歩いたあと、二人は、レイのホテルの部屋の前までたどり着いた。

ラリーは、ここでデートを終わらなければいけないことを悟ったらしく、

がっかりしているように見えた。

「あの……ほんとに楽しかったよ、レア」

「ええ、あたしもよ。ラリー」

「また、会えるかな？」

「ええ、あなたなら……。電話して」

「ああ、……」

ラリーは、何かを言い淀んだ。

そこでレイは、ラリーがキスする決断に迷っていることに気づき、ハッとしました。

レイがなんらかの反応をする前に、ラリーの体が前に傾き、その唇がレイの唇に押し当てられた。

すべてのことが、スローモーションで進行しているように、レイには感じられた。

——唇に感じるラリーの唇の圧力

——彼のあごのあたりのちくちくした感触

——彼の熱い息づかい

——頬に優しく添えられた彼の手

……それは、永遠に続いているようだった。

やがて、ラリーは頭を起こした。

「……おやすみ、レア」

彼は、そう言って去っていった。

レイは、静かに部屋に滑り込み、服を脱ぐと、バスを使った。

バスタブの泡の中に体を横たえ、今夜のことをひとつずつ思い出した。

僕は、男とデートしたんだ！

男と手をつないで歩いたんだ！

男から、キスされたんだ！

レイは、思わずくすくすっと笑っていた。

最初に女になることに同意した時、もしこんな夜が来ると知ったら、それは恐怖以外のなにものでもなかっただ

ろう。

でも今、僕は、なんだかウキウキしている。

どうして、僕はこんなに変わってしまったんだろう？

ホルモンのせい？

それとも、催眠？

もしかして……ずっと女の子として扱われてきたから？

ちょっとだけナーバスになっているにしても、レイは、心地悪さも、嫌悪感も感じていなかった。

バスタブから出ると、レイは、姿見の中の自分をじっと見ていた。

その姿は、完全に、十代のかわいらしい女の子に見えた。

そして、彼は、まさにその通りに振る舞っていた。

きっと、もとに戻るのは、簡単ではないのだろう。

大量の男性ホルモンを投与して、手術でこの胸を取り払って……そしてたぶん、その変化の間、世の中から身を隠さなければいけないのだろう。

それでもなお、彼はおそらく、女っぽく見えるにちがいない。

でも、そこにはきっと、それだけの価値があるのだ。

僕は、高校を卒業できた。

僕は、大きな蓄えを手にした。

僕は、ある種貴重な演技経験を得た。

レアからレイに戻るのはいたいへんだとしても、たしかなことがひとつだけある——

僕は、その時のことを夢見て、こんなことをつづけてきたということだ。

女として過ごしたことはいくつもの利益をもたらした。でも、僕は男だ。そして、その時が来たら、男に……男を……演じ始めるのだ。

第17章

次の週、レイは、何度かラリーとデートした。

映画、ディナー、野球見物……、それは、典型的な「お互いを知るためのデート」だった。

ラリーは、いつも、少しでも「次」に進みたがり、レイは、いつもそれを拒否していた。

レイが許したのは、数回の口を開けてのキスと、一度だけ、ちょっと酔ったせいで、ブラウスの下に手を入れられてしまったことだけだった。

ある夜のことだった。

レイは、ラリーといっしょに打上花火を見ると言って、砂漠までドライブに出掛けていた。

ブライアンは、ホテルの部屋で、ひ

とり座って考えていた。

このレアのデートは、なぜかブライアンの気持ちを不安定にする。そのことをじっくり考えてみようと思ったのだ。

ブライアンは、ビール瓶を手にベッドの上に身を投げ出し、考えはじめた。

いつも、レアがラリーと共に出掛けると言い出すたびに、胃のあたりが絞めつけられるような感じを抱く。それはなぜか？

可能性のあるいくつかの答えが、思い浮かんだ。

僕は、レイの女性化が行きすぎてしまったことに、責任を感じているのだろうか？

いや、ちがうだろう。僕がレイに要求したのは、女装して暮らせということだけだ。豊胸手術や、男とのデートは、レイがひとりでやっていることだ。

僕のせいではない。

僕は、レイのことを心配しているのだろうか？

それは、あるかもしれない。僕は、男がデートでどんなことを考えるのか、よくわかっている。ラリーがレイのパンティへの突入をマジで試みるのは、時間の問題だという気がする。もしそうならば、ラリーはそこに、たぶん好ましいとは思えないものを発見することになるだろう。しかし、レイは、そのことに関しては、ひどく自信ありげに見える。彼は、ラリーに永遠に手を出させないつもりなのだろう。たしかに、危うい立場になることをいちばんいやがっているのはレイ自身なのだ。そして、ラリーという男は、「ノー」という答えを素直に受け入れられる男らしい。

じゃあ、僕は、レイが同性愛者かも

しれないということに、ちょっとした嫌悪感を抱いているのだろうか？

いや、どう考えても、それはないだろう。僕は、ゲイの人たちに迷惑をこうむったことなどない。このホテルにも公然とゲイだと言っている人たちが何人も働いているが、それを理由に、彼らを避けようと思ったことなどない。もしレイがゲイになったのだとしても、そこにちがいはないだろう。

ブライアンは、二本目のビールの栓を抜いた。

ブライアンの考えは、あまり考えたくない場所に近づきつつあった。でも、彼は、自分に正直であろうとしていた。

ブライアンは、これまで1年間のレイに対する自分の態度について考えはじめた。

レイがレアになったばかりの頃、僕

はいつも神経質になって、居心地悪い
思いを抱いていた。レイがけっして幸
せではないことをわかっていたし、そ
の責任の一端は僕にあると思っていた
のだ。

レイが自信を持ち始めた頃、僕は、
なんだかちょっと誇らしいような気持
ちになっていた。それは昔、お転婆だ
った僕の妹が、初めてダンスパーティ
のドレスを着たのを見た時に似てい
た。レイは、美人の若い女性になって
いた。

それから……そう、僕は、それを事
実として受け入れるのを嫌っていた。
でも、そんなレイを見るたびに、他の
男友達と同じようには見られなくなっ
ている自分自身にも気がついていた。
たとえば、プールサイドで寝そべるレ
イを見る時。あるいは、肌を露出した
衣裳のレイを見る時。ふたりでベッド

の上に横になり、テレビを見ながらしゃべっているような時も。

そんな時いつも、僕は気づくのだ。自分がどこかで「罪の意識」を感じてるのを。

それは、親友の妻をひそかに盗み見ている時に感じる「罪の意識」に似ていた。

これは、いったい、どういうことなのだろう？

ブライアンは、さらにさまざまなことを考えた。

どんな男にも、女性に関して、弱みというようなものがある。

ある人たちはブロンドが好きだし、ある人たちはスポーツをする女に弱い。胸の大きな女に惹かれる男たちも多い。

僕の場合はどうか？ ……赤毛の女

だ。

赤い髪の女には、僕を狂わせてしま
うなにかがある。

こんな考えの方向を、ブライアンは
けっして歓迎していなかった。

その先にあるのは……

僕は、レアに惹かれているというこ
とか？

僕は、ラリーに嫉妬しているという
ことか？

それは、つまり、何を意味してるん
だ？

ブライアンは、おびえた。

僕は……ゲイなのか？

いや、それは疑わしい。

もしゲイなら、ドンとか、他の男と
かに、もっと惹かれるんじゃないか？

レイ……ああ……。

多くの思慮ののち、ブライアンは、
いくつかの結論を引き出した——

1) レアは、ルックスも、行動も、考
え方も、女性と変わらない。そして、
女性として扱われたがっている。

2) もし、レアが本当の女性なら、
僕は、彼女に大きな魅力を感じるはず
だ。

3) 僕は今、レアに対し、多大な恋
心を抱いてしまっている。

最後の結論は認めがたい気がした
が、客観的に見れば、そんなに奇妙な
ことではないとも思えた。

レアのルックスは、本当に魅力的だ。
ある男が「彼女はかわいい」と思い
「彼」を好きになったとしても自然の
ことだと思う。他の多くの男にしても

そうだ。

ブライアンは、もう一本、ビールを飲んだ。

今、その結論を受け入れた以上、これから取るべき行動は、はっきりしていると思われた。

この際、これらすべての結論をきれいさっぱり忘れて、レイの行動に干渉しないことだ。そして、できるかぎり早く、レイが男に戻れるように援助することだ。

残された契約期間——つまり、レイといっしょにいる期間——は、一ヶ月と少しだけしかないのだから。

その上、レイがブライアンと同じ感情を抱いているとは、どう考えても思えないのだから。

ブライアンの思考は、ドアをノック

する音によって中断させられた。

レイが帰ってきたようだ。

ドアが開くと、レイはまだ、ラリーとのデートのために着ていたタイトなTシャツとショートパンツ姿だった。

その長い赤毛が、いくすじか顔の上にかかっていた。Tシャツは、その体型をはっきりと浮き出させていた。ショートパンツも、その細くて白い脚をみごとに目立たせていた。

ブライアンは、自分がつい、そんなレイの姿を見つめ、眺めていたのに気がついた。

レイは入ってくると、自分用にもビールを一本出してきて、ブライアンのいるベッドの端に腰掛けた。

「デートは、どうだった？」

ブライアンはきいた。

「うん、よかったよ。……うそ。ラリーとは、別れたわ」

「えっ？ ……あ、その……ごめん」

ブライアンは、同情を求められているのかどうか、まごつきながら言った。嫉妬から来る勝利感をほんのちょっぴり感じたことはたしかだったが。

「いいの……」

レイは、どこか悲しそうな声で答えた。

「どのみち、つづくわけはないんだから」

「どういうことなのか、きいてもいいかい？」

「ええ、あたしたちは砂漠にいた。毛布を敷いてその上に寝ころんで、花火を見てた……。ラリーは、ごろりと転がって、あたしの上に覆いかぶさってきた……で、そうなったわけ」

レイは、ちょっと笑ってみせた。

「あの野郎！ やつの頭をたたきつぶしてやる！」

「落ち着いて、コナン (Conan[the Barbarian]: 「野蛮人」の意)。あなたこそ最後の正義の味方だわ。あのね、ラリーは、あたしに対しても誰に対しても、無理強いするような人じゃないの。あたしが、本物の女の子だったら、迷わず、あげたでしょうね。でも、あたしは…
…僕は、男…少なくとも、メンタリティではね。男とセックスすることはできない。それに、実際、その気もない。ラリーみたいな人を、だましつづけてていいわけはないでしょ。だから、僕は…あたしは、別れたの」

「うむ。君は、すぐにでも男に戻った方がいい。たぶん、それが最良だ。だいたい、どうやって彼をあきらめさせたんだ？」

レイはそこで、突然、黙った。そして、しばらくしてから口を開いた。

「あのね…、前のボーイフレンドと

よりが戻ったって言ったの」

「その言い訳は、ちょっと軽率すぎないか。君に『ボーイフレンド』なんていないことは、すぐにわかるだろう」

レイは、なぜか、顔を赤らめた。

「それが……いるのよ、ボーイフレンド。ラリーには、ちゃんと名前を言って、納得してもらったんだから」

ある理由で、急におびえたような口調になり、ブライアンはきいた。

「だ、誰なんだ……そいつは？」

「あなた」

「……僕？ なんのつもりで、そんなこと言ったんだ？　なんで、その前に僕にきかなかった？」

「ラリーにきかれて、あたし、困っちゃったの。ドンには、いつもデートしてる恋人がいるし……。だとすると、あたしが考えつく唯一の男は、あなたしかいないでしょ。だいじょうぶ。そ

んなに、むずかしいことをしてくれて
言ってるわけじゃないんだから」

「なんで、僕が、君の考えにつき合う
なんて思ったんだ？」

「だって、あたしは、ほぼ一年、女装
して暮らしてきたのよ。それはあなた
のキャリアを守るためだった。それに
くらべたら、残りの一ヶ月、あたしの
ボーイフレンドを演じるくらい、
たいしたことじゃないでしょ。もとも
と、ホテルスタッフの半分くらいは、
あたしたちがデキてると思ってるわけ
だし。それから、男とつき合うなんて
ごめんだみたいな、マッチョなたわご
とは言わないでね。あたしは、あなた
のために、男であることをあきらめて
きたんですからね。あなただって、あ
たしのために、そのくらいの小さな犠
牲は払えるはずよ」

ブライアンは、完全に追いつめられ

ていた。

「そ、それで……僕は、何をすればいいんだ？」

「今日から毎日、あたしをディナーに連れ出すこと。人前では、あたしと手をつなぐこと。ときどき、あたしにキスすること。どうすればいいかは、あなたの方が知ってるでしょ」

ブライアンは、ひどいめまいに襲われていた。これでは、レイを男だと思おうとする彼の努力は、何の意味もなくなってしまう。

ところが、レイは、そんなブライアンの戸惑いをべつの意味に取ったようだ。

「さあ」

レイは言った。

「あなたは、たくさんの女たちにキスしてきたんでしょ。ちょっと目を閉じて、あたしのことを、今年の『プレイ

メイト』だとでも思って」

レイは、ブライアンと体を接して座り直した。

二人はともに目を閉じ、キスした。

そして、レイは自分の部屋に帰っていった。

ブライアンは、ベッドに倒れ、天井を見つめていた。

彼はまだ、レイの口紅を味わいつづけていた。

第18章

最後の五週間は、レイにとっては最も気楽で、ブライアンにとっては最もつらいものとなった。

レイは、ブライアンのガールフレンド役をうまくやっていた。

二人は、自由時間のほとんどをいっしょに過ごすようになった。レイは、この大きくてハンサムなマジシャンとの交際を楽しんでいたとわかっていい。二人は付き合いだしたばかりのカップルがやるようなことのすべてをした——ダンスし、宗教上の行事を利用してはいちやつき、お互いにちょっとしたプレゼントを買っては交換し合った。

ブライアンにとって、最後の数週は苦しみとわかっていいものだった。恋してはいけなし、できもしないのだということがわかっている相手と、恋人

を演じなければならぬのだ。

レイは、まるで本物の恋人のように接してくる——肌を出したビキニ姿で抱きついてきたり、肩をもんでくれたり、ベッドの上でブライアンの胸に頭をのせたまま、うたた寝してしまったりもするのだ。レイは、そうしたことを、計算した上で仕掛けてるように見えた。

この赤毛の少女は、途切れることなくブライアンの心をとらえつづけた。

レイとキスしているのは、二人が恋人同士だというイメージを人に伝える必要があってやっているのだということを、すっかり忘れている自分を発見する（二人きりの部屋で、ブライアンはしばしば、レイにキスしたくなる気持ちを抑えなければならなかった）。

ブライアンには、「ラリーはもう長い間姿を見せていないのだから、こん

なことをつづけている必要はない」と主張することもできた。でも、彼はけっしてそうしようとはしなかった。

レイもそれについては何も言わなかった。レイは、ブライアンの気持ちを引きつけているのが好きなように見えた。

しかし、こんな毎日の中で、ブライアンにとって最もつらいことは、間もなくレアと別れなければならないということだった。しかも、そのあと、レアは戻ってこないのだ。

ブライアンは当初、この奇妙な関係に終わりがあることを歓迎していた。でも今は、それを恐れていた。

彼はしばしば、レイが彼のことをどう思っているのかわからなくなったが、それを問いただすことすら恐れていた。

契約期限を直前に控えたある日、いくつかの重要なことが、レイとブライアンの身に起こった。その最初のは、電話によってもたらされた信じられないようなニュースだった。

レイの部屋に行こうとドアを開けたところで、ブライアンは、レイとぶつかりそうになった。

「レア！　びっくりするようなニュースがあるんだ！」

「あたしも！」

レイが言った。彼は、肩やお腹が大きく露出した白いブラウスと、それに合わせたコットンパンツ姿だった。

「じゃ、そっちから」

ブライアンは、レイの着ているものではなく、言葉の方に神経を集中するようつとめながら言った。

「今、トレーシーから電話があったの。彼女、赤ちゃんができたんですって」

ブライアンは、思わずレイを抱きしめていた。

「すごいじゃないか！ 彼女、ずっと、子どもをほしがってたからな。他に、何か言ってたか？」

「ううん、病院から直接電話をくれたの。彼女自身も、今知ったばかりだって。詳しいことは、できるだけ早く手紙を書くからって言ってた。……で、そっちのビッグニュースってなに？」

ブライアンはにっこりと笑いながら答えた。

「きっと君は信じられないぞ。今、タレントスカウトから電話があったんだ。『デビッド・レターマン・ショー』の！ 僕に出演してほしいってさ」

レイは——まったく女性っぽい——叫び声を上げ、ブライアンの腕の中に飛び込んできた。

「すごーい！ ほんとにいい？」

「ああ、マジさ」

ブライアンは、レイの体を楽しんで
いることに罪の意識を感じながら言っ
た。

「ブラックジャックのカードを配れる
犬の次が、出番らしい」

ブライアンは、微笑みながらつづけ
た。

「ついにやったんだ。やっと、その時
が来た。君なしじゃあ、とてもこんな
ことはできなかつたよ」

突然、レイの顔に、何かを恐れるよ
うな翳りがうかんだ。そして、ブライ
アンの腕の中から抜け出した。

「つま……り、あたしにも、いっしょ
に出てほしい……ってこと？」

「ああ、彼らは、ぜひ君もいっしょに
って。ただ、ステージマジックの経験
豊富な女性アシスタントを用意でき
るとも言っていたが……」

ブライアンもまた、恐れを感じ始めていた。

「それで、あなたはなんて答えたの？」

レイがきいた。

「もちろん君を選んださ。でも、君にきいてからとも答えておいた。……どうする？ 全国放送だぜ！ 収録は二ヶ月後だそうだ」

レイは、ブライアンの顔を真っ直ぐに見返していた。

「ブライアン……あなたにとって大事な瞬間にいっしょにいられる以上の喜びはないと思うわ。でも……あたしたちの契約は、もう終わる。あたしは……僕は……、僕に戻らなきゃいけない」

ブライアンは、自分の気持ちが深く落ち込んでいくのを感じた。

「たった二ヶ月なんだ。それまで延ばせないか？ 君にもかなりの額の出演料が出るそうだし」

レイは、ブライアンの手を取った。
「あなたが、どうしてもあたしを必要とするんなら、そうしてもいい。でも、そうじゃないでしょ。テレビ局が用意してくれるアシスタントは、きつとうまくやれると思うわ。ブライアン、あたしはもう、ずいぶん長い間、あなたのために、男であることをあきらめてきたのよ。その上、完全に男に戻るまでには、また一年くらいかかるらしいの。ごめんなさい。もう、無駄な時間は使いたくないのよ。それにね、もう一度変身するまで、あたしはあんまり顔をさらしたくない。全国放送なんてもってのほかだと思うの」

ブライアンは、レイの手を強く握り返した。

「レア……、僕は君に、男に戻ってほしくない」

「だいじょうぶ、ブライアン。あたし

なんかいなくても、あなたは立派にやれる人よ」

「仕事の話なんかじゃないんだ、レア！」

レイは、少しの間、黙って見つめてきた。そして、口を開いた。

「どういう……意味？」

ブライアンは、正直になるべき時が来たと思っていた。ブライアン自身にとっても、レイにとっても。

「レア、……この数週間、いや、数カ月間……僕の中で、君に対するある感情がだんだん大きくなってきた。僕は、それを否定しようとしてきた。でも、できなかった。君のボーイフレンドのふりをしている間、僕は、それにわくわくしていた。僕は、もう、それが『ふり』なんかじゃなくなっただけでほしいと思ってる」

レイは、それに微笑み返してきた。

「ブライアン、あたしがあなたと同じ感情を持ってないって言ったら、それはウソになるわ」

ブライアンは、その手をレアの背中にまわした。

「なんと言ったらいいか……その……、僕は……君のために生きていたい。もっと……友だちとしなんかてじゃなく。君は……、君には……レアでいてほしい。もう君は、立派に美しい女性だ。本当に……男に戻る必要なんて、あるのか……？」

レアとブライアンの二人ともが、その言葉に、熱望と絶望の両方の響きを感じていた。

しばらくの沈黙ののち、レイが口を開いた。

「ブライアン、もしあたしが、本当の女なら、あたしは、絶対にあなたと離れはしない。絶対に。あたしは、いつ

も、あなたのそばにいるのが好きだった。でも、事実を見なきゃいけないと思うの。いくらあたしが女に見えとしても、あたしは……僕は、そうじゃない。いくら女の子っぽく振る舞っていても、僕はまだ、自分自身を男だと思ってる。男の体に戻らなきゃいけないんです」

ブライアンは、傷ついた心を隠しながらきいた。

「……で、君はどうするつもりなんだ？」

「トレーシーとデービッドに相談したんです。あっ……デービッドは、もう、僕のことを知ってます。トレーシーはまちがってなかった。彼は理解してくれました。どっちにしても、僕は、しばらくの間、オーストラリアで暮らそうと思ってます。トレーシーとデービッド以外、だれも僕のことを知らない

場所だから。そこで、胸を取って、男性ホルモンを投与してもらいます。そして、男になってアメリカに戻ってくる」

ブライアンは、それに反論したくなる気持ちを必死に忘れようとしていた。

「さみしくなるよ、レア。君の選んだ道が、僕にとってどんなものであろうと、僕は、それに賛成したいと思う」

「僕も、さみしいです。でも、あなたの人生から僕が消えるわけじゃない。ガールフレンドじゃいられないけど、ずっと友だちだと思っていてください。そろそろ荷造りをはじめます。しばらくの間だけ、お別れです」

「そうだね。きっと、レターマンはがっかりするな」

「そうね。……さよなら、ブライアン。それから、ありがとうございました。」

あなたがいなかったら、僕は今も、デッドスプリングスでくすぶってました」

「ああ、さよなら、レア」

レイは笑い返し、そして、行こうとした。

意志に反し、ブライアンは、レイのウエストに手をまわし、その体を引き寄せていた。

一瞬のためらいののち、ブライアンはレイにキスしていた。

これまで二人がかわしてきたキスは、「役を演じる」ことで正当化していた——あるいは、そう思おうとしてきた——キスだった。

でも、これはちがった。二人はひとつになっていた。

ブライアンは、強く深く、レアを求めた。その思いと情熱のすべてを込めて。

それは、友だちとしてのキスでも、人に見せるためのキスでもない。でも、キス。キスそのものであるキス。男が、なによりも大切だと思う女に注ぐキスだった。

そのキスは長い……長い時間つづいた。

そして、レイもまた、それに応えつづけた。

しかし、突然、レイは身を引いた。

「もう、行かなくちゃ……」

そうつぶやき、立ち去った。

レイの目にも、ブライアンの目にも、涙があふれていた。

第19章

二ヶ月後、ブライアンは『デビッド・レターマン・ショー』に出演した。

そのすべての演目が人々を魅了した。ブライアンは、司会のデーブとウイットに富みジョークにあふれた会話を交わし、そのことでも強い印象を残した。

この日は、彼の人生にとって最良の日となった。

しかし、それは、けっして「最良」ではなかった。

テレビ局が手配した女性アシスタントは、魅力的で、プロフェッショナルで、ブライアンの要求をまちがいなくこなしてくれた。でも、ブライアンの頭の中につねにあったのは「彼女はレアじゃない」という思いだった。

ブライアンのマジシャンとしてのキ

キャリアは、この日、離陸したと言っている。

これ以降、他のリゾートやカジノとの契約どころか、全国各地をまわるツアーが生まれ、週末の興行は大きな収入をもたらすようになった。

しかし、どんな時も、彼の頭からレアへの思いが離れることはなかった。

レアがいなくなったことが、どうしてこんなに自分を悩ませるのか、ブライアンにはそれがわからなかった。これまで、彼のもとを去ったどんな女性の場合も、こんなことはなかったのだ。

ブライアンは、自分の心がこれほどうずくのは、レアという存在が、突然いなくなってしまったせいだと、自分自身に言い聞かせた。こんな形で人間関係が終わったのは、これまでなかったことだ。実質上、もうこの世にはいない人間への思いに、これほど強くと

らわれている自分が、ブライアンは好きではなかった。

しかし、ブライアンは、レア＝レイの消息を知らなかったわけではない。

月に何度かは、トレーシーかレイのどちらかから手紙が届いていた。

トレーシーの手紙は、いつも生まれてくる赤ん坊の話に終始していた——子どもの名前について、ベビー服の買い物について、彼女の「ベビー・シャワー（訳注 出産を控えた女性のために開かれるパーティ）」について……などだ。

レイの手紙は、通常、もう少し詳しい状況が書かれていた。オーストラリアの生活で感じたカルチャー・ショック、トレーシーとデービッドの宮殿のような家、アパートを借りた話、美しい太平洋の話……レイは、そんなことを書いてきていた。

ブライアンは、その文面を何度も読

み返し、レイの男性化についての記述を探した。しかし、それを読み取ることにはできなかった。また、レイがどちらの名前を使っているのかさえ、よくわからなかった——差出人欄には住所しか書いてなかったし、文面のサインは、くずし字で、判別できないのだ。

しかし、何が起きているかは明白だった。

たぶん、レイは、完全に男に戻ったのだ。

彼は、過去の一年間に起きたことを忘れようとしている。

その間、ブライアンとの間で起こったことについて、手紙ではいっさい触れようとしていないのだ。そのことに、ブライアンは傷ついていた。

レイは、あんな過去に当惑し、忘れたがっているにちがいない。

ブライアンはそう思いながらも、そ

れを認めたくはなかった。しかし、やがて、彼を大きなショックが襲った。

そのショックは、ある日の昼過ぎにやってきた。

ブライアンはちょうど、六つの都市での公演ツアーから帰ったところだった。公演のない時のために借りているアパートで、少しの間、休暇を取るつもりだった。

ブライアンは、玄関に立ち、留守中に溜まった郵便物をチェックした。

最初の数通は、ちょっと気の滅入るものだった。レイに宛てた手紙が、二通かそれ以上、「不在・転出先不明」として返送されてきていたのだ。じつはこれは、前にも何度かあったことだった。

ブライアンは、そのたびにトレーシーにきくののだが、彼女はそれについて

の言及を避けた。レイがどこに行ったのかは知らないと言うのだ。その言葉には、それ以上のことをなにかを隠しているような印象を受けた。

ブライアンは、残りの手紙にざっと目を通した。請求書類、インチキ臭いダイレクトメール（「当選！ ブライアン・ハワード 賞金100万ドルがあたりました！」「ミスター・ハワード

あなたと奥様のために、サイモナイズ・カー・ワックスの試供品をお送りします」）、そして、やはりゴミにしかかならない手紙が数通。

一番下にあったのは、中サイズの小包だった。

最初、ブライアンはそれを、注文していた「NHL 珍プレー集」のビデオかと思った。

しかし、見た感じがどうもちがう。差出人の住所が書かれていないし、

消印は、ブライアンにはよくわからない外国語だ（彼はそれを、オランダ語かもしれないと思った）。

ブライアンは宛先として書かれた自らの住所を見た。と、それは、まぎれもなくレイの手書き文字だった。

ブライアンはあわてて部屋に入り、その包みを開けた。

中身は、短い手紙とビデオテープだった。

ブライアンは、手紙を読んだ——

ディア・ブライアン

あなたからのお手紙に、なかなかお返事できずに、すみません。

信じてください。けっしてあなたのことを忘れていたわけではありません。

「レターマン・ショー」のビデオ、拝見しました。とても素晴らしかったです。

この間、さまざまなことが起きました。とても、この手紙だけでは書き切れません。

私は、いろいろと自己分析してみました。そこには、あなたとお話した方がいいことがいくつかありました。

今、少しの間、オーストラリアを離れています。一ヶ月うちには帰れるはずですよ。

あなたは今、ご多忙ではありませんか？ よろしかったら、私を訪ねてくださいませんか？

それは、私にとって、とても大切なことなのです。

あなたに来ていただくために、便を

自由に指定できる航空券を取りました。空港で、搭乗券と交換できるはずです。ぜひ、いらしてください。

それは、私の人生にとって、なにより大事なことなのです。

お会いしたいです！

(判読しにくい署名)

P. S.

話していませんでしたが、私は、こちらでテレビに出演していました。俳優になるという夢が、ついに実現したのです。この前のシーズンに放送されていた、オーストラリアのアクションドラマ『サマー・ヒート』に出ていたのです。残念ながら、私が演じたキャラクターは最終回で殺されてしまいました。だから来年は戻れません（レイ

はそこに、小さなニコニコマークを描いていた)。

二話分を収録したビデオを同封します。

ブライアンは、そのビデオをデッキに入れ、手紙に書かれていたことについて考えた。

もちろん、彼は、レイに会いに行くつもりだった。しかし……。

レイが完全に男に戻ったのはまちがいでなかった。

もし、レイが女っぽく見えるのなら、男性的なオーストラリアのアクションドラマへの出演が許されるわけがなかった。

ブライアンは、今や筋肉隆々となったレイを思い描いてみた。彼が、スポーツカーを走らせ、美女を愛撫し、そ

して麻薬の売人（それとも、ドラマのカギを握る何か）を追跡している図を。

しかし、それは、なかなか像を結ばなかった。

ちょうどそこで、ビデオが始まった。

ブライアンは、お気に入りのリクライニングシートに体をあずけた。

食べかけていたサンドイッチを口に持って行った時だった。彼はそれをのどにつまらせて、危うく窒息しかかった。

テレビ画面に映っているのは――

レア！ ……レイではなく、レア！

まちがいではなかった。赤い髪、そばかすの目立つ白い肌、スリムな体型！

レイは男に戻ってなどいなかった。それどころか、ブライアンの記憶より、さらに女っぽくなっていた。

そのドラマは、かなり突飛な内容だ

った。それは、オーストラリア奥地に本部がある防衛組織の隊員たちが、テロリストやその他の悪役と闘う話だった。

レイが演じるのは「スカーレット」、元モデルのクライム・ファイターだ。

どうやら、オーストラリアのテレビプロデューサーは、高い水準は求めているようで、それは、アメリカ製ドラマの写しといった感じだった。

ブライアンはショックによる茫然自失状態で、二話分のドラマを見た。その中で、レイ——別名スカーレットは、チューブトップ姿でガンマンを追いつめ、ビキニ姿でサメを倒し、ハンサムな男性と情熱的なキスを交わしていた。

最後のクレジットには、「レア」の名があった。

ブライアンは、控えめに言っても、

まだ茫然自失状態だった。座ったまま、しばらくの間、なにも映っていないテレビスクリーンを見つめていた。

それから、彼は立ち上がり、空港に電話した。

一ヶ月後、ブライアンはオーストラリア国内のある空港にいた。

荷物をかき集め、そして、まわりを見回す。

レイが迎えに来てくれることを期待していた。

空港の人混みの向こうに目を凝らしていると、そこに、よく知っている人物が見えた。トレーシーだった。彼女の方も同時に、ブライアンに気づいたようだ。

お互いに駆け寄り、抱き合った（トレーシーは八ヶ月を過ぎていたので、ブライアンは大きく手を伸ばさなけれ

ばならなかった)。

それぞれの近況を話したところで、ブライアンは、彼を地球の反対側まで運んでくることになった話題を切り出した。

「で……その……どこなんだ……レアは？」

トレーシーは、微笑みながら答えた。「ブライアン、レアがこっちに来てから、いろんなことがあったの。彼女から直接聞いて。行きましょ。タクシーを拾うわ」

タクシーに乗り込むと、トレーシーが運転手に行き先を告げた。

タクシーが停まったのは、控えめだが、手入れのゆきとどいた一軒のバンガローの前だった。

「ブライアン、あなたはここで降りて。レアは、中で待ってるって言ってたわ。」

また、あとでね」

気がつくと、ブライアンは、その小さな家の玄関に、ひとり立っていた。

ほんの少しためらったあと、ドアをノックした。

「入って！」

耳慣れた女らしい声が聞こえた。レイ＝レアだ。

ブライアンは、一歩中に踏み込んだ。そのドアの向こうにいる人物を見た時、ブライアンは、長旅をしてきた甲斐があったことを確信した。そこに立っていたのはレアだった（これだけ女性的な人を「レイ」と呼ぶのは、もはや馬鹿げたことだ）。

レアは、ブライアンと別れた時と同じ肩の開いたブラウスを着ていた。その赤毛は、後ろでポニーテールに結われていた。明るいオーストラリアの太陽は、彼女の肌に、そばかすを増やし

たようだ。

レアは、ブライアンの反応を測るとでもいうように、緊張した顔で微笑んでいた。

「いらっしやい、ブライアン」

「やあ、レア」

そのあと、長い沈黙があった。

それを破ったのは、レアだった。

「ブライアン、かけて。話さなければいけないことがたくさんあるわ。あなたには、怒られても当然だと思うけど、その前に、あたしに説明するチャンスをちょうだい」

レアはそう言いながら、ソファに座った。

ブライアンは、まだ、ぼう然とした顔で、その隣にかけた。

レアが長い物語を語りはじめた。

「ブライアン、アメリカを発った時、あたしはまだ、男に戻ろうという固い

決意を持っていたの。こっちで、この小さな家を借りて、適当な医者を探しながら、胸を除去する計画を練りはじめた。あたしは、絶対にレイに戻るつもりでいたのよ。でも、ごらんのとおりに、あたしはそうしなかった」

「こっちに来たばかりの頃、あたしは、トレーシーやデービッドともっと親密になりたいと思ったの。だから、長い時間おしゃべりをしたり、いっしょにいろんなところを見物してまわったりした。けっして、手術を先延ばししてるつもりじゃなかったのよ。そのうち、トレーシーやデービッドのお友だちとも知り合いになった。そして、その人たちともいっしょにいろいろするようになった。あたしは、来週こそ、来週こそって、自分に言いつづけていたの。その頃、あるパーティがあって、そこで、エージェントをしている男性と会

った。あたしは、彼に俳優の仕事に興味があるという話をしたの。そしたら彼が、『サマー・ヒート』の役者を探してるんだけど、挑戦してみる気はないかと言いだした。で、あれよあれよという間に、あたしは契約書にサインしてた。それで、あたしは本当の女じゃないとは言い出せなくなってしまったの」

「ある夜、じっくりと考えてみたの。そして、あたしは、この数カ月間、けっきょく言い訳しつづけてたんだって気がついた。あたしは、男に戻りたくなんかなかった。今、あたしは女で、それによって人気を得ていて、それに自信を持っていて、それを楽しんでる。退屈で魅力のないレイに戻ろうなんて考えは、あたしにとって、もう何の意味もなくなっていた。あたしは、それをトレーシーに話した。二人で相談し

て、いちばんいい道は何かを決めたの」
「すぐにあたしは、デンマークに行った。人里離れたクリニックで、あたしは女になった。今あなたが見ているとおりのね。完全に、そしてもう戻れない方法で。ブライアン、レイはもうどこにもいないの」

「デンマークで、術後の症状から回復した頃、あたしは、まだ幸せじゃないと感じた。なにかがまちがっているって。最初は、手術したのがまちがいだったのかと思って、不安になったわ。でも、しばらくして、そうじゃないことに気がついた」

そこでレアは、ブライアンに身を寄せて座り直した。

「ブライアン、あなただったの。あなたを失って、あたしはさみしかった。あなたのすべてがあたしには必要だった。毎日、夜が来ると、あたしはここ

に横になって、あなたがそのドアの向こうから現れないかと願ってた。あたしを抱いて、夕陽の中に運んでくれないかって。あなたのもとを去るなんて、なんて馬鹿なことをしたんだって思うたびに、涙があふれてきた。それで、あたしは、あんな手紙を書いたの」

「ブライアン、別れる時、あなたは、恋人同士のふりなんてしなければよかったって言ったでしょ。ねえ、あたしたちには、もうその必要はなくなったわ。手術のおかげでね。自分勝手にあなたから逃げてしまったあたしのことを、あなたが憎んでるのはわかってる。今、あなたが怒ってここから出て行ったとしても、あたしには、あなたを責める権利なんてない。でも、これだけは覚えておいてほしいの。ブライアン……愛してます」

レアは、話しはじめた時からずっと、

ブライアンから目をそらしていた。でも、最後だけは、ブライアンの顔を見上げて言った。

ブライアンは、これまで、誰の顔を見たとしても、こんなに強い憧憬や願望を抱いたことはなかった（もしかしたら、鏡を見ているある瞬間にはあったかもしれないが）。

ブライアンは、多くの理由で混乱していた。時差ボケ、レアがよりよい方向に向かってもがいていたのだという思い、そしてふたたび目の前に現れたこと、レアのゴージャスな体、彼女の驚くべき言語能力、わずかに身につけたかわいいオーストラリアなまり…。

しかし、そこにはあるひとつのことがあった。それについては、ブライアンは、まったく混乱していなかった。

「僕も、愛してるよ。レア」

ブライアンはそう言い、キスした。
熱くて深い、情熱的で愛のこもった
キスを。

レアも、そのキスに応じてきた。
長い時間ののち、ブライアンは顔を
上げた。

そして、大きな喜びを示すレアの顔
を見ながら、レアの体を両腕に抱きか
かえ、ベッドルームへと運んだ。

何時間もがたったのち、ブライアン
とレアは、裸の体をシーツにくるみ、
青い月光の中にいた。

しばらくは、二人とも何もしゃべら
なかった。

腕をお互いの体にまわし、きつく抱
き合っていた。

二人は、もう十分に長い時間離れて
いたから、どちらも、ふたたび相手を
離したくはなかった。

ブライアンは、レアの背中の手をやさしく這わせ、お尻を愛撫した。

レアがくすぐったそうに声をあげた。

二人はキスした。

「レア、君は、ほんとうに素晴らしい」

ブライアンは、深い感情を込めて言った。

「ブライアン、あなたは、世界でいちばん偉大なマジシャンだわ」

レイが言った。

ブライアンには、それがなんだかそぐわない奇妙な言葉に思えた。

「どうして、こんなところでそんな言い方をするの？」

レアは微笑むと、恥ずかしがるそぶりもなく、裸の上半身を見せてベッドに座った。

「つまりね、ブライアン。あなたは、やせっぽちでモテなくて、自分のこと

をダメなやつだと思っていた男の子を、きれいで刺激的で、ただ一人の男に恋いこがれる女に変えてしまった。一年半前、あたしはドレスを着るのも恐る恐るだったのに、今は、毎日ブラをつけてる。十二ヶ月前、あたしはガールフレンドがほしいと思っていたのに、今は、あなたのガールフレンドになってる。こんなすごい変身マジックができるのは、世界でたったひとりの本物のマジシャンだけよ」

レアは、ブライアンの上に体を投げ出すようにしてキスした。

ブライアンの胸でレアの裸の胸が押しつぶされた。

ブライアンは、太い腕で、その小さな赤毛を包み込んだ。

「さて、この際……レア、僕は君を、さらにあるものに変身させようと思う」

レアは、驚いてきいた。

「えっ……何に？」

ブライアンは、両手を忙しく動かし、レアの全身を愛撫した。にもかかわらず、レアは、なにか固くて金属的なものが、左手の指を魔法のように滑るのを感じた。薬指のつけ根にすっぽりとはまりこんだそれは、指輪だった。

ブライアンは、転がるようにして、今度はレイの上に位置を変えた。

「僕は君を変身させる。僕のガールフレンドから……僕の……妻に」

「ブライアン……」

レアは、自分の中にブライアンが入ってくるのを感じながら、言った。

「その変身、あたし、よろこんで……受け入れるわ」

二人とも、それ以上、なにもしゃべらなかつた。

言葉はもう、必要なかった。

CopyRight (C) 1998 by Brian

Based on the text FictionMania

Translated by Rino Maebashi

この「プレスト・チャンゴ」は、ブライアンさん作のオンライン小説“Presto Chango”を、前橋梨乃が翻訳したものです。原作著作権はブライアンさんが、翻訳著作権は前橋が保持します。個人で楽しむ以外、無断でのコピーを禁止します。